

---

# 苦勞人なホストと召喚獣

リファ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

苦勞人なホストと召喚獣

### 【Nコード】

N1570T

### 【作者名】

リファ

### 【あらすじ】

普通じゃない生活を送ってきた十六夜大地。文月学園で彼はこれまた普通じゃない環境で過ごすことになる。

更新ペースは割と遅いです。何せ、初めて書いたもので

ちよくちよくタグ等が変更していくと思います

## キャラ設定

十六夜 大地 (いざよい だいち)

4月16日生まれ A型

身長：170?

体重：57?

趣味・特技：菓子作りと研究

成績：得意科目の物理・化学は450点以上

他の科目でも300点は取れる

家族構成：父・姉

性格：基本、冷静沈着。しかしツツコミ担当(謎)

本作の主人公。

中学生時、フランスに留学していた、いわゆる帰国子女。

留学先では寮で一人暮らししていたので家事スキルは有る。

留学前は母や姉に甘え気味だったが、一人暮らししていたおかげで改善された。

過去の事もあり、留学先の学校では女性優遇の態度を取っていた。

しかし、姉と幼馴染の愛子には時々酷い目に合わされる。

運動神経は良く、サッカー経験有り。

全体的なイメージはスウク。髪は襟足を伸ばし、結んでいる。

召喚獣

武器 方天画戟

装備 袖無しの装束& amp;袴(色は上下共に黒、帯は赤)

## プロローグ（前書き）

作者です。

設定を投稿してから間が開いて申し訳ないです

## プロローグ

十六夜大地が文月学園に入学してから二度目の春…

「はあ…」

大地は憂鬱そうにため息を吐きながら学校への道を歩いていた。

「朝から元気ないね。どうしたの？」

「ん？ああ、愛子か。」

隣に来て声をかけてきたのは工藤愛子。小学校の時から幼馴染だ。

「朝から姉ちゃんの行いに対するツツコミ祭りだな…」

「天音さんが何かしたの？」

「姉ちゃんの書き置きがあったんだ。その内容が…やっぱり言うの止めた。」

「凄い気になるんだけど」

気にしたら負けだろう。何せ内容が…

『生徒会の仕事があるので先に行ってます』

大地の事が大好きな天音』

このような他人に見せられる物じゃないからだ。ひとまず、大地はこの事から遠ざける為に話題を変えようとする…

「おはよう。十六夜、工藤」

むさ苦しい鉄人の声が聞こえた。

「おはようございます、西村先生。」

「おはようさん、鉄人先生。」

ゴツ

「教師に対する態度を直せ十六夜。ほら工藤、振り分け試験の結果だ。」

「あ、ありがとうございます。」

鈍い音と、封筒を渡すやり取りをする愛子と鉄人。何かがおかしい。殴られた大地は頭を抑えながらそう思っていた。

「あれ、大地の分は無いですか？」

「ああ、十六夜のは…」

「…愛子、行くぞ。」

大地の分が渡されてないことを愛子は聞こうとした。しかし、鉄人が答える前に大地が愛子の手を引っ張っていった。

「ど、どうしたのさ大地。急に不機嫌そうな顔して…」

目的地まで来た大地は掴んでいた愛子の手を離した。大地が掴んだ部分が赤くなっていた。

「まあ、理由は色々あるんだが…それよりも愛子のクラスはどこになっただ？」

「見る前に大地がここまで連れてきたんでしょ。」

「そう言えばそうだったな。」

失笑する大地に呆れながらも、愛子は封筒の中を確認する。

「…あのさ、大地。」

「何だ？」

「わかっていてここに連れてきたんでしょ？」

愛子の言うことはAクラスの教室。そして、愛子のクラスはAクラスだ。

「まあ、Aクラスに入れたんだし良いじゃないか。それじゃ、オレは行くわ。」

「ってどこに？そっちは旧校舎だけど…」

「事情は後で話さ。オレの行くクラスは…Fクラスだ。」

## 1話 大地とFクラスの仲間達

啞然としている愛子を横目に大地は旧校舎にあるFクラスの教室へと向かった。

「いくら何でも…これは酷いな。」

教室の前に立つと、それを実感する。

先ほど見たAクラスの教室はどここの娯楽施設だと思っただと設備が充実していた。それと比べると、Fクラスは月とすっぽんだ。

「さて、このクラスに女子は何人いるのかな。」

そんな期待をしながら、大地は教室の扉…と言っよりも、引き戸を開けた。

そこで大地が見た光景は…

「うん、軽く目の毒だな。」

男一色。まだ全員は揃ってはいないだろうがここまで、期待を裏切られると思っていなかった。すると一人の生徒が声をかけてきた。

「大地。お主もFクラスになったのか？」

声をかけてきたのは大地の友人の木下秀吉だ。

「まあ、な。そういう秀吉もだろ？」

「そうじゃな…じゃが、お主がこのクラスと言っるのは不思議なもの



「じゃな。」

秀吉が不思議に思うのも無理は無い。大地の本来の成績はAクラスに入れるほどだからだ。

「色々、理由があるんだよ。」

「そうかの…しかし、大地と同じクラスなれたのは嬉しく思っているのじゃ。」

「だな。親しくなれたとは言え去年は違うクラスだったし。」

付き合いはそんなに長くないが秀吉といるとき大地は気楽にしているらしい。

秀吉と雑談しているうちにHRの時間になり、大地は席についた。無論、秀吉の隣だ。とは言ってもFクラスの設備は畳に座布団、卓袱台だから席に着くと言うのは合っていないだろう。すると、一人の生徒が教卓の前に立つ。

「大地よ、あ奴は坂本雄二。ワシの友人の一人じゃ。」

「なるほど…だがそいつが何で教壇に立つ必要があるんだ…」

大地はその事を聞こうとしたが…

「すみません、ちょっと遅刻しちゃいました」

「さっさと座れウジ虫野郎。」

遅れて入ってきた人物に対して、坂本は言い放つ。酷い言い種だ。

「あれ、雄二何やってんの？」

遅刻した男子は坂本の事を名前で呼ぶ。どうやら、この二人は親しいようだ。つまりは秀吉とも親しいことになる。そう考えて秀吉を見ると苦笑いしていた。

「あゝ、ちよつと通して貰えますか。」

「あ、すいません。」

遅刻した生徒は慌てて席に着く。坂本も自分の席に戻った。後から入ってきたのは初老の男性だ。

「えゝ、私がこのFクラスの担任の…福原慎です。どうぞよろしく」

担任になる福原教諭が黒板に名前を書こうとしたが、やめた。どうやら、チヨークすら無いようだ。

「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。」

廊下側と言つと…秀吉からだ。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

秀吉が簡単に済ませる。改めて見ると女と間違えそつだ。実際、大地は初対面の時に間違えていた。

「……土屋康太。」

小柄な生徒が名前だけの自己紹介をする。寡黙な人物のようだ。

「島田美波です。日本語はある程度話せますけど読み書きが苦手です。ドイツにいたので。趣味は」

ここに来て念願の女子生徒だ。何故気づかなかったのが不思議だが置いておこう。しかも帰国子女。フランスに留学していた事のある大地としても話が合いそうだ。

「趣味は吉井明久を殴る事です」

ピンポイントすぎる趣味だが自分が狙われているわけではないので大地は気にしないでいた。島田はあの遅刻した生徒に手を振っていた。彼が吉井明久なのだろう。

「十六夜大地だ。よろしく。」

自分の番が来て簡単に済ませる。その後も、簡単な自己紹介が続いていった。そして、吉井明久の番になって…

「コホン。えっと、吉井明久です。気軽に、ダーリンって呼んでください」

『『『ダアリーン！！』』』

吉井のアホな台詞にアホな連中が呼応する。もちろん、大地は参加しない。

そもそも、女子が一人しかいないクラスでその発言はねえだろ大地は吉井の事をアホと呼びたくなかった。

後何人かで終わりかけた時教室の引き戸が開かれた。

「すみません…遅く…になりました…」

入ってきたのは意外にも女子生徒だ。

他の連中も驚いていて教室内が騒がしくなった。

「ちょうど良かった。今自己紹介をしている所なので、姫路さんもお願ひします」

「あ、はい。姫路瑞希です。皆さん、よろしくお願ひします」

「あの、質問があります」

姫路は丁寧にお辞儀までした。

すると、既に紹介を終えた生徒が手をあげた。

「は、はい、何ですか？」

「何でここにいるんですか？」

普通の学校なら失礼であろう質問をした。

だが、それは大地も思っていた事だ。可憐な容姿で人目を引く姫路は学年二位の成績を記録していて、大地もそれには適わない。そんな彼女だからAクラスになったのだらうとここにいる誰もが思っているはずだ。

「そ、その…振り分け試験の途中、熱を出してしまいました…」

その言葉を聞き、誰もが納得した。試験の途中退席は無得点扱いとなる。姫路はそのため、Fクラスになったわけだ。大地も似たような理由でここにいる訳だが。

そんな姫路の話を聞いてクラスの連中がちらほらと言ひ訳を言ひ始める。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに…』

『ああ、化学のテストだろ？あれは難しかった』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて心配になってな…』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて…』  
『今年一番の嘘をありがとう』

こんな連中と一年間共に過ごせと言うのか  
想像以上のバカさに大地は頭を抱えなくなった。  
そんな中、姫路は連中から逃げるように吉井と坂本の隣の空いている卓袱台に着いた。色々やり取りをされていて、吉井が慌てふためいている。

「はいはい。その人たち、静かにしてください」  
「あ、すいませ」

福原教諭が吉井達に手をパンパンと鳴らして警告を発したら…

バキッ バラバラバラ…

突如、教卓がゴミくずと化した。

「…替えを用意してきますので少し待っていてください」

そう言つて福原教諭が教室を出て行く。それから間もなく、吉井と坂本も教室を出る。

教卓を運ぶ手伝い…と言う訳でも無いようだ。

それから、程なくして三人が戻つて来た。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします。」  
「えー、須川 亮です。趣味は…」

特に何もなく淡々と自己紹介が済んでいく。

「坂本君、キミが最後の一人ですよ。」  
「了解」

教諭に呼ばれ、坂本が教壇に立つと貫禄があるように見える。

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

クラス代表と言っても、最低クラスの代表だからあまり良いものでもない。だが、坂本は自信に満ちた表情で、こちらを向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。早速だが、皆に一つ聞きたい。」

そう言つて、坂本は全体を見る。見てるのは、主にこの教室の酷い設備だ。

「Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしい。それに比べてうちのクラスはこんなボロい設備だが…」

そこで坂本は一旦区切る。そして軽く呼吸をして言い放つ。

「不満は無いか？」

『『『大ありじゃあ！！！！』』』

Fクラス生徒（一部除く）の魂のこもった叫び。まあ当然ではある。そんな叫びを聞いて坂本は笑みを浮かべながら言う。

「そこで皆に提案がある。俺たちはこれから…試験召喚戦争を仕掛けようと思つ」

1話 大地とFクラスの仲間達（後書き）

時間がかかった上に途中から主人公台詞無し。

こんな感じで大丈夫なのかと心配な作者です

## 2話 試験召喚戦争

Aクラスへの宣戦布告…。

それはこのFクラスにとって無謀な提案にしか思えない。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるのは嫌だ」

「姫路さんがいれば何もいらぬ」

そんな声がいたる所から上がる。

確かに、誰が見ても戦力差が明らかだよな

文月学園には『試験召喚システム』と呼ばれる物がある。これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦うシステムで教師の立会いの下で行われる。更に、文月学園のテストには上限が無く、解けば解くほど召喚獣が強くなるわけだ。

しかし、正面から戦うとなるとAクラス一人に対して三、四で勝てるかどうか怪しい。

「そんな事は無い。必ず勝てる。いや俺が勝たせてやる。」

「そこまで言えるって事は何かしらの根拠があるって事だよな？」

クラスの皆が思っている事を大地が代弁するかのように坂本に尋ねる。

「なければ言わないさ。このクラスにはそれができる奴が何人もいる。それを今から説明してやる。」

得意気に不適な笑みを浮かべ壇上から見下ろす坂本。



「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを除いてないで前に来い。」

「……!!」

「は、はわっ」

必死になって否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。姫路は今気づいたのか慌てて裾を抑えて遠ざかる。土屋は顔についた畳の跡を隠しながら壇上にかかる。

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者だ。」

土屋康太は知らなくても、ムツツリーニという名前は大地も知っていた。男子生徒からは畏敬と畏怖、女子生徒からは軽蔑の意を込めて呼ばれる名だ。

「????」

姫路はどうやら知らないみたいだ。どう考えても、ムツツリスケベの事だと言っのに。

「…秀吉。坂本はともかく、吉井や土屋と仲良いとなるとお前の交友関係が心配になるぞ。」

「ま、まあ皆悪い奴では無いし楽しい奴らじゃとワシは思っておるぞ。」

「それに、木下秀吉もいる。」

「む、ワシもか？」

突然、坂本に名を呼ばれて驚く秀吉。学力はあまり良いわけでは無いが演劇に関しては相当なものだ。

「おお…！」

「ああ、アイツ確か木下優子の…」

「木下優子と言えば、ライバルから恋人に発展させた十六夜大地もいるな」

「とりあえず、恋人に発展させたという所は否定させる」

自分が戦力に挙げられた事よりも、秀吉の双子の姉、優子との関係に大地は憤怒する。確かに、学力において二人は上位にいたし優子からはライバル視されていた。

確かに、学力において二人は上位にいたが優子からは敵視されていた。大地自身、学力の近い女子生徒と言う認識でしかない。

「あの木下優子と恋人同士だと…？」

「羨ましい限りだ…」

「たった今否定したのに信じるなよ」

「意外じゃな…姉上に恋人がおつたのは…」

「お前も信じるな秀吉！」

別の意味で頭が痛くなりそうになった。

「まあ、十六夜が誰と付き合おうと関係ないが貴重な戦力って事は覚えておいてくれ。無論、俺も全力を尽くす」

「確かに何だかやってくれそうな奴だ」

「坂本って昔、神童とか呼ばれていたよな？」

「じゃあ、振り分け試験の時は姫路さんや十六夜みたいに体調不良だったのか」

「つまり、Aクラスレベルが三人もいるってわけだな！」

自分の事をさらりと流されたことはともかく、士気は上がっている

のはわかる。

「それに、吉井明久もいる」

そして一気に下がる。

「ちょっと雄二！せっかく皆のやる気が出ていたのに…」

「黙っているバカ」

この二人は本当に友人なのだろうか。それとも悪友と呼ぶべきか。

「そのバ…吉井明久はな…『観察処分者』だ」

バカと言い掛けていたが既に一回言っているため意味がない。その証拠に吉井が怒りにふるえている。

「あの…観察処分者ってどういうものなんですか？」

「ああ、観察処分者って言うのはお茶目な十六歳の…」  
「バカの代名詞だ」

姫路に吉井が教えようとするが坂本がそれを遮る。実際間違っただけではない。観察処分者は成績が悪く学習意欲の無い人間に与えられ、教師の手伝いをさせられる。

つまり、姫路のような優等生には全く関係ないものだ。知らないのも無理はない。

「観察処分者って事はデメリットしかない奴がいるって事じゃねえか？」

「気にするな。どうせいても変わらない」

「雄二、そこは僕をフォローしても良いところだよな？」

「とにかくだ。俺達の力の証明としてDクラスから征服しようと思  
う」

「うわ、見事に無視された！」

「観察処分者つて事はデメリットしかない奴がいるつて事じゃねえ  
か？」

「気にするな。どうせいても変わらない」

「雄二、そこは僕をフォローしても良いところだよな？」

「とにかくだ。俺達の力の証明としてDクラスから征服しようと思  
う」

「うわ、見事に無視された！」

こいつほど哀れな人間は中々いないだろう。

「皆、この境遇は大いに不満だろ？」

『当たり前だ！』

「なら全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おお！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ  
！」

『うおおー！！』

クラスの雰囲気には大地は圧された。

「すごいもんだな…：一気にやる気に満ちてるぞ」

「そう言うお主はやる気なさそうじゃな」

「ああ、ない」

大地の場合、設備に不満は無い。あるとしたら受けられなかった生  
徒に対する扱いだ。それ故に試召戦争するのは気が進まない。

「騙されたあ！」

Dクラスへの宣戦布告の使者をやらされていた吉井がボロボロになつて帰つてきた。うるさい奴だ。

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ！使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「少しは悪びれるよ！」

この二人は本当に友人なのだろうか？大地は何度も考えてしまう。

「それより、今からミーティングを行うぞ。もちろん、十六夜も参加だ」

「何でオレも参加することになるんだ」

「お前も戦力の一人だからだ」

「それだけじゃないだろ？」

「まあな」

面倒だが仕方なく大地も付き添う事にした。他にも秀吉や姫路、後から土屋、島田、吉井と続く。

屋上

「明久。宣戦布告はしてきたな」

坂本がフェンス前にある段差に腰を下ろす。大地達もそれにならつて各人、腰を下ろした。

「一応、今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼飯ぐらいはまともな物を食べるよ？」

「そう思うならパンでも奢ってくれと嬉しいんだけど」  
「え？吉井君ってお昼は食べない人なんですか？」  
「金が無いだけだろ」

今の件からしてそうとしか考えられないが…

「いや、一応食べてるよ」

「…あれは食べてるとは言わないだろ」

坂本の横槍が入る。

「何が言いたいのさ」

「お前の主食って…水と塩だろっ?」

ここに都会にいながら無人島生活を送ってる人間を見つけた。

「砂糖だっって食べているさ!」

「食生活が普通とかけ離れているぞ」

思わず、憐れみの視線を送ってしまう。

「ま、飯代まで遊びに使うからだな」

「し、仕送りが少ないんだよ!」

「お前の生活そのものがおかしいからな」

仕送りをしてもらってると言うことから多分一人暮らしなのだろうが、食費はきちんとしないとまずい。

「…あの、良かったら私がお弁当作って来ましようか?」

そんな吉井を不憫に思ったのか姫路が優しい言葉をかける。

「え、良いの？姫路さん」

「はい、明日のお昼で良ければ」「良かったじゃないか、明久。手作り弁当だぞ？」

「……ふーん、瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

嬉しそうにする吉井に対して棘のある発言をする島田。

「あ、その…皆さんにも…」

「俺達にも？良いのか？」

「はい、嫌じゃなかったら」

どうやら、吉井だけに作る訳ではないみたいだ。

「それは楽しみじゃのう」

「……（コクコク）」

「…お手並み拝見ね」

「そう思うならお前も作ってくれば良いだろ」

「え、いや、ウチはその…遠慮しとく」

こうして見ると…姫路と島田が誰の事を好きかわかりやすいな。

「十六夜君はどうしますか？」

「ん？ああ、オレも別に構わないよ」

「わかりました。それじゃ、皆に作って来ますね」

嫌そうな顔一つしない姫路。

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな…」

そんな彼女を吉井は褒める。

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のことを好き「明久、今振られると弁当の話が無くなるぞ」にしたいと思っていました」

いきなり、告白しようとした吉井。ある意味勇者だがそれと同時にとんでもないことを言っていた。

「明久、それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「お前はたまに俺の想像を超えるな」

「だって…お弁当が…」

「坂本、話が逸れてるからな」

ここまで来ると流石に不毛だ。吉井の自爆で空気が不味くなる。

「そうだったな」

「雄二、気になっておったのじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？」

「そう言えば、確かにそうですね」

「まあ…当然考えがあったのさだ」

「…Eクラスは腕試しにすらならないからだろ」

大地はそう考えている。実は教室に入る前にEクラスを覗いたが運動系の部活に所属している者が殆どで、成績の良い奴がお世辞にもいなかった。

「その通りだ、十六夜」

「でも、クラスでは一つ上だよな？」

「振り分け試験の時点ではな。実際はところは違う。お前の周りに



いる面子を見てみる」

坂本に言われて吉井が見回してみる。

「美少女が三人と馬鹿が二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「……………(ポツ)」

「ま、吉井ったら正直ね」

「ええっ!?!君達が美少女に反応するの!?!」

「そもそも、美少女の人数がおかしいからな」

反応したのは坂本、土屋、島田の三人だからだ。

「まあまあ、皆落ち着くのじゃ」

「そ、そうだな…」

秀吉に宥められて、坂本は呼吸を整える。

「要するに、だ。姫路と十六夜に問題のない今、正面から行けばEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上、Eクラスとやるのは時間の無駄だ」

「?それなら、Dクラスと戦うのは厳しいの?」

「ああ、確実に勝てるとは言えない」

「なら最初からAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな、今後の景気づけにしたい。それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

大地としては、どんな作戦か聞こうと思ったが…

「あ、あの!」

珍しく大きな声を挙げた姫路に遮られた。

「どうした、姫路」

「さっき言いかけた、って…吉井君と坂本君は前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それはな…さっき姫路の為にって明久が」

「それはそうと！」

吉井が坂本の台詞を遮るように大きな声を出す。こいつも、わかりやすいものだ。

「さっきの話、Dクラスに勝てないと意味がないよ」

「お前らが俺に協力してくれたら、負けるわけがない。それに、ウチのクラスは…最強だ」

坂本が言い切った。だが、不思議にも大地はそう思っていた。

「いいわね、面白そうじゃない！」

「そうじゃな、Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……(グッ)」

「が、頑張ります」

「まあ…協力はしてやるか」

「そうか、では作戦を説明しよう」

坂本から告げられた作戦に大地達は耳を傾けた。

### 3話 Fクラス 対 Dクラス

Dクラスとの試召戦争が始まった。現在、秀吉率いる先攻部隊が最前線にいる。その後方に吉井率いる中堅部隊が控えている。大地はどちらにも参加せず、姫路と共に補充試験を受けていた。

「…ずっとこうしてるのも、退屈だな」

「そう言うな。二人は今回の作戦の要だからな。しっかり点数を稼いでくれ」

「は、はい。頑張ります！」

「やれと言われたらやるだけだ」

坂本に改めて今回の作戦の重要さを言われて、姫路は気合いを入れ、大地は軽く返事をする。

「しかし…姫路が無得点になった理由は知ってるが、十六夜はどう言った理由なんだ？」

「ああ、その事か…単純に受けてないだけだよ」坂本の質問に大地は答える。

「受けてない理由は…聞かない方が良いか？」

「そうしてくれると助かる」

こう言ったことは個人の事情があり、まだ会って間もない人間に話す必要もない。

「ま、Fクラスが勝つのに協力してくれれば充分だから、無理に聞きはしないさ」

あくまで、試召戦争の事を重視している。最もな考えだ。

「ああ、そつだ横田」

ふと、何かを考えついたのかクラスメイトの横田を呼び出す。何かメモを渡したが、その内容に「コロス」と言う字が書いてあったのは見なかった事にした。

「そう言えば姫路」

「はい、何ですか？」

「成り行きで今こうしているけど、姫路もこの設備に不満があるのか？」「不満、ですか…いいえ、特に無いですよ？」

意外な答えが帰ってきたのに大地は目を見開いた。姫路は体力がある訳じゃないから勉強するなら環境は良い方が、と思うと思っていた。

「勉強をするだけならどこだってできますし、それに…」

「それに？」

「この教室、好きな席に座れますし…（／／／）」

後の方は、照れながら言ったのかあまり聞き取れなかったが、わかったことは一つある。

「…姫路からしたら勉強をする事よりも、吉井という方が大事だもんな」

「はわっ！？いい、いきなり何を言っんですか！？」

あてつけて言ったのだが、凶星のようだ。わかりやすい反応でちょっと楽しめている大地だった。

「冗談だ。あまり気にすんな」

「そ、そうなんですか…?」

「…十六夜、からかうのはその辺にしとけ」

「試験はちゃんとやってるんだ。少しの息抜きはしても良いだろ」

坂本が注意してくるが、顔は笑っている。おそらく、大地と似たような考えを持っているだろう。

「秀吉、無事だったのか」

「なんとかの。今は明久達に任せてワシらは点数の補充をしに来たのじゃ」

「そうか。なら、早く補充試験を受けてくれ。と言っても全部は無理だな」

「わかっておる」

坂本の言つとおりだろう。全科目受けてたら吉井達が保たない。大地や姫路は別だが。

「…そういえば十六夜に確認することがあつた…姫路」

坂本は大地ではなく、何故か姫路の名を呼んだ。

「なんですか?」

「この学園に、『文月のホストクラブ』って呼ばれてる奴がいるのを知ってるか?」

「名前だけなら知ってますけど…会ったことは無いです」

突然、何を聞いているのだろうか、周りの者は思うが大地はそう

は思っていない。…その呼び名の人物を知っているから

「坂本。それは試召戦争には関係ないんじゃないか？」

「そうでもないぞ、『文月のホストクラブ』さん」

「……っ！」

そう言う坂本の顔は笑っている。わかっけてこの話をしたのか。

『文月のホストクラブ』

それは、あくまで女子生徒の間で通ってる名で、実際やってる事は普通の悩み相談だ。「ほ、本当なんですか！？十六夜君！」

突然、姫路が迫ってきて大地は後ろに倒れた。

「…ああ、本当だよ」

ここまでの食いつきの良さは相談にのってほしいと言っているようなものだ。

「ぜひ、ぜひ聞いてほしいことがあるんですが…！」

「聞くのは構わないがそれは後にして、ひとまずどいてくれないか？」

「え…？」

大地に言われて、姫路は今何をしてたのかを認識した。端から見れば、姫路が大地に迫って押し倒してるように見えるからだ。

「う、ごめんなさい十六夜君！」

顔を真っ赤にして大地の上から動いた。

「…本人だったとは驚いたな」  
「気にする所はそこかよ」

坂本の呟きに、大地は服を整えながらツッコむ。

「いや、半信半疑で言ってみたらまさかの反応に驚いてな。色々すまん、十六夜」

「謝るなら他の連中を大人しくさせてくれ」

あからさまに大地に対して発している殺気が気になって仕方なかった。と言うよりも手にしているシャーペンをこちらに投げてきそう  
で、大地はは逃げようと思っていたが…

ピンポンパンポン 《連絡致します》

校内放送が流れて全員の動きが止まった。この声は…須川だろうか。

《船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています》

どうやら数学の船越先生（45歳 独身）を呼ぶみたいだ。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

どんな理由で呼び出してんだよ!?

しかし、大地にとってありがたかった。自分に対して向けられていた殺気はこの放送でうやむやに出来たからだ。

「まさか…吉井君が年上好きなんで…」

その代わり、吉井が色々面倒な事になったが…気にしなかった。

「坂本、オレも姫路も補充試験終わったぞ」

「そうか、なら俺達も打って出るぞ」

「坂本君も行くんですか？」

「大将自ら出るのは危険だぞ」

試召戦争が始まった段階で代表である坂本の居場所は公表されている。そんな状態で前線に出るのは自殺行為だ。

「俺がやられる前に二人がDクラス代表を倒せばそれで良いさ」

「簡単に言うけどな、向こうも代表の周りに護衛ぐらい…」

そこで、ふとあることを考えた。単純にFクラスの人物が行けば警戒される。そうじゃない人物なら…

「そう言う事か…」

「どうしたんですか？」

「いや、坂本の言う事に納得できてな」

「わかったなら、行くぞ」

「オレ達は別ルートで、な」

二人はニヤリと笑っていたが、姫路はよくわかっておらず、首を傾げていた。

大地と姫路は一階を経由してDクラス代表の後ろに周り込んだ。戦況は…吉井がDクラスの代表、平賀と対峙していた。



「ちくしょう！あと一步でDクラスを倒せるのに！」

「何を言うかと思えば彼氏クン。いくら防御が薄く見えてもFクラスの間人間が近づいたら近衛部隊がいるに決まってるだろう？」

それはごもつともだ。気づかない方がどうかしてる。

「吉井君、船越先生と付き合うことに…」

「まだ信じていたのか…」

さっきの放送が嘘だと言うことにまだ気づいていない姫路に大地は呆れた。

「まあ、お前じゃ近衛部隊にすら勝てないだろうね」

「…そうだね。僕だと近衛部隊を相手にするのが精一杯だ」

平賀が好き勝手言っているが吉井は動じていない。どうやら、こちらの存在に気付いたのだろう。

「だから…そっちはよろしく頼むよ、姫路さん、十六夜君」

「は？」

後ろから顔は見えないが「何を言っているんだ、このバカは？」という顔をしているだろう。そんな平賀に姫路が後ろから声をかける。

「あ、あの…」

「え？あ、姫路さんに十六夜。どうしたの？Aクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど…」

未だに現状を理解しきれてない。まあ、二人がFクラス所属だとは

誰も考えない。

「とりあえず姫路。用件を言おうか」

「はい。Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その…Dクラスの平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「…はあ、どうも」

「えっと…さ、試獸<sup>サモン</sup>召喚です」

「ついでに、Fクラスの十六夜大地も参加させてもらうぜ。試獸<sup>サモン</sup>召喚」

Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点

Fクラス 十六夜大地 現代国語 298点

VS

Dクラス 平賀源二 現代国語 127点

「え…?」

平賀が戸惑いながらも召喚獸を構えさせる。

しかし、これでは勝負にはならないだろう。姫路の召喚獸は背丈の倍ある剣を軽々と構えているし、大地の召喚獸は方天戟を曲芸のように振り回している。明らかに強そうな召喚獸だ。

「悪いな、手加減は出来ない」

「う、ごめんなさい…!」

相手の反撃を許さず、一撃でDクラス代表を下し、決着をつけた。

3話 Fクラス 対 Dクラス（後書き）

え〜ここらでちょっと説明事項があります  
所々に

どんな理由で呼び出してんだよ!?

と言った文章がありますが

これは大地の心の声とでも思ってください

後、大地の通り名の

『文月のホストクラブ』

これを本当は自己紹介の話で雄二に暴露させようと思っていたので  
すが失敗?したので今回に回しました

強引な持って行き方だったと思っています

4話 権力万歳(前書き)

オリキャラが一気に出ます

## 4話 権力万歳

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおー!』

その知らせを聞いたFクラスの勝ち鬨とDクラスの悲鳴が混ざる大音響が校舎内を駆け巡る。

「すげえよ!本当にDクラスに勝てるなんて!」

「坂本雄二様々だ!」

「やっぱりすごい奴だったんだな、坂本は!」

「坂本万歳!」

「良くやった十六夜!」

「姫路さん愛しています!」

代表の雄二や、大地達を褒め称える声がいたる所から聞こえる。

「あー、まあなんだ。そう手放しで褒められるとなんつーか…」

「なんだ、照れてるのか?坂本」

頬を掻きながら明後日の方を見る坂本。少し意外に思いながらも大地は冷やかす。

「そんな訳ないだろ。…二人共。良くやった」

そう言って手を差し出してくる。

「なに、オレは指示通りに動いただけさ」

「そうですね、坂本君の作戦が上手く言ったから勝てたんです」

大地、姫路の順で握手を交わす。

ここまで来たらもう英雄扱い。クラスの皆が次々に握手を求めている。そんな中、吉井だけが手首を捻りあげられている。

その手元から包丁が落ちた。

さっきの放送が原因、だよな？

ヴー ヴー ヴー ……

ふと大地の携帯が着信を知らせていた。確認すると愛子からだ。

「（ピッ）もしもし…」

『あ、大地。まだ学校にいる？』

「たった今、試召戦争終わった所だからまだいるぞ」

『なら良かった。今からAクラスの教室に来てほしいんだけど…』

「…ああ、わかった。すぐに行く」

『うん、それじゃまた後でね』

ピッ

用件は何かわからないが、早くしたほうが良いだろう。

「坂本、試召戦争が終わったならもう帰っても良いんだよな？」

「ああ、後は戦後処理だけだし構わないぞ」

「あいよ。それじゃまた明日な」

軽めの挨拶をして大地は教室に戻り、荷仕度をしてAクラスの教室に向かう。

「教室の中か…？」

向こうからの電話だったからさすがに授業中と言つ事はないだろう。そう、考えながら教室の扉を開けた。

「うおっ、これは凄いな…」

朝来たときは確認する殆ど暇が無かったが、今こうして見るとFクラスの教室とは差がありすぎる。

「さて、愛子は…ん？あれは…」

広いからか中々愛子の事を見つけれられない。だが他に見知った顔を見つけた。

あれは…翔子か？

あの髪の毛の長さは後ろからでもわかる。

「おーい、翔子ー」

「… 大地？」

「久しぶり、かな。翔子に聞きたいんだが、あい…工藤はいないのか？」

「… 愛子なら…」

名前の呼び方からして、愛子とは既に仲良くなったのか。どこにいるか尋ねようとしたが、それはできなかった。

ギョッ…

首を絞められているからだ。

「割と早かったね、大地？」  
「すぐに向かうって言っただろ、愛子」首を絞めてくる時の感触は昔から味わっていたもので、すぐに愛子だとわかった。大地は愛子の首絞めを器用に解く。

「ふと思ったんだけど、代表と大地って知り合いなの？」  
「… うん。去年、同じクラスだった」  
「翔子からはよく相談される事もあったしな」  
「へえ」

意外に思っているのだろう。愛子は二人を交互に見る。

「… ところで大地はここに何をしに？」  
「呼び出されたんだよ。愛子に」  
「… ? 同じクラスだからその必要はないはず…」  
「いやいや、オレはFクラスだから」  
「… 大地の成績なら、Aクラスに入れたはず」  
「試験受けなきゃ何も意味がないさ」  
「… そう… 大地と同じクラスなら楽しいと思っていたから、残念」  
「そう思ってくれていたのは光栄だな。それより愛子。オレに用があるから呼び出したんじゃないのか？」

愛子や翔子と同じクラスになれなかったのは大地も残念に思っている。だが、今考えるのはそれではない。

「うん、そうだったね。」  
「ちよつと待て、そう言いながら何でオレの手を掴むんだ」  
「じゃあ代表、ボク達はもう帰るから」  
「… うん、また明日」



「人の話を聞けよ！」

愛子は大地を無視して教室を出る。大地はそれに引っ張られる形で一緒に出る。

愛子に連れてかれて、大地はある教室の前に着いた。

「…愛子。これは今朝の仕返しか？」

「ん…それもあるかな？」

今朝の仕返し…つまりは、大地が愛子の手を引っ張ったことだろう。現に手首を強く掴まれている。

「でも、こうしていないと大地が逃げ出すかもしれないって言われていたからね」

「言われていたって誰にだ？」

「まあ、入ればわかるよ」

そう言いながら愛子は扉を開ける。

「天音さん、大地を連れてきたよー」

「!？」

「あ、ありがとう…愛子ちゃん」

大地は耳を疑った。今、愛子は何て言ったのだろうか…。

「す、すまんが愛子…ちょっとトイレに…い!？」

「だ…め。今逃げたら連れてきてもらった意味がないじゃない。」

「うぐ…姉ちゃん、これを見越して愛子に頼んだな？」

凶星をつかれた大地は恨めしそうに姉を見た。

「さう大地も来たことだし、始めよっか！」

「何をだよ！」

「役員会議 ああ、愛子ちゃん。大地はそのまま捕まえておいてね」

「はい」

大地の文句は聞いてもらえず、天音は本題に入ろうとした。何をするか聞いて、大地は今いる場所・生徒会室を見渡す。生徒会室の真ん中に大きい机があり、そこを囲うように二、三人の生徒が座っていた。

「あの、会長…聞いても良いですか」

「何かな？」

その内の一人が天音に尋ねようとする。その人物を、大地は知っている。

「何で彼を呼んだんですか？」

「こつちから言わせれば、何でお前がいるんだ？優子」

木下優子。大地の友人、秀吉の双子の姉だ。

「アタシは会長に聞いているの！あんたは黙ってて」

「ん、私の事は気軽に『天音ちゃん』って呼んでも良いのに」「いや、そう言うことではないんですけど」

優子は一年の時から同様、大地を敵視するように突き放す。天音は優子の質問とは関係ないことを言っていた。優子は脱力した。一方、他の二人、共に三年みただが女子生徒は腹を抱えていながらも笑いを堪えていて、男子生徒は呆れていた。

「わかつてる。大地をここに呼んだ理由でしょ？それはね」

そう言つて天音は一呼吸おいてから…

「私の弟、十六夜大地を副会長に任命するからです！」

「はあ！！？」

大地と優子は同時に反応していた。

「ちよつと待てよ姉ちゃん！何でオレを！？」

「そうですよ！アタシは反対です！」

「でもねえ、既に顧問の洋子先生と学園長から了承を得てるんだよ？」

「うぐ…」

二年Aクラスの担任である高橋洋子先生だけならともかく、学園長まで承認を得手いるとは…これには、二人とも何も言えない。

「ともかく、副会長の紹介等は終わり。それで、私が会長で大地の事が大好きな十六夜天音ちゃんです」

あっさりと自分の役職と名前を言う天音。一言余計だが、今の大地にそんな余力はない。

「じゃあ、次はワタシね。天音と同じクラスで、書記の紗野 亜希

よ。ヨロシクね、弟君」

先ほど腹を抱えながら笑っていた彼女の言う弟君とは言うまでもなく、大地の事だろう。大地は軽く返事をするだけにした。

「次は僕か。同じく三年の庶務、城戸 義高です。よろしく。」

三年だと言うのに丁寧な挨拶をした城戸先輩。まともな人がいて、大地は内心ほっとしている。それと同時に同情もした。

「…姉ちゃんの奇行には気をつけてほしい」

「どうしたの、大地」

「いや、まともな人間が姉ちゃんの被害にあつたらと思うとな…」  
大地の呟きに愛子が首を傾げる。天音の奇行の一番の被害者だからこそ言えるのである。

「えー、会計の木下優子です。大地以外はよろしくお願いします。」

大地の考えをよそに優子が自己紹介を終わらせる。

今の言い方に異議はあるがな。

「まあ、今日は顔合わせ程度にする予定なので何か質問がある人はいる？」

「それでは一つ確認程度に」

「はい、城戸君どうぞ」

「何故このタイミングで彼を入れたのか、理由を言っていたきたい」

真っ先に質問をする城戸先輩。大地自身聞いておきたいことだ。

「ん〜、これは学園長が提案したことなんだけどね〜。私と大地を  
広告塔にしたいんだって」

「何のために？」

姉の言葉に大地は呆れなくなった。

「確かに、お二人の評判はかなり良いですからね。学園のイメージ  
アップには繋がるでしょう」

城戸先輩は納得していた。大地もそう言われて悪い気はしない。

「そうね、姉弟揃って生徒会所属、成績優秀で共にAクラスだし」

紗野先輩も評価してくれているが…

これは言っておいた方が良いのかもしれない。

「…成績優秀なのは否定しないけど、オレ、Fクラスなんですよね」

そんな言葉に天音と愛子以外の三人は驚いていた。

「な、何でアンタがFクラスに！？仮にもアタシのライバルでしょ  
うが！」

「ひとまず、落ち着け」「そうよ、木下さん。弟君にも言い分はあ  
るんだから。でしょ？弟君」

かなり興奮状態になった優子を紗野先輩と共に宥める。

「まあ、振り分け試験を受けていないからFクラス入りしたってだ  
けなんで…」

「受けてないって…一体何があつたって言うのよ…」

理由は言ったものの、優子は納得していないみたいだ。

「他にも理由はあるけどね。大地の肩書きとか」

「肩書き…ああ、アレね？」

天音が話を変えた。正直ありがたかったりもする。

「そう、アレ。『文月のホストクラブ』」

「ここでその話かよ！」

これなら、まだ優子を宥めようとした方がマシだ。大地はさっきの感謝の気持ちを取り消したくなった。

「『文月のホストクラブ』って呼ばれてる大地にとっても良い話だよ？皆、生徒会の人なら気兼ねなく相談できるし」

「ああ、それならオレも考えたよ…」

「なら、異論はない？」

そう言いながら、天音は顔を覗き込んでくる。いつものパターンだ、これは。

「…ないよ」

と言うより、あのババアが承認したのなら異論の余地がない。

「よっし、それじゃ今日の役員会議はこれまで！今日は解散で」

天音の言葉で、この場にいる皆は下校した。

なんか、  
凄く疲れた…

#### 4話 権力万歳（後書き）

携帯が壊れて傷心中な作者です

ついに？大地の姉、天音さんが登場！

それだけでなくオリキャラも二人出ました

まあ、強引に話を進めた訳ですが（・・・；）

まあ、天音・亜希・義高の設定は出来上がり次第載せますm（  
|（m



## 5話 味覚音痴なら助かる

生徒会の会議が終わり、帰宅中。大地は愛子と一緒に自宅への道を歩いていた。天音は今日の夕飯の為の買い出しに行っている。

「今日は本当に疲れた……」

「新学期早々、試召戦争をするってよっぼど設備に不満があったの？」

「オレは別に無いんだがな……クラスメイトの九割が乗り気じゃ反対する気も起きない」

「Fクラスの設備って、そんなに酷いのかな……？」

「Aクラスと比べたらトンでもないものだからな。まあ、暇な時に来てみたら良いだろ」

「じゃあ、そうする」

興味深い事なのか、あっさりと行く事を決めた愛子。その後も色々話していたら、大地の住むマンションに着いた。

「じゃあ、オレはここだから」「うん、わかった。また後でね」

後でじゃないだろ、と大地は言おうとしたが、既に走り去ったから言えなかった。気にはしつつも、自宅のあるマンションの二階に向かい、鍵を開けて入る。

「……ただいま、母さん」

玄関にある母親の写真を見て告げる。もはや、大地の行動の一部だ。家に住んでいるのは大地と天音の二人しかない。母親は既に他界していて、父親は仕事でどこかにいる。だから家事は天音と二人で

こなさねばならないが、一年前からそうしているので特に問題は無い。

「…ホントに、色々あったな今日は…」

大地は天音に頼まれていたデザートを作るための材料を確認するために冷蔵庫を開けた。

「冷たくて、さっぱりした物にしてくれって言ってたから…まあ、無難にゼリーか」

デザートもとい、菓子作りは大地の趣味だ。元々、興味はあった事だしフランスに留学して学んで来たから、ある程度は作れる。

「なら、ボクはオレンジ味でね」

「…愛子。お前、何やってんだよ」

「入ってきたんだよ、窓から」

不意に聞こえた声の主は先ほど、家に帰ったハズの愛子だった。

「普通に答えんな。入ってくるなら玄関から入れ」

「でもね、大地の部屋から入るのが一番手っ取り早いんだよ」

「…何でオレの部屋なんだ」

「あれ、知らなかったっけ？大地の部屋って、ボクの部屋の向かいなんだよ」

「はあ!？」

本日三度目の素っ頓狂な叫び。ゼリー作りを中断して部屋に確認しに行ったが、愛子の言うとおりだった。

「愛子がこつちに文月学園に転校してきたのにも驚いたが…まさか引越してきた場所が隣のマンションだとはな…」

「しかも、ボクと大地の部屋は向かい合ってるからね。そればかりは自分でも驚いてるよ」

大方、自分の部屋を通り道にさせたのは天音だろう。いくら愛子でも、男の部屋に入るのは躊躇うはずだ。

「ただいま」

「天音さん、帰って来たね」

「ああ」

買い物袋を引っさげて天音が帰ってきた。

作っていたゼリーは冷やすだけなので、天音に台所を明け渡して自分は風呂掃除をする事にした。

「それで、何でうちに来たんだ？」

手早く風呂掃除を終えた大地は、愛子に尋ねた。

「それはね、天音さんに誘われてきたからなんだよ」

「姉ちゃんに？」

どついう経緯でそうなるのか、不思議だ。

「今日、愛子ちゃんには一仕事してもらったから、そのお礼にね」

「一仕事…ね」

その一仕事は、大地を生徒会室に連行しその場から逃げないようにすることだろう。しかし、頼まれていたとはいえ、愛子がそんな事する必要はない。

「ちなみに、今日の夕飯は愛子ちゃんの好物であるクリームシチューです」

「…お前、モノで釣られんなよ」

「いやー、いつもなら好物でも断ったんだけど今日に限って食べたくなったから…」

大地の恨めしそうな視線を、愛子は苦笑いしながら避ける。ついでに、大地にデザート指定をしたのはこの為だったのかとわかってしまった。

「さ、出来たよ」

「待ってましたー」

そうこうしている内に飯が出来上がった。とりあえず、行き場のない感情を飯を食うことで紛らわすことにした。

天音の作る料理はいつもと変わらず、上手だ。大地の作ったゼリーも高評価だった。

「そう言えば、Fクラスは試召戦争に勝ったんだよね？設備はどうしたの？」

「お姉ちゃんも、それは気になるな」

翌朝、登校中に二人から当然の疑問がかけられた。

「まあ…新学期早々に試召戦争を仕掛ける連中だから、Dクラスの

設備じゃ満足しないだろうし…交換はしてないだろ」

もつとも、代表の坂本の考えとしてはAクラスに勝つために必要なのだろうが。

「ねえ、大地」

「なんだ？」

愛子が上目遣いで大地の顔を見る。昔は殆どなかった身長差、今はあるだけにこれはかなり気恥ずかしい。

「Fクラスの最終的な狙いつて、うちのクラスでしょ？」

「…ああ、そうなるな。まあ、Fクラスの奴らからしたらAクラスの設備は魅力的だからな」

「やっぱね。そうなると、ボクと大地、戦うことになるんだ？」  
先ほどまでの空気はどこへやら。随分挑発的に言ってきた。

「なるだろうな。だが、その時に手加減は無しだからな？」

「もちろん、そのつもりだよ」

どんな形でも愛子との勝負は手加減する気にはならない。試召戦争に関心が無かった大地も、その気になる。

「ん。朝から微笑ましい光景、ありがとうございます」

天音のその言葉で思わず、二人は距離を取った。やはり、幼馴染とは言え顔を近づけていたのだから気恥ずかしさもあり、顔が熱くなつた。愛子も同じことを考えてるのか、顔を赤くして俯いている。

「…二人とも付き合い長いんだから気にすることないのに」

「「気にするって!!」」

「全く、姉ちゃんの考えてるのはいつも読めん…」

「ほう、大地にも姉がおったのか」

二人と別れた後、大地が独り言を言っていると後ろから声をかけられて、後ろに飛び退いた。

「…秀吉か…いきなり声をかけるな、びっくりするだろ」

「挨拶をしようと思ったのじゃが、興味深い事を言っておったのでな」

興味をもったのは秀吉にも優子という双子の姉がいるからだろう。

「まあ、気が向いたら紹介する。それより秀吉。昨日の試召戦争、あれからどうしたんだ？」

「そう言えば、お主は昨日を早く帰っておったな。Dクラスとは設備の交換せず、そのままじゃ」

Fクラスの教室に向かって正解だったようだ。昨日と同じように教室に入る。

「よう、十六夜。教室を間違えなくて良かったな」

「いきなり失礼な事を言うな、坂本」

先に来ていた坂本に憎まれ口を叩かれる。

「なに、昨日さっさと帰った奴が教室を間違えていたら面白いなと

思ってたな」

「お前、友達少ないだろ」

「さあ、気にしたことは無いな」

大地も軽く皮肉を言ったがあっさりかわされた。

今日はDクラス戦で消耗した点数を補充するための試験をする事になってる。昨日で全教科終わっていない大地も受けるつもりだ。

「おかげで彼女にしたいくないランキングが上がったじゃない！」

そんな時、島田と遅刻寸前で来た吉井の会話が聞こえた。と言うより、妙なランキングがあつた事に大地は驚いた。

「と、言いたい所だけどアンタにはもう十分罰が与えられているようだし、これぐらいにしてあげる」

島田は妙にあっさり引き下がった。

「うん、さつきから鼻血が止まらないんだ」

「そうじゃなくてね」

「ん？それじゃ何？」

「一時間目のテストは数学なんだけど…監督の先生、船越先生だつて」

その瞬間、吉井が教室を飛び出した。

「疲れたあ……」

四限目が終わり、昼休み。吉井が終わるなり、机に突っ伏す。四科自分のテストを受けたが大地も流石にこれは応えた。  
「よし、昼飯を食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

食い過ぎだ

坂本が勢いよく立ち上がって言うが昼食のメニューの異常さに大地は呆れた。

「吉井達は食堂に行くの？なら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別にかまわないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「……………（コクコク）」

島田と、いつの間にかそこにいた土屋も一緒にするみたいだ。

「大地も、一緒にどうかの？」

「オレは別に良いんだが、お前ら、あることを忘れてないか？」

「あること？」

秀吉に誘われたのであれば断る理由は無いが、これは確実に忘れてる。現に、吉井がアホ面して聞いているのだから。

「あの、皆さん……」

「あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ…お昼の事なんですけど、その、昨日の約束の……」

やはり、この事を覚えていたのは姫路を除けば大地だけだったようだ。



「おお、もしか弁当かの？」

「はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と、身体の後ろに隠していたバッグを出して来る。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かった」

嬉しそうに笑う姫路。実際は吉井に食べてもらえるのが嬉しいのだろっけど。

「…むー…っ。瑞希って、意外と積極的ね…」

「…オレが気づかなかつたら、お前ら学食に行ってたたる…」

してやられたような顔をしている島田と、ぼやく大地。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、教室ではなくて屋上にでも行くかのっ」

「こんな教室で頂くものでもないしな」

「そうか。それなら、お前らは先に行っててくれ」

「雄二はどこか行くの？」

「飲み物を買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

恐らく、それに大地は含まれてないだろう。

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」

「オッケー」

坂本と島田は財布を持って教室を出て行った。行き先は一階の売店あたりか。

「僕らも行こうか」

「そうですね」

「天気が良くてなによりじゃ」

「……………（コクコク）」

屋上には大地達以外誰もおらず、貸し切り状態だ。

「あの、あまり自信がないんですけど…」

そう言って、姫路が弁当の蓋を開ける。

「「おおっ！」「」

同時に歓声を上げる。弁当の中身は唐揚げにエビフライ、卵焼き等、定番のメニューが綺麗に詰まっていた。

「じゃあ、雄二達には悪いけど早速…」

「……………（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムッツリーニ！」

吉井が取ろうとしたが土屋がそれより早くエビフライを取り、口に入れる。

「そう慌てることはないだろ。こんなに美味そうな…」

ボタン ガタガタ…ガタ

大地が言い終える前に土屋が倒れ、震えだした。

「「「……………」」」

「わわっ、土屋君!？」

大地は秀吉と吉井の二人と顔を合わせた。

姫路は驚いて、配ろうとした割り箸を落とした。

「……………(ムクリ)」

土屋が起き上がった。

「……………(グッ)」

そして、姫路に向けて親指を立てる。美味いと伝えてるつもりだろうか。

「あ、お口に合いましたか？良かったです。どんどん食べてくださいね」

伝わったみたいで姫路が喜び、笑顔で奨める。今の土屋を見てそうなる訳がない。

(…二人とも、今のどう思う?)

姫路に気づかれないように口だけを小刻みに動かして吉井が聞いてくる。

(どう考えても、演技ではないの)

(相当ヤバいな)

(だよな)

(お主ら、身体は頑丈な方か?)

(正直、胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから)

(丈夫な方だが…あれを見て食う気にはなれないな)

(…ならば、ここはワシに任せてもらおう)

いくらなんでもそれは無謀だ。

(そんな、危ないよ!)

(大丈夫じゃ。ワシは胃袋の頑丈さに自信があつてな。ジャガイモの芽程度なら食っても平気じゃ)

ジャガイモの芽は食べるものではないはずだ。しかし、平気だと言  
うなら大したものだ。

(安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じて…)

「おう、待たせたな。へえ、こりゃ美味そうじゃないか。どれどれ  
…」

秀吉が頼もしい台詞を言い終える前に、坂本がやって来た。

「あ、雄二!」

吉井が止める間もなく、卵焼きを口に放り込み…

パク バタン ガシャガジャ…ガタガタ

ジューズの缶をぶちまけて倒れた。何という破壊力だ。

「さ、坂本一？ちょっと、どうしたの!？」

遅れてきた島田が坂本に駆け寄る。坂本は、先ほどの土屋と同様、痙攣を起こしている。吉井とアイコンタクトをとってるみたいだが内容はわからない。

「あ、足が…つってな…」

気を遣ってるのか、あからさまの嘘をつく坂本。大分無理はあるが。

「ダッシュで階段を昇ったからじゃないな？」

「うむ、そうじゃな」

すかさず、秀吉と吉井がフォローを入れる。

「そうなの？坂本って、これ以上ないくらい鍛えられてると思うけど…」

「ああ、島田さん。今手をついたあたりにさ」

吉井が腰を下ろす島田の手を指差す。

「ん、何？」

「さっきまで、虫の死骸があつたよ」

「ええ!?!先に言つてよ!」

吉井の大嘘だと言つのに、島田は驚いて避ける。まあ、女の子は虫が苦手って言うし、死骸なら尚更だ。

「ごめんごめん。とにかく、手を洗ってきた方が良いよ？」  
「そうね。ちよっと行ってくる」

島田はやむを得ず席を立つ。

「島田は中々飯にありつけないな」

大地は島田に半分同情した。

(明久！今度はお前が行け！)

(やだよ！僕だと確実にあの世行きだ！)

(ワシも、今ので遠慮したくなつたぞい…)

そして、再び始まる表情を変えない作戦会議。もはや芸の領域だ。

(と言うか、食べた坂本が言えば良いだろ。不味いって)

(女子を傷つける台詞を他人に言わせるか！？お前、それでも文月のホストクラブか！)

(お前が言った後にオレが慰めれば万事解決だ)

最も、それはただの追い討ちになるのだが。

(姑息だな、おい！)

(こつなつたら仕方ない…)

往生際の悪い？坂本に吉井が痺れを切らした。

「あ、姫路さん！あれは何かな！？」

「え？どこです？」

あからさまな嘘に引つかかる姫路。それに大地達も一瞬気を取られ…

(おりゃあ！)

(もごあ！？)

吉井が坂本の口に弁当をねじ込む。吉井の行動は天罰が下ってもおかしくないが、今は命が惜しいのだ。

「姫路。気のせいみたいだぞ」

「みたいですよ…あれ？もう全部食べたんですか？」

「雄二が全部食べたのじゃよ。それはもう凄い勢いで」

「とつても美味しそうにね。おかげで、僕らは食べ損ねちゃったんだ」

大地を含め皆、姫路を傷つけないようにはぐらかす。しかし、まだ終わってはいない。

「あ、大丈夫です。デザートも作ってきたので…」

(くそつ、もう一度雄二に…)

(いっそお前が食べ！お前のために作られたものだぞ！)

(僕が食べたなら死んじゃうじゃないか！)(…もうよい。ワシが行こう)

吉井に食わせる為に行動しようと思ったが、秀吉の言葉な止められた。

(そんな、秀吉にそんな危険なマネ…)

「…姫路。これ、スプーンがないと食べづらいぞ」

「え…？あ、そうですね。これは箸では食べられませんね。すぐ取ってきます」

大地は、時間を稼ぐために言った。無論、スプーンが無いのは事実だが。

「では、今の内に頂くかの。大地が作った猶予を無駄にはできん」

「すまん。これぐらいしか出来なかった」

「ごめん。ありがとう」

「別に死ぬわけでもあるまい」

そして、秀吉はデザートらしきものを一気にかきこむ。

「むぐむぐ…何じゃ。意外と普通ごばあ！」

自称、鉄の胃袋はあっさり撃沈した。

「…十六夜君」

「…みなまで言うな。後で、三人に美味いもんを奢ろう」

「…そうだね」

生き残った二人は、申し訳なさで腹が一杯になった。

「ところで坂本。次の目標はどこなんだ？」

「試召戦争の事か？次はBクラスを狙うつもりだ」

激しい昼食の後、復活した三人も含めてお茶をすする。ちなみに、島田は飯にありつけてはいないが寿命を縮ませなかっただけマシか。

「Bクラスね…勝算があるから言ってるんだろ？」

「まあ、そのためにDクラスを落とすわけだしな」



「そう言えば、昨日DクラスにあるBクラスの室外機がどうのこうの言ってたね」

設備上、そういう構造になっているのか。なら、別に問題ないか。

「でも、Aクラスを目標にしているのになんでBクラスと戦うの？」

大地も先ほどまでは吉井と同じことを思っていた。

「…正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスに勝つのは無理だ」

最優秀クラスのAクラスには五十人ほど生徒がいるが、その内の十人ほどが次元が違うと見てもいいだろう。少なくとも、代表の翔子や優子はそれに含んでも良い。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更するの？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

島田の台詞を引き継ぐように吉井が間に入る。

「Aクラス相手にクラス単位では勝てない。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに？どうやって？」

「…その為のBクラスか」

坂本の代わりのように、吉井の質問に大地は答えた。

「理解が早くて助かるぞ、十六夜」

「色々情報を繋いだら納得できただけさ」

疑問には思っていたが、Dクラスと設備交換しなかった理由と一騎打ちに持ち込むって言ったからわかったのだ。

「つまり、どういう事？」

「試召戦争に負けたら設備交換をするか悪化するかのどちらかだ」

話を理解できていない吉井に呆れながらも坂本は説明する。

「僕らの場合はこれ以上下がることは無いけどね」

「じゃあ、他のクラスはどうだ？」

「是非とも避けたい事だね」

「その考えを利用して交渉するんだ。Bクラスをやったら設備を交換しない代わりにAクラスへ攻めさせる。その方がBクラスもマシだからな」

入れ替えたらFクラス、Aクラス相手になら負けてもCクラス設備どう考えても後者の方がマシだろう。

「ふんふん、それで？」

「今度はそれをネタにAクラスと交渉だ。Bクラス戦直後に攻め込むぞってな」

「なるほどね。Aクラスからしたら連戦する事に意味ないもんね」

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力的にもそうじゃが… Aクラス相手に一騎打ちで勝てるのじゃろうか」

吉井がようやく理解した所で、秀吉が当然持つであろう疑問をぶっかけた。だが、坂本は不敵に笑い…

「その辺は考えがあるから心配するな。それより、今はBクラス戦だ。…明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったらBクラスに宣戦布告して来い」

「断るよ。雄二が行けば良いじゃないか」

細かいことを後回しにし、坂本は吉井に命令する。しかし、Dクラス戦の事があつたから吉井は断つた。

「仕方ないな…それならジャンケンで決めるか？」

「…雄二の場合、何かしそうなんだけど」

「なら、十六夜を代理にしよう。それなら問題ないだろ？」

「まあ、それなら問題ないよ」

「オレが大有りだバカ野郎共」

坂本がとんでもない提案をして吉井が受け入れる。大地からしたら迷惑だ。

「気にするなよ十六夜。心理戦有りであれば文句はないだろ」

「…ゴチャゴチャ言うのも面倒だから、ここはやろう」

本当は文句を言いたいが、心理戦有りならまだマシだろう。

「よし…それなら僕はグーを出すよ」

「ならオレはお前がグーを出さなかったら先ほどの事を姫路に話す」

「え」

先ほどの事と姫路の名前だけでわかったのか、吉井の顔が青ざめた。当然、姫路本人は何のことかわかっていない。

「ジャンケン…」

「わああっ！」

パー（大地）      グー（吉井）

「決まりだな。行つてこい明久」

「絶対に嫌だ！」

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

吉井は納得いかない顔をしているが負けは負けだ。

「それなら心配ないぞ。何故ならBクラスは美少年好きが多いからな」

坂本がその情報をどこから得たか気になるが、その場合、男女の比率も気になるところだ。

「そっか…なら心配ないね」

「でもお前、不細工だから…」

「失敬な！365度、どこから見ても美少年じゃないか！」

一年の日数と混じってしまった。

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「二人なんて嫌いだー！」

坂本と秀吉の指摘に吉井は涙しながら駆け出す。改めて思うが、吉井は馬鹿すぎる。Fクラスの中で群を抜いて。

放課後、吉井がBクラスに暴行を受けたのは言うまでもなかった。

## 6話 対Bクラス 前編

翌日

「午後はBクラスとの試召戦争だ。皆、殺る気はやるか」

『おおー！！』

教壇に上がった坂本がこちらを見下ろす。Fクラスの面々は気合十分とばかりに雄叫びを上げる。正直、うるさい。

「今回はBクラスの連中を教室に押し込む事が重要だ。そのために渡り廊下で負けるわけにはいかない。そこで、姫路には前線の指揮を執ってもらおう」

「が、頑張ります」

男のノリについていけないのか、引き気味な姫路。大地も若干引いているが。

「野郎共、きつちり死んでこい！」

『うおおーっ！』

それ、指揮官の言うことじゃなくね？

キーンコーンカーンコーン…

昼休み終了のベルが鳴り響く。Bクラス戦の開始だ。

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

意気揚々と、姫路率いる前線部隊が教室を出て行く。ちなみに、大地は教室に留まっている。

「なあ坂本。何でオレはこっちなんだ？」

「今回、お前の役目は俺の護衛だ。Dクラス戦と違って、俺が直接狙われる可能性があるからな」

「実力差があることを認めているから下せる判断だろう。しかし、そのために大地を護衛にするのは大袈裟ではないだろうか。」

「ところで十六夜。Bクラスの代表の事は知ってるか？」

「いや、うちとAクラス以外は知らないな」

「そうか。なら…ムッツリーニ」

坂本は大地と同様、教室に留まっている土屋を呼んだ。

「……………なんだ」

「Bクラスの偵察を頼む。ついでに、他のクラスの代表について調べてくれるか？」

「……………了解」

土屋は、その場から消えた。

「あいつは忍者か」

「ムッツリーニは隠密行動を得意としているからな」

そういう意味じゃ無いのだが、深く追及するのはやめた。

「そう言えば…何でAクラス代表…翔子の事は知っているんだ？」

「簡単に言ってしまうえば…友達になっているからだな」

「…本当なのか？」

大地は質問に答えただけなのだが、坂本の顔付きが変わった。

「去年、同じクラスだったし相談される事もあったんだ。あとは、成績が近かったからオレの方が意識してたな」

「それよりも、翔子が俺以外の奴と仲が良いことに驚きだ」

「まるで、『翔子は俺の女だ』って言い方だな」

「なっ…！あ、あいつはただの幼馴染ってだけだ！（／＼／＼）」

冗談半分で言ったのだが、かなりの狼狽えように大地は驚いてしまった。

「幼馴染ね…こりやただの偶然じゃないなあ」

「な、何がだ…」

「オレにも幼馴染がいて、そいつと翔子も仲が良いんだ。…ああ、ちなみに女だから睨むな」

流石に、坂本と愛子が知り合いということはないだろう。そうだったら色々面倒だ。

「…十六夜。お前、かなり性格悪いだろ」

「野郎相手にはな。女性に対しては紳士だ」

「……………雄二。偵察、終わった」

すると、土屋が戻ってきた。

「ムツツリー二か。報告を頼む」

「……………戦況は、姫路の活躍もあって、こっちが優勢」

「そうか。それで他のクラスの代表の事はわかったか？」



「……………ひとまず、BクラスとCクラスは確認した。Bクラスの代表は根本恭二」

「よりによってあの根本か…」

根本恭二と言う男は、とにかく評判が悪い。目的の為に手段を選ばない卑怯な男だ。大地としては名前を聞く事すら嫌になる相手だ。

「……………そしてCクラスの代表は、小山友香」

「…その情報、本当なんだよな」

「……………（コクン）間違いない」

「十六夜、Cクラスの代表と知り合いなのか」

「ああ…まあな」

土屋の報告に大地は耳を疑った。坂本も、そんな様子に気付いたのか、尋ねてくる。その時…

「失礼します」

いきなり、入ってきた男子生徒に三人は警戒した。

「お前…Dクラス代表の平賀じゃないか。こんな所に何の用だ」

「ああ、Bクラスの代表から伝言があるんだ」

「Dクラスの奴が何でBクラスの伝言を預かるんだ？」

入ってきたのは先日、大地が姫路と共に瞬殺した平賀だった。平賀の用件に、坂本だけでなく、大地と土屋も警戒する。

「Bクラスの間人だと、教室に入れなйдろ？」

「確かにな。…それで？伝言って何だ？」

「『協定を結びたい。至急、音楽室まで来てくれ』…だ、そうだ」

「…そうか。わざわざすまないな」

「気にしないでくれ。確かに伝えたよ」

そう言っただけで平賀は教室を去っていく。

「坂本…どうするつもりだ？」

「ひとまず、会って話すつもりだ。もしかしたらこっちが有利なるかもしれないからな」

大地はそう思えない。何か裏があると思っただけで済んでいる。

結局、前線部隊への伝言と引き続き偵察を指示された土屋を除いた数名で坂本の護衛をする事になった。

音楽室は一階にあるため、そこに向かう。

大地は、教室に戻るための道を確保の為に階段に一人残った。

「しっかし…友香がCクラスの代表ねえ…」

先ほどの土屋の報告を思い返し、感嘆の溜め息をつく。坂本達には知り合いとだけ言ったが、彼女も翔子と同様、一年時のクラスメイ卜だ。成績は大地に及ばないがクラスの互いに中心人物になってまゝとめていた。そうしていたからか、自然と親しくなっていた。

「オレがFクラスだと知ったら呆れるか罵倒してくるな…」

「そこで一体何をしているの？Fクラスの君」

ぼやいていたら突然別の声が聞こえた。女子だったが、面識がない。

「別に…退屈だからここでボーっとしてただけさ」  
「退屈だから…ねえ…」

面識はないが同じ二年生だろう。試召戦争中とは言え、他の学年は授業中だ。二年生は自習になっているが、抜け出す者もないわけではない。

「偶然にも、私も暇なの。だから話相手になつてくれない？」

「悪い、こっちは人待ちだからそういうわけにもいかないんだ」

「さつき退屈つて言つてたじゃない」

「待つてる間は、だ。それに、話相手にならもつなつてると思つが？」

自分でも、へ理屈を言っているなど思っている。

「それもそうね」

「……………」

坂本がBクラスとの協定を早く終わらせてくれないかと祈りたい。と思つていたが、女子生徒の様子が妙な事に気付いた。

「ところで、何であんたはここにいるんだ？」

「さつき言ったでしょ？暇だからこうして散歩してただけ…」

「教師を連れて散歩とは学園公認のサボリだな。Bクラスの間人は暇じゃない筈だ」

その言葉に、女子生徒の顔に焦りが出た。凶星なのだろう。

「…何で気付いたの？」

「全部本当みたいだな」

ちなみに、Bクラスの人間だと気付いたのは、Fクラスと呟いた時に近づいてきたからだ。教師の存在には薄々感づいただけで、鎌をかけてみたのだ。

「…布施先生！Bクラス『夏川千早』、彼に化学勝負を挑みます！」

夏川と名乗った女子生徒は、やけになったのか、隠れていた布施教諭を呼ぶ。

「やれやれ…ならその勝負、受けて立つ」

「『試験<sup>サモン</sup>召喚！』」

Fクラス 十六夜大地 化学 420点

VS

Bクラス 夏川千早 化学 251点

「え…？十六夜君って…Fクラスだったの！？」

夏川の目が点になっている。気づかずに話しかけていたのか。仕方がないからここは…大人しく戦死してもらおう。

「オレの得意科目だったのが、運の尽きだな」

そう言って大地は夏川の召喚獣を一撃で葬った。

「戦死者は補習うー…」

「ええ！？て、鉄人の補習は嫌よー！？」

「そうか…なら、趣味は勉強、尊敬する人物は二宮金治郎と素晴らしい人間にしてやるわ」

そう言う事じゃないだろ

どこから現れたかわからない鉄人が夏川を連れて（抱えて）行く。悲鳴を上げていたが大地は合掌する事しかできない。

「十六夜…今、女子の悲鳴が聞こえたんだが…」

「Bクラスの人間だったが、瞬殺してやった。で、鉄人に連れてかれた」

「そ、そうか…」

きつと坂本も、夏川の事を哀れんでいるのだろう。

「それより、協定の話は終わったのか？」

「ああ。ひとまず教室に戻ろう。クラスの連中が心配しないうちにな」

「そうだな」

戻ってきた二人が見たのは荒らされた教室だった。

「誰がやったか、なんて考えるのも馬鹿馬鹿しいな」

「ああ…根本の指示でBクラスの連中がやったんだろうな」

それにしても、補給に影響は出るものの地味な嫌がらせだ。

「…つわあ、こりゃ酷い」

「まさかこう来るとはのう」

戻って来た吉井と秀吉も見るとなり唖然とする。

「まあ、作戦に支障はないし、気にする必要はないな」

「雄二がそう言うのなら良いけど…。それはそうと、どうしてこんなになってるのに気づかなかったの？」

「協定を結びたいと申し出があつてな。調印の為に教室を離れていた」

気にしない坂本に吉井が突っかかる。だが、理由を聞くとあっさり納得した。

「協定じゃと？」

「そう言えば、オレも内容はまだ聞いてなかったな…」

夏川の襲撃もあつたからだが、面倒になるから言わずにおこう。

「ああ。4時までには決着がつかなかったら戦況そのままにして、続きは明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方が有利になるんじゃない？」

「姫路以外は、な」

「あ…」

姫路に好意があるだろう吉井は、罰が悪そうな顔をした。

「Bクラスを教室に押し込めば、今日の戦闘は終了だろう。そうなると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうじゃな、今の所本陣は落とせそうにないからの」

「その時は、姫路と十六夜の戦力が重要になる。片方が限界になったら厳しくなるからな」

「つまり、万全な態勢で勝負できるように協定を？」  
「そういう事だ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」  
「良すぎて、何かありそうだな」  
「さてと、明久。ワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何かされて  
いるかもしれん」

そう言うと、秀吉は駆け足で教室を出て行った。

「わかった。雄二、十六夜君。あとよろしく」  
「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」  
「あっさり負けて補習室送りになるなよ。特に吉井」  
「その言い方、地味に傷つくんだけど…」  
文句を言いながらも、吉井は秀吉を追って教室を出る。

「…さっきの女子生徒の事だが…」  
「ん？」  
「Bクラスの人間だったんだろ？」

突然、坂本が先ほどの件を確認してくる。その質問に大地は軽く頷いて答えた。もっとも、あれは向こうの自爆みたいなものだが。

「Fクラス相手だから、先客がいても潰せると思ったんだろ。オレ  
が相手とわかったら目を点にしていたな」  
「…十六夜がFクラス所属ってのがバレるのはあまり得策じゃない  
んだがな…」  
「…お前はオレに何をさせる気だ」

あれから、坂本の計画通り教室に攻め込んだ。被害は少なくなかつ

だが想定内らしい。

その最中に、何故か半殺しにあった吉井が運ばれてきた。

「……ここはどこ？」

「気がついたか。姫路ー、吉井が起きたぞー」

「本当ですか？」

吉井の意識が戻ったのを確認した大地は姫路に知らせる。

「心配しましたよ？吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして倒れているんですから」

「やたらと細かいな、おい」

「それに、いくら試召『戦争』じゃからと言って、本当に怪我する必要はないんじゃないぞ？」

姫路と秀吉が心配そうに吉井に話しかける。大地は心配していたわけではないが姫路の話にツッコみをせずにはいらなかった。その間に坂本が吉井に戦況を説明していた。

「……………(トントン)」

「お、ムツツリーニか。何か変わった事はあったか？」

いつの間にか土屋がそばに来ていた。本当に忍者の末裔か何かじゃないのだろうか。

「Cクラスの様子が怪しいだと？」

「……………(コクリ)」

話によると、Cクラスが試召戦争の用意を始めているらしい。まさ



か、Aクラスと戦うとは思えない。

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

坂本の言うとおりだろう。疲弊した相手ほど、御しやすいものだ。

「どうするの？雄二」

「そうだな…Cクラスとは協定結ぶとしよう。Dクラスを攻め込ませるぞとも言えば大人しくなるだろ」「良いのか？協定では、明日の午前9時まで試召戦争に関する行為は禁止の筈だろ」

「Cクラスがそれを知っているとは思えないからな。問題ないだろ」

本当にそうなら良いが。何か引つかかる。

「まあ用心のため十六夜と秀吉は残っていてくれ」

「む、ワシは行かなくても良いのか？」

「ああ。秀吉の顔を見せると、いざという時にやろうとしてる作戦に支障があるからな」

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

「じゃ、行こうか。ちよっと人数が少なくて不安だけど」

結局、坂本・吉井・姫路・土屋はCクラスに向かうことになった。

「…ところで大地よ。お主がここに残る理由はなんなのじゃ？」

「坂本の事だから、オレがCクラスの代表と知り合いと言うのを有効活用する気なんだろ」

「なるほどの」

秀吉に説明した後、姫路が戻って来たのに気付いた。

「どうした？坂本達と行かなくても良いのか？」

「いえ、あの…十六夜君にお願いしたいことがあるんですが…良いですか？」

「別に構わないが…」

「…ワシは離れるか耳を塞ぐ方が良いみたいじゃな」

小声で気を遣う秀吉に目配りで「頼む」とだけ言った。

「それで、お願いしたい事って何だ？」

「その…で、手紙を探してもらいたいんです…」

そう言う姫路の顔は真っ赤になっている。その様子だと十中八九、ラブレターだ。それなら、断る理由は無い。

「わかった。空いてる時間に探しておく」

「ほ、本当ですか？良かった…」

引き受けてもらえて嬉しいのか、安堵の息をつく姫路。ふと、廊下が騒がしくなっている事に気付いた。

「何かあったんでしょうか？」

「さあ…」

考えていると、教室に坂本と土屋が慌ただしく戻って来た。

「どうした？Cクラスと協定を結んだじゃないのか？」

「…お前、CクラスがBクラスと繋がっているかもしれないと読んでいただろ」

「何かあるとは思っていたんだが…。良く無事だったな」

坂本が息を整えながら説明する。Cクラスに向かう際に姫路が教室に戻るのと入れ替わりに島田と須川も一緒に行っただけ。Cクラスの教室に入ったら、Bクラスの代表である根本がいたと言う。協定を破った事で攻撃を受けていたが吉井達のおかげでこうして戻って来れた。

「…どうするつもりなのじゃ？雄二」

「こうなったらCクラスも敵になるからな…連戦になるかもしれない」

「…坂本。オレがFクラスだと言うのはまだバレていないよな？」

「ムツツリーニ、その辺はわかるか？」

「…………… Bクラスは、姫路が出てきた際に警戒されていた。十六夜の名前は出ていない」

「なら、問題ないな」

そう言って鞆を持って出て行くこととしたが坂本に止められた。

「待て。何か考えがあるのか？」

「あるから、行動しようとしているんだぜ？」

「そうか…なら、俺も策を考えとくが今はお前に任せるぞ大地」

苗字ではなく、名前で呼ばれたことに大地は一瞬驚いたが…

「あまり期待はできないけどな。まあ、やれるだけやるさ…雄二」

名前で呼び返し教室を後にした。今日もやる事が多くで大変だ。

6話 対Bクラス 前編（後書き）

雄二とのやり取りの多さに脱帽です。

## 7話 対Bクラス 後編

教室を後にした大地はCクラスの教室に向かった。  
姫路に頼まれた手紙の搜索をするためだ。

さて中に誰か…いるよな、そりゃ

先ほど、雄二達がCクラスとの協定を結びに行つて、あの騒動。いるのは当たり前だ。

姫路の件もあるし、行くか

考えたら即実行。教室の扉に手をかけ…

「邪魔するぜー」

無理やり入る。教室内にいる生徒達が一斉にこちらを向く。中にはFクラスの生徒と勘違いして警戒している者すらいる。

「…あら、大地じゃない。どうしたの？」

Cクラスの代表である小山友香は大地とわかるやこちらに駆け寄ってくる。確定とは言い切れないがAクラスの人間とっているのだらう。

「ちょっと探し物をな。その為にCクラスの机、確認させてくれな  
いか？」

「机？確認するだけなら構わないけど…」

許可(？)が下りたみたいなので遠慮なく机の中を確認する。とは言っても漁るわけではない。一通り確認し終えてから友香の下へ戻る。

「悪いな、いきなり押しかけて」

「…大した用があつたわけではないのね」

「確認するだけって言ったろ」

「ちなみに、探し物が何かは聞いても良い？」

「ああ…手紙を、探していてな」

姫路のプライベートな事なので、気が引けるから、大地は言い辛そうにしながらも話す。

「…女の子に頼まれたでしょ？」

「バレたか」

「しょうもない物なら皮肉の一つでも言っていたけど…女の子の手紙なら、私も探すのを手伝うわ」

「良いのか？」

「ええ。手伝うって言うってもクラスの子に聞くぐらいよ？」

「いや、充分だ。それよりも、今日は一緒に帰らないか？お礼に何か奢ろう」

「そっちが本当の理由って訳ね…」

呆れて溜め息をつく友香。去年同じクラスなだけに大地の事を良く知っているのか、あっさり納得している。

「良いわ。恭二は急用が出来たから先に帰ってくれって言っていたし」

「そこは、待っててやるもんじゃないのか？」

恭二：「根本の名前が拳がって、大地は引つかかっていた事がわかった。BクラスとCクラスの代表の名前を聞いた時と、雄二がCクラスと協定をを結ぶと言った際に懸念した事だ。」

「他の男ならそう言っただけだ。久しぶりにあなたと帰るのも良いかなと思ってね。あなたこそ、手紙を探さなくて良いの？」

「ああ、二年の教室を一通り回ったし、それに友香の協力を得る事が出来たから、今日はここまでにするさ。」

教室を回ったと言うのは嘘だが、協力を得られたのは色々な意味で大きい。その後、友香の要望で駅前『ラ・ペデイス』に行く事になった。

駅前 『ラ・ペデイス』

「それにしても、友香がCクラスの代表って知った時は驚いたぜ。」

「あら、私、そんな事言っただけ？」

「友人から聞いたんだよ。」

『ラ・ペデイス』に着いた二人は店内のテーブル席に向かい合って座った。

大地は何気なく話題を振っていく。

「なあ、友香。オレがCクラスの教室に向かう際に騒ぎがあったみたいだが、何かあったのか？」

「ああ、Aクラスにいる大地には関係ない事だけど、Fクラスが私達に協定を結ぼうとしたのよ。」

「そう言えば、FクラスはBクラスと試召戦争をしているらしいな。」

いずれも、自分も関わっている事だが、話を合わせる。

「ええ、その際に勝った方に挑もうと思っているわ」

「その為に、Bクラスと同盟を結んだってか。根本と付き合っているからやりやすかっただろうな」

「…良くわかったわね」

「まあな。だが、あまり良い判断じゃない」

「どういう事？」

「理由は色々あるが…Fクラスと組めとまでは行かなくても、敵対しない方が良い。代表があのかの坂本雄二だし、本来Aクラスに入れる姫路瑞希もいるしな」

そこまで言って大地は一旦、友香の顔色を確認した。代表としての判断を下したつもりだが、迷っている。そう言う風に見える。

「まるで…大地は私達とBクラスの同盟を破棄させようとしているみたいね」

「そりゃ、Fクラスにいるオレとしては何とかしたい事だし」

さり気なく爆弾発言をする。さて、どう反応するか…。

「…あり得ない…と思ったけど、学年末試験以降に長期欠席していたから、否定しきれないわね」

「思ったより、反応薄いな…」

「仮に、あなたがFクラスとして、Bクラスとの協定は良いのかしら？違反になるでしょ？」

「だから、こうして連れ出して個別に話してるんだろ」

してやられた…。そう思っているだろう、友香は。



「それで、わざわざこんなマネしてどうするつもり？」

「簡単だ。明日はFクラスと敵対せずに指示に従ってもらおう。従ってくれるなら、今後Cクラスに協力するよう代表に頼むし、友香個人の頼みを聞いてやる」

「もし、聞かなかつたら？」

「少なくとも、次のターゲットにされるな。そして、設備交換を要求するだろう」

「…良いわ。明日だけ、Fクラスと敵対しなければ良いんでしょう？」

「ああ。理解が早くて助かるよ」

「それに私個人にしても、悪くない話だしね」

「交渉成立…だな」

Cクラスとは敵対どころか同盟に持っていけるようにした。これはFクラスに取っても悪くない話だ。これでBクラス戦に集中出来るはずだ。

翌日 Fクラス

教室に入るなり、大地は雄二に昨日の事を報告した。

「Cクラスを敵対させないどころか同盟にできる状態に持っていくとはな…。何をしたんだ」

「軽く脅迫をして交換条件をつけただけさ」

「交換条件？」

「今後Cクラスに協力するって事」

「それだけで納得するのか…？Bクラスの代表と繋がっていたんだ

ぞ」

「そうか？Cクラスの代表がBクラスじゃない人間と密会してたんだ。Bクラスの疑念を呼ぶと思うが」

「…確かにな。ともかく、これでBクラス戦に集中出来る」

そう言う雄二はまだ油断していない様子だ。

「大地。ちょっと、頼みがあるんだが…」

午前九時。Bクラス戦が再開された。昨日の続きでBクラスの生徒を教室に押し込んでいる。

今回、大地は前線部隊と共に移動した。しかし、戦闘に参加するためではない。

「雄二も疑り深いな…。Cクラスの監視をしるだなんて」

大地は雄二からCクラスの監視を指示されている。裏切る可能性を気にしていたからだ。

「まあ、仮に根本がこっちに来たらオレが倒せば良いか…」

とりあえず、戦況はここからでも確認はできる。指揮は秀吉がとっているのが気になる。総司令は昨日と同様、姫路の筈だ。

だが、戦闘に参加しようにも出来ずにいる。

その時、吉井がこちらに向かってくる。

「大地！」

何で名前で呼んでるんだとツッコもうと思ったが、吉井の剣幕を見てやめた。

「…何だ」

「大地は、姫路さんから探し物を頼まれていたんだよね？」

「本人から…聞いたんだろっな」

「もし、それを拾った人がわかったって言ったらどうする？」

「…面倒だ。手短に言えよ」

「…根本君が、それを持っているんだ」

根本の名前を聞いて、大体把握した。姫路の探し物：手紙を根本が持っている。つまり、教室を荒らされていた時にそれを盗まれている。そして、それを人質にされていて姫路は身動きが取れないでいる。

「…アホ久」

「何？」

「お前がどうしたいか知らないが、協力しよう」

不思議と、吉井…明久の名を呼び協力する事に決めた。理由は簡単だ。姫路の、ひいては女の子の手紙を脅迫材料にしている根本恭二と言つ屑を潰す。それだけだ。

「どうしたのさ、いきなり」

「いや、ただ気に入らないなと思っただけさ」

明久は雄二からBクラスに奇襲を仕掛けると指示されていた。協力すると言ったので大地は断る気は無かったが…

「二人共、本当にやるんですか？」

立会人と呼ばれた英語の遠藤女史が念を押してくる。

「はい。もちろんです」

「女の子を取り合つての喧嘩だから、あまり気にしないでくださいよ」

向かいに立つ明久が大地の突拍子もない発言に驚く。嘘なのだから本気にならなくても良いだろうに。

「でも、それならDクラスでやらなくても良いんじゃないですか？」

遠藤女史の言うとおり、場所はDクラス。周りには明久がこの作戦の為に協力を要請した島田達がいる。遠藤女史じゃなくてもこの状況は理解出来ないだろう。

「仕方ないでしょう。こいつは『観察処分者』だ。Fクラスのボロい設備やつたら教室が使い物にならなくなるし」

「もう一度考え直しては…」

「いえ、やります。こいつには色々礼をしないと気が済みません」

再三に渡って説得してくる遠藤女史に明久が有無を言わせぬ口調で言い切る。

「…わかりました。お互いを知る為ならこういった事も必要かも知れませんか。…恋愛事の喧嘩なら尚更…」

後半の台詞が小さくなって聞き取りづらいが気にしない事にした。

「「試<sup>サモン</sup>獣召喚っ！」」

一応、召喚獣勝負の為二人の召喚獣が呼び出される。大地は壁際に位置する。

「行けえっ！」

大地の召喚獣に目掛けて明久の召喚獣が駆け出す。それを大地は避け、明久が壁めがけて拳を振るう。

ドゴオッ！

「ぐうっ！」

明久が痛みを訴えた。『観察処分者』の召喚獣は負担がかかると呼び出した人間、つまりは明久にフィードバックする。今は壁を殴った事で手に痛みが来ているみたいだ。

「んのお！」

明久の指示通り、戦うフリをしているため大地は壁際に召喚獣を移動させる。そして再び明久の召喚獣が拳を振るう。

「つつっ…！」

再び来た痛みに呻く明久。しかし、大地は何も動じない。自分は『観察処分者』ではないからその感覚がわからないからだ。出来ることは明久に協力する事だけだ。

「二人共、時間が無いわよ」

島田が壁にある時計を見て告げる。  
作戦の開始まであと三分。

「ところで島田。この勝負どっちに勝って欲しい？」

「…？どちらかと言えば…アキかな」

いつの間にか明久の事を名前で呼んでいる島田。

「ちなみに、勝った方が姫路をデートに誘えるんだが…」

「アキ、絶対に負けなさい」

即答！？

「大地、冗談を言つて美波を怒らせるのは勘弁して…よっ！」

明久も島田の事を名前で呼んでいる。何か進展があつたと見ていいだろう。それに明久の台詞、自分の身を心配しているのか？

会話をしながらも明久は召喚獣を動かすのをやめない。床には明久の拳から垂れた血が溜まっている。

「アキ、そろそろよ」

「うん、わかつてる」

島田の言葉に明久が頷き、周りにいる大地達に目配せしてくる。それにこちらでも黙って頷く。

「吉井君、一体何をしようとしているのですか？」

状況がわからずにいる遠藤女史が訪ねてくる。この偽りの勝負に気づかれて召喚獣を戻されるとマズい。明久もそれを把握しており雄叫びをあげている。

『あとは任せたぞ、明久』

敵の本体を引きつけたであろう雄二が壁の向こうから良く通る声で告げてきた。時間も丁度、作戦開始の時間だ。

「だああーしゃあーっ！」

ドゴオツ！

明久の召喚獣がBクラスに繋がる壁を破壊する事に成功する。最初からこれが狙いだっただの。

「んな！？」

崩れた壁の向こうでは根本が驚いて顔をききつっている。

「ぐうう…」

「良くやったアホ久。後は任せろ！」

手を押さえている明久を労い大地は根本に勝負を挑むために突っ込む。

「くたばれ根本！」

「遠藤先生！Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます！試サモン獣召喚！」

大地だけでなく島田達も突入する。しかし、近衛部隊が遮る。雄二達に引きつけられても流石に全員と言う訳にはいかないか。雄二

「させないわよ、十六夜君！」  
「ちっ、夏川もいたのか！」

大地もまた、昨日補習室送りにした筈の夏川を相手にする。

「昨日の借りを返すためならどこにでも現れるわよ？」

「そうか…残念ながら、そりゃまた今度になるな」

「え…？」

そう、あくまで大地達は近衛部隊を引きつけるだけで良い。本当の目的は…

ダン！ x 2

出入り口を人で埋め尽くされ4月とは思えない熱気がこもるBクラスの教室。雄二の指示でエアコンが停止され、涼しさを求めて開け放たれた窓。そこから二人の人影が飛び込み、根本の前に降り立った。

「…………… Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ…！」

「…………… Bクラス、根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリーニイー！！」

こちらが近衛部隊を引きつけた為、根本の周りは誰もいない。

「サモン 試獣召喚」

Fクラス 土屋康太 保健体育 441点

VS



Bクラス 根本恭二 保健体育 203点

康太の召喚獣は手にした小太刀で一閃し、一撃で切り捨てる。

こうして、Bクラス戦は終結した。

## 7話 対Bクラス 後編（後書き）

まずは、友香とのやり取りが思ったより書けたことに驚愕。

そして、明久とも打ち解ける。

何気なくムツツリー二を名前で呼んで（？）いるが秀吉はもとより、雄二、明久と親しくなっているため自然とそうなるだろうと言う作者の経験を勝手にやりました。

このBクラス戦も、色々考えましたがそれは後に…

「少し、黙ろうか」

ちよ、大地！？そこは言わせ…ギャー！

## 8話 制裁と精彩

「明久、思い切ったことをしたのう」

「うう、痛いよう……」

Bクラスにやって来た秀吉が明久を気遣う。明久は未だに手が痛むのだろう。

「何とも、お主らしい作戦じゃな」

「でしょ？なら、褒めてくれても……」

「後の事を考えず、自分の立場を追い詰める男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「オレも、見てて思ったぜ。ああ、こいつは無鉄砲な奴だなと」

「二人共、遠回しに馬鹿って言ってるでしょ？」

実際、学校の壁を破壊するなんて行いは大問題だ。馬鹿と言わず何と言えば良いかわからないぐらいだ。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二が明久の背中をバンバンと叩く。

そんな不名誉な強み、大地なら願ひ下げだ。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行こうか。な……負け組代表？」

「……………」

床に座り込んでいる根本。今回、大地は根本に用がある為、いることとする。

「本来なら設備を交換と行きたいがところだが…条件を呑めばそれを見逃そうと思う」

雄二の言葉に周りがざわつく。それはBクラスだけでなくFクラスも同様だ。

「…条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

力なく答える根本に雄二が上から目線で言う。

「俺、だと？」

「ああ、お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったからな」

酷い言い様だが事実だし誰もフォローしない。本人もそれはわかっているみたいだ。

「そこで、Bクラスのお前らにチャンスだ。Aクラスに行って試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。ただし、宣戦布告はするな。あくまで戦争の意思と準備があるだけで伝えるんだ」

「…それだけで良いのか？」

「ああ、お前がコレを着て言った通りにすれば交換は見逃そう」

雄二が掲げたのはこの文月学園の制服だ。ただし、女子の制服だ。入手段を聞きたいがひとまず話を聞こう。

「は、馬鹿な事を言うな！この俺がそんなふざけた事を…！」

根本じゃなくても女装は嫌だろう。しかし、根本が拒絶しても…

『Bクラス全員で実行する!』  
『任せて!必ず着させるから!』  
『それでこの交換せずに済むならやらない手はない!』  
「んじゃ、決定だな」

満場一致で根本の女装が決定した。これはこれで面白い罰だが、大地はまだする事がある。

「雄二、少し時間をくれないか?」  
「どうした、大地?」  
「…この屑にする事がある」  
「…わかった」

いきなりの要求に伝えてくれる雄二。その顔が少し驚いていたのは、大地の顔がちよつとした怒りにがあるように見えたからだろう。大地は根本の前に寄る。

「よう、根本。負けた気分はどうだ?」  
「…十六夜か。夏川から聞いていたが本当にFクラスだったとはな…」  
「今はどうでも良いだろ。それより、お前はやつちやいけない事をやったらしいからな」

大地がFクラスにいる事実だけでなく、その剣幕にたじろぐ根本。御託を並べたは良いが握った右手がある事をしたくて疼いている。

「言いたい事は色々あるが、今は一言だけ」  
「な、何だ…」  
「馬に蹴られて死ね」

ドン

「げふう！」

「じゃあ、後はよろしく」

勢い良く腹を殴られ気絶する根本。大地は踵を返しながらそう告げる。倒れた根本のズボンから姫路の物と思しき手紙があったが見なかつた事にした。

手紙と言えば、姫路に伝えないと…

そう思いながらBクラスを出ると姫路に出くわした。

「十六夜君…もう帰るんですか？」

「いや、姫路に話す事があってな」

「私にですか？」

「ああ。お前に頼まれていた事だけ…あれ、まだ見つかっていないんだ。すまん」

「十六夜君が謝る事では無いですよ。私が頼んだ事ですし…」

簡単に引き受けといて達成出来ずに謝罪する大地に対し、姫路は気にせずにいる。

「まあ、なんだ。早く見つかるの良いな」

「はい…」

ヴー…ヴー…

姫路に励ましになるか怪しい言葉をかけていると、携帯が鳴っているのに気がついた。相手は…友香からだ。姫路に軽く挨拶して離れ

て電話に出る。

「もしもし…」

『試召戦争、終わった？』

「オレらの勝ちでな」

『…そう』

ひとまず、試召戦争の結果を簡潔に知らせる。詳しく話すにもややこしいからだ。

「それだけの為に電話したんじゃないんだろ？」

『ええ、あなたが探していた手紙の事だけだね。私達Cクラスには持つてる人はいなかったわ』

「その事なんだが…。もう解決した」

『恭二にも確認してBクラスにもいない…って、解決した？』

「ああ、手伝ってもらったのに悪いな」

申し訳なさそうに解決した事を話す。しかし、根本に確認したと友香は言ったがその根本が持っていたとは思わなかったのだろうか。

『手伝うって言ったのはこっちよ？それに、見つかったのなら良かったじゃない』

「まあ、そうだな。…なあ、友香」

『何？』

「さつき、Bクラスも確認したって言ったよな？」

『恭二と付き合っている訳だし、簡単に聞けたわね。…それがどうかしたの？』

「いや、別に。ともかく、手伝ってくれた事は感謝してる。またな」

友香の返答を待たずに電話を切った。姫路の手紙を根本が持ってい

たと言う事実…いつ話したのか…。ため息をつくとき、まだ着信がある事に気付いた。全部メールだが。

大方、姉ちゃんのイタズラメールだろ…

そう思いながらも確認した。

『生徒会副会長に相談です！』

『2 Eの者ですけど、相談したい事が…』

など言った似たようなメールが数件あった。

「何じゃこりゃー!？」

これなら、天音のイタズラメールの方がマシに見えたのであった。

バン!

「あれ、大地?どうしたの、そんなに息を切らせて」

「どうもこうも…何だよこのメールは!!」

生徒会室に走っていった大地は天音に詰め寄り、携帯を見せる。いきなりの事に一緒にいる紗野先輩も驚いている。

「あ、大地はまだ文月新聞を見てないんだっけ」

「は?文月新聞?」

「はい、弟君」



紗野先輩に渡された文月新聞を見て大地は頭が痛くなった。

新聞記事の見出しは今期の生徒会に関する事だ。これはまだ良い。普通にあり得る話だ。問題は…

「何でこの記事にオレ宛てのメールアドレスが載ってるんだ…！」

「ちなみに、これは学園のパソコンのアドレスだから」

「なら何でオレの携帯に来るんだ…！」

「学園長曰わく、自動的に送られるようになってるみたいだよ？」

学園長の名が出た時点で諦めがついている。

「弟君も大変ね…」

「他人事のように言わないでくれ…」

とは言っても、これは大地自身の事だ。「文月のホストクラブ」と呼ばれている大地が生徒会所属、しかも気軽にメールで相談できるとあればしない手はないだろう。大地も無視する訳には行かない。

「そう言えば…今日って会議をする訳じゃないよな…？」

「そうだよ」。既に義高君は帰ってるし、今は単なる暇つぶし、かな

「だろうな…。あつたら優子も来ているだろうし」

この生徒会メンバーで最も真面目であろう二人がいない事からそれはわかる。

「そう言う弟君も真つ直ぐこっちに来たね」

「いなかったら家に帰るつもりでいたんで」

「そうだったの。ところで、さっき物凄い音がしたけど…」

大地が生徒会室に真つ直ぐ来た事に感心しながらも紗野先輩は別の事を尋ねてくる。

「それ、2年D・Bクラス間の壁が破壊された事かと…」

「壁を破壊するなんて、元気の人もいるんだね」

「流石に呑気の事言えないでしょ、天音」

大地の話に何故か悠長にしている天音に対し、紗野先輩はまともな反応をする。

「まあ、破壊した奴は鉄人に捕まったと思うし、気にしなくて良いと思うけど」

「弟君も、落ち着いてるわね…」

「自分でもそう思う」

もつとも、目の前で見たからある程度の予想は出来ていた。現に今も遠くから鉄人の怒鳴り声が聞こえるような気がする。

「まずは皆に礼を言いたい。周りからは不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったからだ。感謝してる。」

点数補充のテストを終えて二日後の朝。壇上に立つ雄二が素直に礼を言う。

「ど、どうしたのさ、雄二。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽りない俺の気持ちだ」  
大地より親しい明久が雄二の態度に戸惑っている。雄二自身も否定はしていない。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝って、世の中は勉強すれば良いってもんじゃない現実を、見せつけるんだ！」

『そうだー！』  
『勉強だけじゃねえんだー！』

来たるAクラス戦を前に、皆の気持ちが一つになっている。大地も、Aクラスと…愛子や優子と対決をする事に少なからずの楽しみを感じていた。

「皆ありがとう。さて、残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

『どういう事だ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ』

『それで本当に勝てるのか？』

先日聞いた大地達は気にしてないが、他の連中はかなり驚いており、教室内が一気にざわつく。

「落ち着いてくれ。やるのは代表同士…つまり、俺と翔子だ」

当然と言えば当然だ。しかし、雄二がどうやって「雄二が勝てるわけなああ!？」勝とうとしているかはわからない。少なくとも、勝てない戦いはしないだろう。

ところで、何故雄二はカッターを構えているのだろうか。明久が悲鳴をあげていたが…

「次は耳だ」

…何やってんだ…

「まあ、明久の言う通り翔子は強い。まともによれば確実に負ける。だが、それはDクラス戦、Bクラス戦も同じだっただろっ？」

実際はこうして勝ってきている。

「今回もそうだ。俺は翔子に勝ち、Aクラスの設備を手に入れる。過去に神童と言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおーっ！！』

「…さて、具体的なやり方だが、一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史…。雄二の得意科目は知らないが、翔子はこの科目を苦手にしてはいない。

「ただし、内容は限定する。小学生程度の問題で百点満点の純粋な点数とする」

「でも、同点だと延長戦になるよ？そうなったら問題のレベルは上がるし雄二に敵しくならない？」

「明久の言うとおりじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでもそこまで運に頼り切った事はしない」

勝負の方法を提示する雄二に明久や秀吉が疑問ぶつけていく。

「？それなら、霧島さんの集中力を乱すとか？」

「純粋な点数勝負でそれはないだろ。それよりも雄二、もったいぶらずにタネを明かした方が良いだろ」

翔子の集中力はかなりのものだ。それを知っている大地は雄二を急かす。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。俺がこのやり方を探るのはある問題が出ればアイツは確実に間違えるからだ」

小学生レベルの問題でややこしい問題はあったか。少なくとも、大地は知らないが。

「その問題は『大化の改新』だ」

「簡単だな、おい」

「大化の改新？誰が何をしたか説明しろって問題、小学校で出たっけ？」

「いや、もっと単純だ」

「単純って言うと…何年にあつたか答えろ、とか？」

「ビンゴだ、島田。その問題が出たら勝てる」

まさか、年号を問う問題が翔子に勝つ方法とは思わなかったとは。単純すぎて逆に気付かない。

「大化の改新が起きたのは645年。これは明久でも間違えないだろうな」

それなら何故、明久が恥ずかしそうに顔を覆っているのか、教えて欲しいものだ。

「それを、翔子は間違えるって言うのか？」

「ああ、确实にな。そうしたら、このオンボロ設備とはおさらばだ」

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「十六夜君もですけど霧島さんとは、その…仲が良いんですか？」

姫路が恐る恐る聞いてくる。そう言えば、雄二と翔子が幼馴染だつて知ってるのは…自分だけだと言つのを今気がついた。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「オレは去年のクラスメイトで友人」

雄二の後に翔子との関係を話した途端、空気が変わった。

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？何故明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「と言うかオレまで狙おうとすんな！」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前に貴様らを殺す！」

「オレが一体何をしたと！？」

「遺言はそれだけか。…待つんだ須川君、靴下はまだ早い。それは押さえつけた後に口にねじ込むものだ」

「了解です隊長」

恐ろしいまでの団結力。ただ、その要因は醜いものだった。

「なあ、雄二」

「…なんだ」

「コイツら、絶対に女の子に好かれないだろ」  
「多分な」

多分で済めば良いがもはや確実だろう。何故か姫路と島田（Wit h 教卓）が攻撃態勢を取ってる。また明久が変な事を言った、これは。

「まあまあ、落ち着くのじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。この状況でよく冷静でいられたものだ。

「む。秀吉は二人が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である大地や雄二に興味があるとは思えん。あるとすれば…」

秀吉や明久をはじめ、視線が集中する。大地もそれを追ってみると…。

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

全く何もしていないから

「まあ…大地はともかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。そしてアイツは一度覚えた事は忘れない」

それ故に今学年トップにいるわけだ。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そして俺達の設備は」  
『システムデスクだ！』

## 9話 対Aクラス

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として一騎打ちを申し込む」

恒例となりつつある宣戦布告。

いつもは明久一人だが今回はそれに大地、康太、姫路の三人を加えてAクラスに来ていた。大地自身、来る気は無かったが、雄二から

『大地なら交渉がしやすいだろ』

と言われていた。言い分はわかるが大地は身の危険を感じずにはいられない。

「何が狙い？」

「もちろん、オレ達Fクラスが勝つために、だな」

「仮に一騎打ちで大地が来ても、あまり物怖じはしないね」

「奇遇だな。オレも、優子相手に何も物怖じする必要がないぜ」

大地は向かいに座る優子と睨み合う。決して仲が悪い訳ではない。

(ねえ、ムツツリーニ。大地と秀吉のお姉さんって付き合っていたんじゃないの?)

(……………大地は否定していた。多分、喧嘩別れしたと思う)

後ろで明久と康太がヒソヒソと話している。大地には思いつきり聞こえている。優子には聞こえていないのが幸いか。ひとまず、後でシバこう。



「ま、こつちとしては面倒な試召戦争を手軽に終わらせられるのはありがたいかな」  
「そりゃ賢明だ」

ここまでは、雄二の予想通りの回答だ。

「そう言えば、Bクラスとやり合う気はあるのか？」

「Bクラスって…昨日来てたあの…」

「…？ああ、アレが代表をやっているクラスだ。まだ宣戦布告をされてはいないみたいだな」

Bクラスの話振った途端、優子の顔が青ざめた。確かあの肩には女装をさせる話になっていたが…やったみたいだ。

「でも、BクラスはFクラスに負けたから三ヶ月の準備期間を取らないと試召戦争は出来ないはずだよな？」

「いや、あれは対外的には『和平交渉にて集結』って事になってる。規約には触れてないだろ。…Dクラスも、同様だな」

「…それって、脅迫？」

「まさか。ただのお願いをしてるだけさ」

こうしていると、自分が悪役みたいだ。先日にも似たような事をしたが…妙な気分だ。

「うーん…わかった。何を企んでいるのかは知らないけど、その提案受けるよ」

「え、本当？」

あっさりとした返事に、会話に参加していない明久が驚いて声をあげた。

「だって、あんな格好をした代表のいるクラスとは戦争なんてしたくないし…」

そんなに酷かったのか。見たくないが。

それにしても、今日の優子はやたらとお淑やかだ。前に生徒会室で遭遇した時は、いきなりの事で邪険にされていたが…。まあ、今はどうでも良いことだろう。

「でも、こっちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね…お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回の三回勝った方の勝ち、つてするのな受けても良いよ」

「う…」

「なるほど、こっちからオレか姫路が出て来るのを警戒しているのか」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったり、大地が得意科目で来たら問題次第では万が一があると思うし」

完全に大地と姫路を軽く見ている。とは言っても気にはしない。何故なら、翔子の実力がこちらとはかけ離れているからだ。

「そんなの杞憂にすぎないぜ？こっちからはちゃんと代表の坂本雄二が出る」

「それを鵜呑みにする訳にはいかないよ」

「わかった。一騎打ちで受けてくれるなら、五対五でやるぐらい良いだろ」

「本当？それは嬉しいな」

相手が受けてくれた以上、反対する理由もない。

「ただ、科目の選択権はこっちにくれるよな？」  
「え？うーん……」

「またもや優子は悩む。クラスを代表しての交渉だ。下手な事は言えないのだから。」

「……受けても良い」

「あ、代表」

「うわ！？」

いきなり翔子が現れたからか、明久が驚く。

「……大地の提案、受けても良い」

「良いの、代表？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

姫路の方を見ながら、翔子が条件を提示する。思惑があるのがわかるし「……！！（カチャカチャ）」これを断る理由は特に見当たらない。「ムツッリーニ！いくらなんでも準備が早いよ！負ける気満々じゃないか！」い。しかし、雄二と言ひ翔子と言ひ考えてる事が読めないな。と言うか、後ろの二人がうるさい。

「じゃ、どうしよう？勝負内容の五つのうち三つはそっちに決めさせてあげる。残り二つは……」

「そっちに譲ろう。じゃ、交渉成立だな」

「大地！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

「ま、大丈夫だろ。姫路に迷惑をかけるつもりもない」

「…勝負はいつ？」  
「そうだな…十一時から良いか？」  
「…わかった。さっきの事、雄二にも伝えておいて欲しい」  
「わかってる。あいつも納得するだろうからな」

明久が不満そうだが、交渉は成立だ。何も問題はない。

「そう言えば大地。今言うのもあれだけど…大丈夫なの？色々」と  
「それがわかってるから教室に戻ろうと」  
「とっつ」

時すでに遅しとはこの事だろう。大地の首はある人物によって締め上げられる。

「流石に逃げるのは良くないよ？大地」  
「来る度に首を絞められるオレの身になれよ」

当然、こんなマネをしてくるのは愛子しかない。何故か優子がご愁傷様と言っている気がした。

「あの、十六夜君…そちらの方は？」  
「ん？ああ、ただのともだ「幼馴染だよ」おい！お前は何爆弾を投下してんだ！」

驚きながら聞いてくる姫路に当たり障りのない解答をしようとしたら愛子に阻止された。今それを言うのは危険以外何もないというのに。

「…ムツツリーニ、今の聞いたよね？」  
「……………万死に値する」

「無言で上履きを構えるな。妙に不気味だ」

やはり、明久と康太が上履きを構えていた。攻撃されないのは愛子に被害を与えない為か。

「ついに、Aクラスに仕掛けてきたね、大地」

「ああ、手加減はしないから、ひとまず首絞めを解いてくれ。戦争をする前に公の場で暗殺されそうだ」

「うん、わかった」

あっさり解放された。わかったと言つのは両方の意味で、と言つ事か。

「勝負には、大地も出るんだよね？」

「さあ…それはうちの代表が決める事だから何とも言えないな」

「ボク達で勝負、出来ると良いね」

「そうだな」

その後は、やっぱりと言うか明久と康太に追いかけられた。

「では両名共、準備はよろしいですか？」

「ああ」

「… 問題ない」

Aクラス担任兼学年主任の高橋洋子女史が立ち会いの下、Fクラス対Aクラスの試召戦争が始まる。ちなみに、雄二に事の顛末を話したら問題ないと言った。

「それでは一人目の方、どうぞ」  
「アタシから行くよ」

向こうは優子が出るみたいだ。対するこちらは…

「秀吉、頼めるか？」

「なんとかやって…」

「大地、アタシと勝負よ」

雄二が秀吉を向かわせようとしたが優子に遮られた。

「…ご指名みたいだ」

「大地、行ってこい」

「わかってる。…すまん、愛子。勝負は次の機会にな」

「みたいだね。あーあ、大地と勝負したかったな」

それは大地も同意見だが…まあ、優子相手でも不足はないが複雑だ。仕方なく、出ることにした。

「そう言えば、十六夜君は木下さんと同様生徒会の役員でしたね」

「ええ、高橋女史が生徒会の顧問と言うのは姉から伺っていますよ。姉共々よろしくお願いします」

高橋女史が生徒会の顧問をしているのは何気なく天音が言っていたので覚えていた。大地と優子が生徒会所属と聞いてざわつくのがわかった。

「話が逸れましたね。それでは、科目はどうしますか？」

「大地が決めて良いよ」

「じゃあ…現代国語で」

「わかりました。では、始めて下さい」

「「サモン試獣召喚」」

Fクラス 十六夜大地 現代国語 340点

VS

Aクラス 木下優子 現代国語 425点

「…どういづつもり？」

「何がだ？」

点数を見て優子の表情が険しくなる。そんなに低い点数だったろうか。

「現代国語が、アタシの得意科目の一つだってわかってるでしょ？」

「ああ、そうだったか？間違っていないなくて良かったと思ってるよ」

「ワザと負ける気？」

「まさか、そんな事は考えちゃいない」

負けるつもりなら点数の補充すらしらないだろう。ただ、やるなら…

「やるなら相手の土俵で勝とうと思ったただけだ」

結果は、優子の召喚獣が手にしたランスで大地の召喚獣を貫いた。大地の敗北だ。

「…では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は…英語でお願いします」

Aクラスからは…確か、佐藤美穂と言ったか。こちらは…

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

アホ久の何を？

「ふう… やれやれ、僕に本気を出せと？」

「ああ。もう隠さなくても良いだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

「ああ、そうだね。大地、仇を取ってくるよ」

「期待しないでおこつ」

妙な自信と共に前に出る明久。どこにそんな自信があるんだ。

「…すまん、雄二。負けてきた」

「気にするな。まだ二敗しかしてないから、取り返せるさ」

やっぱり、アホ久は捨て駒か

ひとまず、謝罪の言葉を言うが、雄二からは励ましにすらならない言葉を告げられる。

案の定、明久は負けたのだが、何故か利き腕の事を公表していた。

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに更に殴るのは勘弁して

！」

「よし、勝負はここからだ」

「ちよつと待った雄二！アンタ僕の事信頼してなかったでしょ！」

「信じてはいたぞ。…負ける方に」

「嫌な信じ方だな」



もし、自分もそう思われていたら…虫唾が走るな。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スクツ）」

次は康太が出る。ここで初めて科目の選択権が活きてくる。無論、保健体育を選ぶだろう。向こうからは愛子が出るみたいだ。

「まあ、大地がいるとは言え知らない人も多いだろうし…。一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

改めての自己紹介を聞くと何故か、大地に対して殺気を帯びた視線が集まる。

「…大地。あいつが前に言ってた…」

「ああ。おかげでアホ久と康太に追いかけられたよ」

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

大地が雄二に事情を話している一方で、康太が科目の選択をする。彼の唯一にして最強の武器を。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

随分余裕そうだが…そう言えば愛子も得意としていたような気がする。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……………大地のおかげもある

し」

さっきよりも凄まじい殺気。

「実技で、ね」

そして大地は逃げ…ようとしたが、殺気を出している奴らは全員し  
ようもない妄想をしたからか、動けないでいた。

「…愛子。冗談はやめてくれ」

「あはは、ゴメンゴメン。でも、実技が得意つてのは冗談じゃない  
よ?」

「そこも冗談と言ってくれ」

「それと、そっちのキミ、確かさっき見た…吉井君だっけ?勉強苦  
手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか?もち  
ろん、実技で」

ここまで来ると、冗談じゃなくなる。中学の間に何をしていたんだ。

「フツ、望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強な  
んで要らないのよ!」

「そうです!永遠に必要ありません!」  
「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」  
「もう既に相手が決まっているから良いんじゃないか?」

とはいえ、流石にこの仕打ちは同情してしまうが。

「そろそろ、召喚をしてください」「はい。試獸召喚！」  
「……………試獸召喚」

高橋女史に言われて二人は召喚獸を呼び出す。康太のはBクラス戦で見た時と同じ、小太刀を装備した忍者。一方の愛子は…

「な、なんだあのバカでかい斧は!？」

明久が驚きのあまり声をあげた。セーラー服着用とシンプルに見せかけて、召喚獸の大きさに不釣り合いな大きさの斧を手にしていた。しかも、手首には腕輪が付いている。確か、一定以上の点数を出すと付く代物だ。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

愛子が笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獸が動いた。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニ君！」

「……………加速」

斧が召喚獸を両断する寸前、康太の召喚獸の腕輪が輝き、彼の召喚獸の姿がブレる。

「…え？」

「……………加速、終了」

康太がボソリと呟く。一呼吸置いて、愛子の召喚獸が血を吹き出して倒れた。

Aクラス 工藤愛子 保健体育 446点

V S

Fクラス 土屋康太 保健体育 572点

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

「あの時も、400点を越えてたぞ？」

「どんだけ保健体育に拘ったんだよ。二人共…」

「そ、そんな…！この、ボクが…」

愛子が床に膝をつく。かなりのショックを受けているみたいだ。大地としては、あれだけの点数を取れてる事に驚きを隠せない。

「これで二対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

淡々と作業を進める高橋女史。Fクラスからは姫路が出る。

「それなら僕が相手をしよう」

「やはり来たか、学年次席」

彼の名前は、久保利光。確か、姫路に次ぐ学年三位の実力者だ。姫路が振り分け試験でリタイアした為、現在の学年次席の位置にいる。ちなみに、大地は四位だった。

「ここが一番の心配所だ。本来は大地に得意科目でやって欲しかったが…」

「悪かったな、指名された拳げ句負けて」

しかし、雄二が心配するのも無理はない。姫路と久保の実力に大差

がない。総合科目でなら尚更だが、姫路はこれまでの連載で疲れている。自分の物理でなら問題なかった。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

選択権は久保が使用した。雄二が日本史で勝負するのだから、ここで使うわけにはいかない。明久が文句を言っていたが、これで互いに二回使っているのをわかつているのだろうか。

「それでは……」

高橋女史が今まで通りに操作を行う。それぞれの召喚獣が呼び出され……一瞬で決着がついた。

Aクラス 久保利光 総合科目 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞希 総合科目 4409点

「マ、マジか!？」

「いつの間にこんな実力を……!？」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!」

至る所から驚きの声があがる。点数差が400点オーバーと言つたには大地も驚かずにはいれない。

「く……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」

「……私、このクラスの皆が好きなんです」

「Fクラスが好き……?」

「はい。だから、頑張れるんです」

Fクラスが、と言うよりは明久がいるから頑張れるのだろうが、言わなくて良いだろう。

「…これで二対二です」

高橋女史の表情にも変化が表れた。姫路の急成長にもだろうが、FクラスがAクラスと渡り合っていることに驚いているのだろう。

「最後の一人、どうぞ」

「…はい」

Aクラスからは学年主席の霧島翔子。

「俺の順番だな」

Fクラスから出るのは当然、坂本雄二だ。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ」

ざわ…！

雄二の宣言にAクラスから驚きの声があがる。

『小学生レベルの上限ありだっ？』

『注意力と集中力の勝負になるな…』

「わかりました。そうになると問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待っていてください」

そう言っつて高橋女史が教室を出て行く。それを見送りながら、雄二に近づぐ。

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ、任された」

まず、明久が握手を交わす。

「……………(ビツ)」

康太が歩み寄り、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………(フツ)」

口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻る。大地はそれと入れ替わるように歩み寄り、拳を突き出す。

「負けていたオレが言うのもなんだが…全力を尽くせよ」

「当然そのつもりだ」

そう言っつて、拳をぶつけてくるの確認してから一歩下がる。

「坂本君、あの事、教えてくれてありがとうございますとつございました」

「ああ、明久の事が。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ」

事情は知らないが、二人やり取りがあつたのだらう。姫路の元気な返事を聞いて、雄二は楽しそうにやんわりとした笑みを浮かべた。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

「…はい」

戻ってきた高橋女史に、翔子は短く返事をして教室を出て行った。

「じゃ、行ってくるか」

それに続くように雄二も向かう。

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

高橋女史が機械を操作すると壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映った。

「では、問題を配ります。制限時間は五十分、不正行為は即失格になります。良いですね？」

「…はい」

「わかっているさ」

「では、始めてください」

二人の手によって、問題用紙はめくられた。

ここでふと、ある事を大地は考えていた。

「大地、どうかしたのかの？」



「ん？ああ…ちょっと考え事。あの問題が出るかとかな」  
「こればかりは信じるしかなかるう。二人共、満点を取ったら延長戦になるじゃろうし」

満点を取ったら…。そう、皆、雄二が満点を取る前提で考えている。小学生レベルだから仕方ないが…。  
雄二曰わく、『大化の改新』が出たら翔子は間違えて満点を逃す。確かに逃すが、それ以外は正解だろうから雄二が勝つには満点を取る事だが…

「む、大地よ、あの問題が出たぞい」

「そうか…」

「これで、ワシらの卓袱台が…」

『システムデスクに！』

大地以外の皆の声が揃っていた。

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」 『うおおーっ！』

教室を揺るがす歓喜の声。

「雄二が全問正解したならな」

そんな中、大地は咳いた。

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

10話 眼鏡が無いと何も見えない明日も見えない

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだFクラスに対する高橋女史の締め台詞。

「… 雄二、私の勝ち」

床に座っている雄二に翔子が歩み寄る。

「… 殺せ」

「良い覚悟だ、歯を喰い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

雄二を抹殺しようとする明久に姫路が後ろから抱きついて止める。

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れかもしれないけど」

「いかにも、俺の全力だ」

「この阿呆がーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

少しは否定しろ

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！なぜ止めるんだ二人共！この馬鹿には喉笛を引き裂くと言  
う体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

いっそ放っておくか

ツッコむのを止めたくなり、翔子の方を向く。

「でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

「…ところで大地。約束」

「ん？ああ、わかっている。何でも言っただいぞ」

…主に雄二に

「…それじゃ」

翔子は、一度姫路に視線を送り、再び雄二に戻す。小さく息を吸って

「…雄二、私と付き合っ」

言い放った。

「…お前、まだ諦めてなかったのか」「…私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

大胆にも交際を迫った。二人は幼馴染だからどちらかがそう言った気持ちを持っていても不思議ではない。

「その話は何度も断っただろ？他の男…特に大地とかと付き合う気はないのか？」

「…私には雄二しかない」

それは一途な話だ。と言うか雄二、この状況で他の男の名前を上げるのは駄目だろ。

「…拒否権は？」

「…ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！この約束は大地が勝手に決めた事だから無しに」

ぐいつ　つかつかつか…

翔子は雄二の首根っこを掴み、教室を出て行った。

「」「」……………」

教室にしばしの沈黙。皆、あまりの出来事に言葉が出ないのだろう。

「…さて、代表の雄二がいなくなっちゃったし、帰るか」

平然としていられた大地はに荷物を取りに教室に戻った。

戻った大地を出迎えたのは、生徒会の面々だった。

「何をしているんだ、姉ちゃん」

「あ、大地。今ね、設備の入れ替えを行っているの」

「…Fクラスは負けたんだけどな…」

「さっき洋子先生から聞いたよ。惜しかったね」

あれは完全に雄二の惨敗だ。惜しいと言える要因が見当たらない。

「で、そのみかん箱をどうするんだ？」

「Fクラスの教室に置くのよ」

後ろから、みかん箱を抱えた紗野先輩が声をかけてきた。城戸先輩も一緒にいる。

「まさか」

「そのまさか、よ。Fクラスは二年Fクラスは試召戦争に負けたから設備のランクが下がるの」

『なにいつ！？』

「…今の、弟君？」

「亜季、今のは他の場所からだ」

紗野先輩は大地の反応かと思っていたが、城戸先輩が正す。

「きつと、そつちはあれかな？西村先生がFクラスの担任になるって話をしたと思うよ？」

「なにいつ！？」

「こ、今度は大地？」

「あまりの事実思わず…」

驚かないワケがない。鉄人が担任など、暑苦しくなるだけだ。

「しかし…まさか卓袱台より酷くなるとは予想外だ…」

最下層のクラスだから負けても何も無いと思っていただけに尚更だ。

「私達の時もあつたっけ？」

「二回ほど、Fクラスが挑んできたな。いずれも返り討ちにあつていたけど」

「その後はあまり気にしていなかったけど、酷い有り様だったわね」

三人が去年の事を確認していた。ふと気になったのが…

「なあ、姉ちゃん。優子は来ていないのか？」

「洋子先生が知らせるって言ってたからもつすぐ来るはずだよ」

「よし、帰ろう」

「その前に、これを終わらせてからね」

「ですよね」

笑顔で『Fクラスの設備をみかん箱に代える作業をやれ』と言われ  
てるようなものだ。ここで帰ったら確実に実験台にされる。

あの後、合流した優子に散々文句を言われ、それに何かを感じた天  
音や紗野先輩に質問攻めにあつた。

こうして、大地の新学期早々に起きた試召戦争は幕を閉じるのだっ  
た。

10話 眼鏡が無いと何も見えない明日も見えない(後書き)

強引に終わらせました

大地「本当に強引だな」

書きたい話があったから、仕方ないよね

大地「先が見えないのは、お互い様ってところか？」

そうだね、こっちは要所要所で考えても繋がられないし

大地「オレは担任が鉄人になっちゃって更に面倒が増えた」

まあ、あれだよ。気長に行くのが一番？

大地「あんたは気長にやり過ぎだと思っけどな」

色々、忙しいのだよ



## 11話 天音とFクラスと（前書き）

書いた文章が消えたりして更新が遅くなったけど、ようやくできま  
した（-.-;）

## 11話 天音とFクラスと

心地の良い日差し

清々しい風

ゆったりと過ごす時間

「…試召戦争をしていたFクラスには関係ないなつと…」

大地は理想の休日考えたがすぐに現実に目を向ける。

なぜ理想の休日なぞ考えたかと言うと、日曜日なのに学校に行くからだ。

「大地い…おはよう…」

「おはよう、姉ちゃん」

眠そうに目を擦りながら起きてきた天音に挨拶を返す。そして、寝起きの天音の為ににある物を用意する。

「…あれ？今日学校だっけ…？」

「Fクラスは今日補習なんだよ。…はい、アイスココア」

「あ、ありがとう」

用意したのは天音の好物であるココアだ。それを見た途端、パアツと笑顔になる。

「さて、と。じゃあ行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい」

大地は鞆を掴み天音を背にしながら言うと、天音は好物に夢中になりながらも見送る。

キーン…コーン…カーン…コーン…

「よおし、今日はこれまで。帰ったら復習をしておくように」  
『はあ〜い』

担任となった鉄人の言葉にFクラスの面々は疲れきった声で返事する。

「…しかし疲れたのう。鉄人の授業は気を抜けぬな」  
「だな。寝ていたら雄二みたいだなんていただろうし」

脱力しながら言う秀吉に答えながら大地は雄二の方に視線を向ける。鉄人の授業だと言うのに居眠りをしていた雄二は、強烈な一撃を受け、頭にコブが出来ている。

「くそっ…なんでバレたんだ？そうならないように寝た筈なのに…」  
「！」

「それ以前に寝るなよ」  
ぐぎゅ〜…

「はあ、お腹空いたよ…。今日はずっと働かされたから尚更…」

突然、明久がみかん箱に突っ伏す。

観察処分者である明久の召喚獣は物に触れる上に怪力だから、雑用をさせられていたのか。

「確かに、昼飯時だもんな。昼飯は…」

ガラ…

「… 雄二。お昼」

「翔子？どうしてここに… Aクラスは補習なんかないだろ」

Aクラスどころかこのクラス以外は休みだ。だから、翔子が来た事には雄二じゃなくても驚く。

「… 一人で自習してた。雄二がいるなら休日でも来る」

「来なくて良い」

「… 雄二がいないなら、平日でも来ない」

「そりゃ問題あるだろ」

どちらかと言えば、問題があるのはここまで言う翔子に対する雄二の態度だ。

「… 翔子。雄二と一緒に昼飯を食べたいのはわかるが飲み物はどうした？」

「… 忘れてた」

昼飯の弁当以外特に見当たらなかったから聞いたのだが、忘れてたのか。

「とりあえず、オレは購買に飯を買いに行ってくるぞ。ついでに飲み物も買ってくる」

「大地よ、ワシも付き合っぞい。一人では何かと大変じゃろ」  
「ああ、頼むわ」

皆の要望を聞いてから大地は秀吉を連れて教室を出ようとしたが…

「雄二。これだけは言っとく」

「なんだ」

「恋人を蔑ろにするのは、自分が損するだけだぜ？」

「さっさと行け！」

雄二 side

「…全く、一言余計だな、あいつは」

大地と秀吉が教室を出た後に、雄二は一言ボヤいた。

「… 雄二。大地は私を気遣って言ってくれた。だから、あまり悪く言わないで」

「まあ、あいつを悪く扱う事は無いだろうな」

今の言葉に、恐らく嘘はない。翔子は自分以外の人間と親しくしているのはあまり見ない。それなのに大地は翔子と名前で呼び合うほどに親しくなっているから驚きだ。

「あれ、アキは今日お弁当なの？」

「まあね」

島田は明久が弁当を取り出した事に違和感を感じたのだろう。雄二

もそれは感じているが…

「…なんだ、その中身は」

弁当の中は、小さな固形物が一個だけだった。

「67分の1サイズのカップ麺だよ」

「67分の1？」

良くそんなサイズに切れたものだ。

「半分の半分の半分の半分の半分の半分」

「明久、そりゃ64分の1だ」

「……………分数の計算は鬼門」

確かに、明久には厳しいか。

「（パク）ごちそうさま」

「わびしいな…」

「……………涙を誘う食事」

ガラ…

突然、教室の戸が開いた。二人が戻って来たのかと思っただが、飲み物八人分と各自の飯を買いに行った割には早いだろう。

「おじゃましまーす。大地、いるー？」

入ってきたのは、見知らぬ女子だった。雰囲気的に二年ではなく、三年だろう。しかも、大地の知り合いだ。このクラスに大地という

名前は一人しかいない。

「大地なら、さつき購買に行きましたよ」

「あゝ、入れ違いになっちゃったかな。すぐに戻って来るよね？」

「多分、そう時間はかからないかと」

明久がひとまず、大地がいない事を伝えた。

「そっか、すぐに戻って来るなら、ここで待つてようかな。君達は、

大地の友達みたいだから」

「そう言う先輩は、あいつの知り合いか何かですか？」

「知り合いと言うより、あの子のお姉ちゃんだよ？」

「「お姉ちゃん!!!?」「」」

雄二は何となく大地との関係が気になったので聞いてみたのだが、予想外の答えが返ってきた。

「大地つてお姉さんがいたんだ…意外だ…」

「幼馴染だけでなくこんな美人の姉がいるつてのは…羨ましいな」

「…雄二」

「翔子、どうし…頭蓋骨が軋むううう!?!」

何でいきなりアイアンクローを決められなきゃいけないんだ。ただ大地の事を少し羨んだだけだと言うのに。

「…浮気は許さない」

「何をどうしたらそうなるんだ!」

これを理不尽と言わず何という。誰かが助けてくれるかと期待したが、皆、大地の姉貴の存在に驚いてこっちを気にすらしらない。

ふと、ある変化が起きた。

「……か」

大地の姉貴がこっち、もとい翔子の方に目を向けている。そして

「可愛い〜〜！」

「…！？」

奇声？をあげ翔子に飛び付いた。

大地 side

「…っ!？」

購買でパンや飲み物を購入してから教室に戻る途中、大地は妙な寒気を感じた。

「どうしたのじゃ、大地」

「いや…何でもない」

気のせいだと秀吉だけでなく自分に言い聞かせて、教室に入る。

「うう〜可愛いよお〜！」

「…！？」

目に入ったのは、何者かに抱きつかれている翔子と、その光景に目



を点にしている雄二や姫路、島田ら。それに…

『『眼福じゃあー！！』』

雄叫びを上げ、鼻血を出しているFクラスの馬鹿共（康太と明久含む）。

「…一体何事なのじゃ？」

「オレが知るか」

ただ、わかったのは…翔子に抱きついているのが自分の姉、天音だと言っことぐらいだ。

「…ああ、大地に秀吉。戻って来たのか」

「雄二…何があつたんだ？」

「お前らが行った後、この人が来てな…この人は、お前の姉貴、なんだよな？」

「…その内、紹介するつもりでいたんだけどな。姉ちゃん、とりあえず翔子から離れる。かなり息苦しそうだ」

雄二は半信半疑だったようで、大地は質問に簡単に答える。それから翔子に抱きついていている天音に離れるように言う。

「あ、大地。いたの？」

「今戻って来たんだよ、ひとまず、翔子から離れるよ」

「…うん、わかった……………」

大人しく翔子から離れたが、何かを見つけ固まった。

その視線は大地…ではなく後ろにいる秀吉に向いているみたいだった。

「どうしたんだ、姉ちゃ」

「可愛い〜〜〜！」

「うお！」

突然、奇声を上げて突っ込んで来たので大地は思わず避けた。そして、秀吉に抱きついた。

「な、なんじゃ！？一体何事なのじゃ！？」

「こ、こ、この可愛い男の子は何！？大地より可愛い男の子はいないと思つてたのに…あゝもう可愛い〜！」

いきなりの事に戸惑っている秀吉に幸せそうな顔をする天音。大地はそれに別の意味で驚いていた。

秀吉を一目で男扱いするとはな…

「大地！助けて欲しいのじゃ！」

それに、この過剰な反応は…

「大地！？聞いておるのか！？」

放っておくのが一番、だな

「確か…姫路と島田はストレートティーだったよな？ほれ」

「え、うん…そうだけど…？」

「ありがとうございます…」

とりあえず、買ってきた物を渡すことにした。秀吉の身に起きてい

る惨状(？)とそれに平然としている大地に二人は困惑しながらも、それぞれストレートティーを受け取る。

「ああ、翔子にもストレートティーだったな。で、雄二にはコーラ」

「おい、大地。翔子の時みたいに秀吉は助けなくて良いのか？」

「…助けた方が良いのか？」

「あれを放っておくのは…クラスが大惨事になる」

平然としている大地に見かねた雄二が秀吉を助けるよう促す。大地は少し考えたがやはり躊躇うものがある。

「仕方ないな…アホ久」

「ん…？何？」

「お前の為に焼きそばパンとコーラ、買ってきたぞ」

「ホント！？ありがとう、大地」

「ただし、これをやるには条件がある」

「条件？そんなのは良いから…」

「秀吉を助けてこい」

飯をタダでやるわけがない。この条件に乗る奴がいるとも思えな「わかった、行ってくる！」…いた。とは言え、言ってくれたのは本気で助かる。秀吉の救助に行く明久を横目に大地は焼きそばパンを食べる。

「…それ、アキに買った物じゃないの？」

「元々オレの飯だ。それに…」

「それに？」

「…まあ、すぐにわかるさ」

そう言っつて、明久の方に目をやる。無論、他の皆もそちらに目を向

ける。

『あの、大地のお姉さん、秀吉が苦しそうだからその辺に…』

ゴツ ヒュン ダン

明久が天音に声をかけた瞬間、顔面に一撃を受け、壁にめがけて投げ飛ばされた。

「だ、大丈夫ですか、吉井君！」

「…大地、説明を」

「説明はするがその為に、止めてくる」

「明久の二の舞になるんじゃないのか？」

姫路は慌てて明久に駆け寄る。大地は開き直って止めに行く事にするが、今を見て雄二は懸念している。

「明久を生け贄にしたのは姉ちゃんの状態確認の為だ」

そして、今の状態は…ちょっと強引に行かないと止められない。

「……………（ガシツ）」

「康太、何で止めるんだ」

「…………… 良い写真が取れてる。それを邪魔しないで欲しい」

「お前は今の状況で何してるんだ」

康太に肩を掴まれ、止められるが理由がしょうもない事だったので振り払った。

「…姉ちゃん、秀吉を解放してやれ」

「大地のお願いでも今は無理い」

やはり、簡単にはいかないか。ここはやむを得ないないだろう。

「今日の晩飯、デザート抜きに」

「わ、わかった、離す！離すからそれだけは勘弁して〜！」

天音を止める最終手段（？）を行使したら慌てて秀吉を離した。

「さて、落ち着いたところで…姉ちゃん。皆に自己紹介と騒がせた事の謝罪を」

「うん、わかった。大地の姉の、十六夜天音です。さつきは騒がせてごめんね」

落ち着いた天音を左隣に座らせ、皆に紹介にする事にした。ちなみに、秀吉は右隣で買ったパンを食べては放心状態だ。

「で、姉ちゃんの左隣からさつき抱きついていた霧島翔子。二年の学年首席」

「ホント、さつきはゴメンね」

「…大丈夫、少し驚いたけど気にしない」

「その隣にいるのが、うちのクラスの代表で、翔子の夫になる坂本雄二」

「おい（怒）」

翔子と雄二の紹介。簡潔に言ったのだが、雄二は不満げだ。

「その隣が土屋康太。…まあ、大人しい奴だ」

「……………どうも」

ムツツリー二と紹介しても良かったが、説明が面倒なのでパス。実際、大人しいのは間違っていない。

「それで、島田美波と…死骸を挟んで隣にいるのが姫路瑞希」

「ん…さつきは翔子ちゃんとかに夢中で気にしなかったけど…二人も中々可愛いね」

「は、はあ…」

「ありがとうございます…」

島田と姫路も、明久が死骸扱いされてる事に何も言わない。…それだけ、天音の存在感が強すぎたのか。

「…その二人の間にいるのが、『観察処分者』の吉井アホ久」

「ちよつと大地！ちゃんと名前で紹介してよ！」

あ、復活した

「ああ、君があ有名な問題児ね」

「…はい、そうです」

そして一気に沈んだ。

「最後に、オレの隣に座ってるのが木下秀吉。生徒会にいる優子の双子の弟だ」

「ああ、どつりで木下さんに似てると思った」

じゃあ、何で優子にあの抱きつきはしてないんだ

最後は秀吉の紹介だ。放心状態だったから最後にしたのだが様子は…

「…ちゃんと男扱いされたのじゃ…」

小声で何かを言っていた。

「…って、いつまで呆けてるんだ、秀吉」

「ん…？おお、大地。どうしたのじゃ？」

「…お前、今オレが何をしているかわかってるか？」

「何をつて…さっき買ったのを食べておるのか？」

「」「」「」

これはかなりの放心状態だ。それほどにキツかったのか、天音のアレは。

「今、姉ちゃんの事を皆に紹介してるんだよ。前に約束したろ、その内紹介するって」

「おお、そう言えばそうじゃったな。確か…天音さん、じゃったか」

そこは聞いてたのかよ

「うん、そうだよ。よろしくね、秀吉君」

「う、うむ…よろしくなのじゃ…」

明るく挨拶する天音に対し、秀吉は顔を赤くしている。

先ほどのやり取りや秀吉が呟いた一言…考えられるのはあれしかないが…

そう決めるのはまだ早い、か

「一通り紹介も終わったし、説明してくれないか？大地」

「さっきの姉ちゃんのアレか？」

「それ以外に何かがあるんだ」

「簡単に言えば…可愛いモノ好きだから、だな」

「昔から可愛いモノを見るとつい、抱きついちゃうんだよねえ」

雄二から本題に入ると言わんばかりに話題を変えてきた。答える気がないわけではないので簡単に答える。

「へえ〜可愛い物が好きなんですか。女の子らしくて良いですね」

「……………」

明久が納得したかのように頷くが、その言葉に姫路と島田が不機嫌そうにしているのには気づかないのか。

「明久…さっきの出来事を見て何もわかってないのか？」

「どういう事？」

「今、大地が言った可愛いモノは…今お前が言ったように女の子らしい物だけでなく…その…」

「……………可愛い人物と言うのも含まれている」

雄二が明久に説明するが、途中から言いよどんだ。それを康太がフオローする。

「なるほど…つまり、秀吉や霧島さんは可愛い女の子だから天音さんに気に入られたわけなんだね」

明久が納得しているがその発言はアウトだ。そんな明久に大地は…

「姫路、島田。お前達はアホ久から見たらそこまで可愛いわけじゃ



ないようだぞ」

爆弾を投下する。

「へえ…面白い事を言うのね、アキ」

「私は可愛いくないんですね…?」

即座に殺気立つ島田と、涙目になる姫路。

「ひ、姫路さん!?!どうしたの!?!つて美波!僕の骨はそっちに曲がらなギャアアア!」

そして死刑執行される明久。

「…ところで姉ちゃん。今日は休みの筈なのに何で来てるんだ?」

「あ、忘れるところだった。はい、これ」

つまりは、大地が言わなければ記憶の彼方にあつたわけか。呆れながら天音が差し出した物を見ると…

「…弁当?」

「今日、持つてくどころか用意していなかったでしょ。だから、少し多めに用意しちゃった」

「いや、今日学校に来るのはオレ一人だから用意しなかったんだけどな」

「…迷惑だった?」

「そんな事はないから嘘泣きするな」

実際、こうして用意してくれたのは嬉しいと思っている。…口にはしないが。

「あれ、嘘泣きってわかる？」

「余裕でな。…それに、多めに作ってくれたのは幸いだし」

幸いだと思っただのは皆はまだ昼飯を食べていない様子だからなのだが、無理もないか。

「実はそれも見越して作っただよな」

「は？」

「せっかくだから大地の友達の様子を見てみたかったし、一緒にお昼にしようと思っただけ」

オレの友達がどんな奴らか興味持っただけじゃね？

そんな考えを持っていたが皆、一緒に昼食を食べるのを承諾してくれた。食べている間、天音関連の話で盛り上がっていた中、秀吉だけはあれからもずっと呆けていた。

「大地の友達、皆良い子だね」

「新学期に入ってからずっと一緒に行動していたけど悪い気はしなかったしな」

帰り道、大地は天音と秀吉達の事を話ながら歩いていた。

「その中に問題児二人いるのが気になるけどね、生徒会長としては」

雄二と明久の事か。確かにあの二人は一年の時からそう言われてたみたいだ。

「あの二人は好きでやってる訳じゃないと思うけどな」

翔子や友香以外は一年の時、クラスが違っていたから何とも言えない。

「そう言えば、あのメンバーで誰と付き合いが長いの？」

「あのメンバーだと…去年同じクラスの翔子、次いで秀吉…だな」

と云うか、いずれも今回天音の被害にあっているのは偶然で済むのだろうか。

「秀吉君かあ…あんなに可愛い男の子、大地以外に始めてだなあ…」

抱きついていた時の感触を思い出してるのだろう。今までにないくらい幸せそうな顔をしている。

「姉ちゃんが男と親しくするのって、可愛いかそうでないかの二択だよな…」

それを言ったら城戸先輩もそう言う考えに至るが…紗野先輩繋がりで知り合ったと言っていたから違うか。

「ん…今度優子ちゃんに秀吉君の事、聞いてみような…」

「絶対、嫌がると思うぞ」

「むしろ、今度はちゃんと秀吉君本人と話を…」

「…聞いてないな…」

完全に秀吉に夢中になっている。

そう言えば、今まで男に対してあんな感じになってたか…？

姉の急激な変化に、大地は戸惑いを隠せなかった。

11話 天音とFクラスと（後書き）

今更ながら、オリジナルの展開を妄想するのと実際に書くのは大変です…

天音と秀吉の関係はどうなって行くのか、作者にも読めません（笑）

11話・裏 秀吉と天音と…（前書き）

タイトル通り11話の番外編です。

終始優子視点です。

11話・裏 秀吉と天音と…

「ただいまなのじゃ…」

「おかえりー… ってどうしたの秀吉？」

帰って来たと思ったらふらふらと歩いている弟に優子は目が点になる。

「どうしたって…、何がじゃ？」

「アンタの様子よ。顔も赤いし、フラついているし…風邪でも引いた？」

「姉上…風邪を引いておったら学校には行っておらぬぞ…」

それもそうだった。朝起きた時、秀吉はいつも通りだった（寝ぼけていたから曖昧だったけど）。

「じゃあ…学校で女の子扱いされた挙げ句、セクハラでもされた？」「違うのじゃ…むしろ逆じゃ」

逆って事は…男の子扱いはされて、むしろセクハラを…

「アンタは一体何やってんのよ！」

「セクハラはしても無いしされても…姉上！ワシの腕はそっちには曲がらな…」

「じゃあ、一体どういう意味よ？」

説明次第ではこのままお仕置きは続行するつもり。

「その…男扱いしてもらえて、可愛がってもらったのじゃ」

「…………え」

優子は思わず、掴んでいた秀吉の手を離してしまった。

「ち、ちなみに…誰なの？その…可愛がってもらったって人は…」

「その事でな、姉上に聞きたいのじゃが…」

この状況で逆に聞いてくるって事は…優子の友人や知人って事？

「大地の姉の、天音さんの事なのじゃが…」

「…………え」

大地の名前が出た事に一瞬焦ったが、その姉の名が出た事に驚いた。

「せ、生徒会長といつ知り合ったの？」

「今日、Fクラスの教室に来たのじゃ。大地に弁当を持って行くのが目的での」

「じゃあ、さっき言ってた可愛がってもらったのって…」

「うむ、天音さんじゃ…（／＼／）」

顔を赤らめる弟に、優子は啞然とした。

「それで、姉上も生徒会に所属しておるから、天音さんの事を知っておると思つての」

「…アタシも、天音さんの事を詳しく知ってる訳じゃないわ。大地に聞いた方が早かったんじゃない？」

「そ、それもそうじゃな。明日そうするでしょう」

「…はあ…」

まさか、秀吉が恋愛感情を持つとは…。優子は先を越された気分



なつた。

翌日

「優子ちゃんみーつけた」

「か、会長…？」

教室に向かう途中、生徒会長に遭遇し…捕まった。

「ん〜何か堅苦しいね。よし、これから私の事を下の名前で呼びなさいな。もちろん、生徒会の皆も同様ね？」

「…それで天音さん。私に用があつてここに来たんじゃないんですか？」

とりあえず、天音さんの言うとおりにしよう。話がこじれるだろうし…大地の苦勞がわかつた気がする。

「ああ、そうだったね。実は優子ちゃんに聞きたい事があつてね…」

何か既視感<sup>デジャヴ</sup>

「秀吉君の事、教えて欲しいな、って…」

「……………」

二人して互いの事を知りたがつてる。ここまで両思いな二人は見たことがない。しかし…

「…ダメ？」

「え、あ、いや、ダメって訳じゃ…」

簡単に秀吉の事を話して良いのだろうか…。こう言うのは、自分で行動すべきじゃないか…

「あれ、ここで何してるの？」

「「あ、愛子<sup>ちゃん</sup>…」」

突然表れた愛子に優子だけでなく天音も焦る。

「じ、実はね…優子ちゃんに秀吉君の事を…」

「ちよっ…!?!?」

あっさり話す天音さんに優子は絶句した。

「秀吉君って、確か優子の双子の弟だよな？」

「え、ええ、そうよ…」

「…あ、噂をすればその弟君だ」

「「ええ!?!?」」

このタイミングで秀吉が来る…?天音さんがマトモに対応でき…

「じゃ、じゃあ私は教室に戻るからっ」

ずに天音さんは、凄い勢いで走っていった…。

「…何やってんだ」

「天音さんが真面目な顔で優子と話していたから少しからかってみたの」

「で、姉ちゃんは走っていったと」

「うん」

愛子がやって来た人物と話している…ってちょっと待って。

「な、何で大地がいるのよ!？」

「いきなり何だ」

愛子が弟君と言ったからてつきり秀吉の事かと思っていた。そこに大地が現れたのだから驚くに決まっている。

「あ、そうだ大地。天音さんに何かあったの？」

「ん〜、何かあったか、と言われるとないとは言えないな…」  
「口ごもる大地は珍しいが今は気にしてる場合じゃない。」

「…愛子。姉ちゃんの好きな物は知ってるよな？」

何でいきなり天音さんの好きな物の話？

「天音さんの好きな物って…可愛いモノでしょ？」

「へえ…天音さん、意外な趣味してるのね」

失礼だとは思うけど、もっと奇抜な趣味をしていると思っていた。ふと、愛子が何かに気づいたみたいで顔が引きつっている。

「それなら、その事を秀吉に教えたら？秀吉なら、そう言った物をあげると思うし…」

「いや、あいつはもうあげたよ…別の意味で」

秀吉の為に言ったのに、何故か大地はばつが悪そうな表情をしている。

「あのね、優子…天音さんの可愛いモノ好きって言うのは人も含んでるの」

大地と同じ事を考えていた愛子が説明してくれた。それを聞いて、優子は色々考えをまとめた。

「…じゃあ、天音さんの可愛いモノ好きに秀吉は当てはまっただけ？」

「その通りだ…」

天音さんの秀吉に対する見方はわかった。ただ、そうになると疑問が残る。

「でもね、秀吉は天音さん事を聞く前に別の事を言ってたわよ？」

「昨日のあいつの様子で何を言うんだ…」

それは否定できないけど、確かに言っていた。

「秀吉、男扱いしてもらえて可愛がられた事を喜んでるみたいだった」

優子は昨日の様子をそのまま二人に言ったが、二人は啞然としていた。

「…つまり、今の優子の言う秀吉と、姉ちゃんの様子…こりゃあれだな」

「ボクも、二人の話を聞いてるだけでわかったよ」

啞然としていたが、すぐに正気に戻る二人。その結論は、あれしかない。

「姉ちゃんと秀吉は……」  
「互いに惚れてる」「」

## オリキャラ紹介

十六夜 天音 (いざよい あまね)

5月1日生まれ O型

身長：165?

体重：49?

趣味・特技：実験

成績：380点前後、苦手科目はない

家族構成：父・弟

性格：外向的気分屋

十六夜大地の姉。

中学生時、アメリカに留学していた。

家事スキルは大地と同様にこなせる。

可愛いもの好きで自分が可愛いと認識すればそれに夢中になる。

逆にそうでないものには興味を示さず、適当に扱う。

運動神経は人並み。しかし、可愛いモノを目にした際の動きは周りを驚かせている。

弟の大地をかなり愛でており、大地曰わく酷い仕打ちをする。

全体的なイメージは恋姫十無双の 紗。召喚獣

武器 鞭

装備 チャイナドレス

紗野 亜季 (さの あき)

血液型：A型

身長：162？

趣味・特技：

成績：340点前後、苦手科目は理数系科目

家族構成：祖父・父・母

性格：温厚

生徒会所属書記。

「紗野宮財閥」の跡継ぎ。しかし、継ぐ気はなく、現在はやりたい事を模索中。

城戸義高とは幼馴染（大地と愛子ほどの仲ではない）。

天音とは文月学園に入学してからの親友。

部活はバレーボール部に所属しており、後輩からは慕われている。

城戸きと 義高よしたか

血液型：B型

身長：171cm

趣味・特技：

成績：320前後、化学は400以上

家族構成：祖父、父、母、弟

性格：冷静だが、やや堅物

生徒会所属庶務。

生徒会発足の際に、暴走しかねない天音やそれに便乗する亜季の監視目的で庶務として生徒会に所属する。

医師をしている親に憧れ、いずれ自分もなるために常に医療の勉強を欠かさない。

## オリキャラ紹介（後書き）

ひとまず天音・亜季・義高の3人だけ

まだ他にもいるんですが考えてな…

コホン

人数がそろい次第載せます



## 12話 学園祭は準備も楽しめる

文月学園、新学年最初の行事、『清涼祭』

新緑が芽吹き始めた頃にあるこの行事の為に生徒達は準備を始めていた。

生徒会室でもその運営の為に朝から集まっていた。

「…で、何でアンタのクラスは何も決まっていけないわけ？」

「代表には言っているんだがな…」

優子に咎められるも、大地は軽く受け流す。大地のいるFクラスは準備どころか出し物も決まっていけないから仕方ないが。

「…決まっていないのは大地君のクラスだけだから早くした方が良くんじゃないか？」

「そうは言っても、教室に行ったら殆どの人間がいないんだからどうしようもないでしょ、義高先輩」

義高先輩も、Fクラスの出し物が決まっていないのを危惧しているみたいだ。

ちなみに、互いに名前呼び合っているのは親しくなったから、と言う訳ではなく…

『これから生徒会としてやってくんだから、お互いに親しみを込めて呼び合わないとね』

と言う天音の発言からこうなった。

大地からしたら、呼び方を変えるのは二人だけだから特に支障はな

いが。

「でも、流石に決まってるないのはマズいから教室に戻って、話し合ったら?」

「亜季さん、オレが離れるとつるさくなるだろ。…姉ちゃんが」

「大地、お姉ちゃんはその風に見えるの?」

今の姉ちゃんに対する素直な心境の一部だから仕方ないだろ。

「…そうね。今の天音は、暴走する可能性があるわ」

「…僕も、それには同意だ」

「…私も、出来れば大地には天音さんを監視して欲しいわ」

そして、大地の言葉に納得してくれる三人。優子はともかく、亜季先輩と義高先輩が納得してくれるのは…実際に被害にあつたのだから。う。

「…皆酷いね…私が暴走する事なんて滅多にないのに…」

なら、秀吉絡みで暴走しかねない事をどうにかしてほしい。

「むう…大地、早く自分のクラスに出し物を決めて来て。その間こっちは私達でやっておくから」

「…了解」

ここは逆らわないでいよう。逆に危険だ。

「…意外だな。皆、ちゃんと揃っているじゃん」

大地が教室に戻ると、全員席に着いていた。

「今、3つほど意見が出たところよ」

「どれどれ…」

何故か壇上立っている島田から、経過を聞く。ちょうど、明久が板書を終えている。ちゃんと話し合ってるのに感心しながら黒板を見るとそこには

『候補？ 写真館〜秘密の覗き部屋〜』

『候補？ ウエディング喫茶〜人生の墓場〜』

『候補？ 中華喫茶〜ヨーロッパ〜』

以上の3つが黒板に書かれていた。

「…鉄人が見たら、補習の時間を倍にしそうだな」

「…何も言わないで」

呆れてこれ以上は何も言う気にならない。島田も同様だ。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

考えた矢先に、鉄人が教室に入って来た。

「とりあえず、3つ候補が上がってる」

大地はそう言って黒板を指し示す。

「…補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

大地と全く同じ感想を言った。

『せ、先生！それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

クラスの連中が明久をバカ扱いして弁明しようとする。

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

鉄人の一喝で、背筋が伸びる一同。やはり、クラスメイトを売ってその場を逃れようとするのが気に入らないのか。

「先生はバカな吉井を選んだ事自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

間違っではない。

「全くお前達は……少しは真面目にやったらどうだ稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そう言ういった気持ちすらないのか？」

溜息まじりの鉄人の台詞。それを聞いて、クラスの連中の目が急に動き出した。

『そうか、その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気に活気づく教室内。元々設備に不満を感じて試召戦争を始めたのだから当時より更に低い設備では我慢ならないのも当然だろう。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

意外にも姫路も、立ち上がって胸の前で手を握りやる気を見せている。姫路は設備に不満が無かった訳ではないだろうがこんな風に率先するとは思わなかった。

『出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと生徒会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

逆に生徒会に所属している大地の目の前で決まりそうになったら、絶対に阻止している。

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新ししに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が高すぎる。二日じゃ儲けは出ないんじゃないか？』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

クラスの連中はやる気になったものの意見がまとまりそうに無かった。

「はいはい！ちょっと静かにして！」

島田が手を叩いて注意するが、効果はあまりない。次から次へと意見が出はじめる。

『お化け屋敷なんかの方が受けると思う』『簡単なカジノを作ろう』『焼きとうもろこしを作ろう』

さらに意見がバラバラになっていく。試召戦争のときとは比べ物にならないほどのまとまりの無さだ。これをまとめられる雄二に、改めて凄さを感じる。

「はあ、まったくもう…。これじゃまとめられないじゃない」

「そもそも、こういうのは雄二の専売特許だろ。何してるんだあいつは？」

「雄二は興味の無い事には驚くほど冷たいからね…」

この二人が議事進行を行っているのはそう言うことだったのか。

「それにしても、これは多少強引に決めないと埒があかないな」

「そうね。ほら、静かにして！決まりそうにないから、店はさっきの拳がった候補から選ぶからね！」

業を煮やした大地に同意する形になった島田が無理矢理話をまとめる。これは正しい仕方ないだろう。

「ほらっ！ブーブー言わないの！この三つの中から一つだけ選んで手を挙げる事いいわね！」

反論を眼力で押さえ込み、島田は決を採りにかかる。こういった事はある意味、島田だからこそ出来るのかもしれない。

「それじゃ写真館に賛成の人！…はい、次はウェディング喫茶！…  
最後、中華喫茶！」

騒がしい中、島田の声が響く。挙げられた手の本数をカウントした  
結果は…

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」  
僅差で中華喫茶に決まった。決まったところで、大地はある用紙を  
取り出す。

「大地、それは？」

「企画書。このクラスだけが提出されてなくてな」

本来、代表の雄二がやる仕事だが代わりに自分が書くだけだ。  
総合的な責任者はサボった罰の意味を含めてクラス代表の雄二、食  
品を扱う為そっちは…康太と須川か。ホールは…とりあえず、雄二  
って事にしよう。

ゾクッ…

あらかた書き終えた時、寒気を感じた。その方向を向くといるのは…

「それじゃ、私は厨房班に…」

姫路だ。平然と厨房班に入ろうとしている。

（アホ久！）

「（了解！）ダメだ姫路さん！君はホール班じゃないと！」

明久にアイコンタクトを取る。食品を扱うのだ。食中毒で終わらせ  
るわけにはいかない。

『二人とも、グツジョブじゃ』

『……………！(コクコク)』

その破壊力を体験している秀吉と康太からのアイコンタクト。一番  
の被害者の雄二は寝てるから気づいて…

『……………(ガタガタ)』

ないと思ったが小刻みに震えている。自分と同様に寒気を感じたの  
かもしれない。

「吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

自覚のない抹殺、もとい必殺料理人が首を傾げる。

(大地！)

「(そこはオレか！？) あーまあ、なんだ。姫路はホールの方が良  
いんじゃないか？可愛いし、店が繁盛するだろ」

「か、可愛いだなんて…」

「……………」

自分が言うのは意味がないだろ、そう悟った大地は明久が思ってい  
る事にしたくなった。

「…それに、アホ久は姫路の接客を見たがっているし、されたいと  
思っているからな」



『痛あゝ！み、美波！僕の背中サンドバッグじゃな…』

「吉井君がそう考えてるなら、私、ホールでも頑張りますね」

頑張るのはホールだけにしときなさい

そう言いたいのだが、何故か言ったら負けな気がするのであった。

「アキ。うちも厨房にしようかな？（棒読み）」

何気なく聞こえた島田の台詞が棒読みに思えたのは気のせいだろう。

「うん。適任だと思う」

「……………」

そして、それをあっさり認める明久。この流れでそれはない。

「それなら、ワシも厨房にするかの」

「秀吉、何をバカな事を言ってるのさそんなに可愛いんだからもちろんホールに決まってるじゃないか。大地もそう思うでしょ？」

「アホ久、そろそろお前も潮時だな」

「大地？一体何を言ってみぎやああっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨があ！」

「…ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね…。それが良いと、思います」

こんなドタバタの状態だが、Fクラスの出し物は無事？決まるのだった。

### 13話 一念発起

「さて、と。企画書を提出しに行くか」

放課後、大地は生徒会室に向かうことにした。

「む？大地よ、生徒会室に向かうのか？」

「これを出さねえと、優子に説教喰らっちゃうからな」

そして、その様子を別の意味に解釈した天音にからかわれる。これほど面倒な事はない。

「なら、ワシも一緒に行つて良いかの？」

「そりゃ構わないが…何か用事でもあるのか？…主に姉ちゃんに」

演劇部に所属しているとは言え、秀吉が生徒会に用事と言つたら…あれぐらいしか考えられない。

「なな何を言つておるのじゃ、大地！ワシは天音さんに会いたい訳じゃ…」

「…オレは優子の事を言つたんだがな」

「あ、姉上の事じゃったのか…？てつきり天音さんの事を言つておるのかと…」

実際天音の事を言っていたがここまで顔を真っ赤にしている時点で図星だと言つのがわかる。と言つかこっちが照れる。

「…ま、お前が誰に用があるかは、生徒会室に行けばわかるか。行くつぜ」

「う、うむ…」

『だって、アキと坂本って愛し合ってるんでしょ？』

『もう僕お婿に行けない！』

十中八九、天音に会いたがっている秀吉を連れて教室を出ようとしたら、島田と明久の妙な会話が聞こえた。

「って、誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

「あ、明久…？」

明久の発言に秀吉の動きが止まる。そもそも、何で愛し合っていると言われて雄二より秀吉の方が良いって台詞が出るんだ。

「そ、その…お主の気持ちは嬉しいが、そんな事を言われても、ワシらには色々障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか…」  
「ひ、秀吉！違うんだ！もの凄い誤解だよ！さっきの言葉のアヤで！それと、僕らの間にある障害は決して歳の差じゃないと思う！」

あまりの事に秀吉が壊れた（明久は元々壊れていたみたいだが）。

「それに、ワシには、す」

「ところで島田！お前たちは何の話をしてたんだ！？」

秀吉がとんでもない事を言いそうになった為、強引に話題を変える。

「清涼祭の事で、坂本を引っ張り出せないか、って話をしてたのよ」

「雄二を？恐ろしいぐらいにこの行事に興味のないあいつを引っ張

り出すのは、難しいだろ」

代表のくせに他の奴に任せて寝てしまっただし。

「なんとかできないのかな…このままじゃ喫茶店が失敗に終わるよ  
うな…」

「ま、失敗してもある程度なら生徒会がフォローするさ」

「そうそう、そこまで深刻に考えなくても」

「うっん、そうじゃないの。本当に深刻な話なのよ…」

「どっぴいっ事？」

島田の様子がおかしい。自分のクラスの出し物を成功させたいのはわかるが、たかが、学園祭だ。そこまで真剣になる必要はないだろ  
うに。

「本人には内緒にして欲しいって言われてただけど、事情が事情  
だし…」

本人には？ 一体誰の事だ。

「もしかしたら瑞希、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

「姫路が？どっぴいっ事だ」

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちや  
うかもしれないの」

「じゃが島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然繋がらんの  
じゃが」

落ち着きを取り戻した秀吉が小首を傾げる。

「島田。姫路の転校の理由って、もしかしてFクラスが原因なのか

「？」

「そうなのよ。正確には『Fクラスの問題環境』が問題なんだけど」

「って事は、転校の理由は両親の仕事の都合とかじゃなく…」

「そうね。純粹に設備の問題ってことになるわ、それに瑞希は身体も弱いから…」

大地の考えは大体あつてた。この劣悪な教室の環境は姫路の健康を害する可能性もある。

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたのじゃな」

「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝してお父さんにFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

Fクラスはバカの集まりだからというのが転校を勧められる一因だから姫路の行動も間違つてはない。ただ、大地は気になる事があつた。

「…姫路に転校を勧めたのは、父親なのか？」

「え、ええ…瑞希はそう言つてたわね…」「そうか…」

やはり、と言うか何というか。

このクラス（主にアホ久）が好きだと言つていた姫路が転校したがる訳がない。するとしても、親の独断と偏見で決められている。それが非常に

「…どうしたの？ 凄い怖い顔してるけど」

「…別に。何でもない」

非常に腹立たしい事だ。両親の、父親の都合で勝手に自分の行く先を決められる。似たような経験のある大地は、憤りを感じずにはいられない。どうやら、それが顔に出ていたようで、島田も秀吉も萎縮している。

「…ところで、アホ久が大人しいがどうしたんだ？」

「む、いかん。静かじゃと思っておっいたら処理落ちしとるぞ」

「全く、不測の事態に弱いんだから！」「明久、目を覚ますのじゃ！」

秀吉が明久の肩を揺する。大地は明久がボーっとしているから確認したのだが、姫路が転校すると聞いてからずっとこの状態なのだろうか。

「秀吉…モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい…？」

「…どういう処理をしたら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら？」

「ある意味、稀有な才能かもしれんわう」

「はっ、そうだ。姫路さんが転校って、どういふ事さ！」

「…「はあ…」「」」

今まで意識が飛んでいたみたいだからわかってはいたが、ため息をつかずにはいられない三人だった。

〈説明中〉

「それで、アキはその…瑞希が転校したりとか、嫌だよね…？」  
大地が説明を終えた後、島田が探るような目で明久を見ている。明久にとって姫路は特別な相手だということは島田もある程度気づいてるようだから、明久を意識している節のある島田にとっては気に

なることのようにだった。

「もちろん嫌に決まってる！姫路さんに限らず、それが美波や秀吉や大地であつても！」

「そっか……。うん、アンタはそうだよね！」

実に明久らしい、シンプルな答えだ。そんな明久の答えに島田は嬉しそくに頷く。

「それじゃ、雄二を焚きつけないとな」

「幸い、まだ学校にいるみたいだしね」

明久は雄二に連絡を取るため、携帯で電話をかける。呼び出し音が受信器から聞こえる。

「もしもし、あ、雄二。ちょっと話が」

明久が雄二に話をしようとする。

「え？雄二。今何してるの？」

が、様子がおかしい。

「雄二！？もしもし！もしもーし！」

こつちの話を伝える前に切られたようだ。

「坂本はなんて言つてた？」

「えっと『見つかった』とか『鞆を頼む』とか言つてた」

「……なにそれ？」

島田が使えない奴を見るような目で明久を睨む。今のは流石に明久のせいではないと思うが。

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからのう」

秀吉が腕を組んでうんうんと頷いているが、秀吉の天音に対する態度を考慮するとあまり言えた事ではない。

「そうすると、坂本と連絡取るのは難しいわね」

島田が大きく息を吐く。

「いや、これはチャンスだ」

明久がいきなり明るい声を出す。

「え？どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちよつと三人とも聞いてくれるかな？」

「それはいいけど…坂本の居場所はわかってるの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃないさ」

「何か考えがあるようじゃな」

「お前が頼もしく見えるなんて、珍しいこともあるんだな」

「まあね」

明久が雄二がいそうな場所とやらに行った後、大地は生徒会室に向



かった。本来の目的である企画書提出の為だ。

秀吉を連れて来ようと思っただが、明久に必要なだからと止められた。秀吉は渋っていたが、仕方なく教室に残っている。

まあ仮にこっちに来たら、色々面倒があつたから助かるが…

「誰かいるかー？」

大地はひとまず生徒会室に入る事にした。

「ああ、大地君か。出し物は決まったのか？」

「決まらなきゃここに来れませんよ義高先輩。とりあえず企画書」

「ご苦労様」

生徒会室で作業をしていた義高先輩に企画書を渡す。義高先輩以外いないようだ。

「義高先輩一人だけですか？」

「いや、天音もいたはず…」

とは言っても、見当たらない…と思っただが、机から見覚えのある髪が見えた。

「…何してんの、姉ちゃん」

「何か、こうした方が良くもって感じてね…」

「オレが秀吉を連れてくるかもしれないと思っただわけか」

「（ギクッ）」

図星のようだ。ここまでわかりやすい反応を大地は見たことがない。

「…大地君、いくらなんでもあつさり言い過ぎだ」  
「…オレも反省しています」

企画書提出以外にも用があつたのだが、天音がこの状態では言い辛い。

「それにしても、すごい名前だな。この『中華喫茶 ヨーロピアン』は」

「ネーミングにはツツコまない方向で」

義高先輩は先ほど渡した企画書に目を通して感嘆(?)の声を上げる。大地としては触れないでほしかった。

「けど、Fクラスの教室で食品を扱って大丈夫なのか？」

「その辺は上手くやりますよ」

最も、雄二の協力があればこそだがそれは明久達が雄二を捕まえられれば何とかなるだろう。

「それと、できればクラスの方に専念したいけど、大丈夫ですよね？」

「その辺は…大丈夫だな、天音？」

「そうだねえ…大地達のクラスの出し物が決まったからある程度は大丈夫だね」

立ち直った天音から許可が下りたなら何の問題もない。

「それじゃ、教室に戻るから」

「ああ、大地。ちよつと、伝言頼めるかな？」

扉に手をかけたところで天音に呼び止められた。伝言の内容はともかく誰に伝えるかは十中八九わかつている。

「えっと…Fクラスの出し物を楽しみにしてるって」

「りょうくかい、伝えておくよ。…」

内容を聞いて大地は小声で秀吉に伝えると言ってから生徒会室を後にする。その途中、鉄人と思しき声が聞こえたが気のせいだと思うことにした。

「そうか。姫路の転校か……」

大地がFクラスの教室に戻ると、明久が雄二を捕まえて戻ってきたところだった。

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

雄二は教室内を見渡し俺が薄々思っていた事を告げる。

「不十分？どうして？」

明久が疑問を投げかける。

「姫路が転校を勧めた要因は恐らく三つ」

そついい、雄二は指を三本立てて見せた。

「まず一つ目。ござとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功したらなんとかなる

だろっ」

そう言いながら指を一本引っ込める。

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ目は道具で二つ目は教室自体ってこと？」

「確かに。これに関しては喫茶店の利益程度じゃ改善できそうにないな。教室全体の改修となると学校側の協力が必要になる」

大地が雄二の言いたいことを代わりに言う。

「そして、三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことのできない教育環境だ」

雄二の言うとおり、能力を伸ばすために実力の近いもの同士を競わせる事は普通によくある話だ。しかしこのFクラスではそんな相手もおらず、Fクラス内で姫路の次に成績の高い大地でも競争相手になれるか怪しいものだ。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しいのっ」

明久と秀吉が不安そうに言う。

「そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだろっ？」

雄二が島田に視線を送る。島田が言っていた召喚大会に出ると言う

話か。Fクラスにも学年トップと渡り合える生徒がいるという証明になるだろう。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。』どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見せ物にされるだけみたいで嫌だけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「翔子が参加するようなら優勝は難しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は充分ありえるだろう」

雄二の意見には大地も賛成だ。翔子が参加するととなると恐らくパートナーもAクラスの生徒だろうし、そうなると姫路でも勝てる見込みは薄くなる。

「本当なら姫路抜きでFクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

雄二がこちらを見てそう言う。

「事が事だけに別に俺がパートナーになっても構いやしないが、姫路が島田を選んだんなら島田が出たほうがいいだろ」「姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるし一石二鳥じゃな」

秀吉も頷く。Fクラスは古臭くて汚れた旧校舎にあるから、宣伝の効果は高く見込めるはずだろう。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題は どうするの？」

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

雄二は当然のように言うのける。

「それだけ？僕らが学園長に言っただけで何とかしてくれるかな？」

「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

雄二はそう言うが、学園長が簡単に首を縦に振るとは思えない。

「それなら、早速学園長室に行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。大地と秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人が来たら俺達は帰ったと伝えてくれ。」

「うむ。了解じゃ。鉄人とついでに霧島翔子にも見かけたらそう伝えておこう」

と微笑む秀吉。翔子の名前を出されて雄二は言葉に詰まっていた。

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「オツケー。任せといてよ」

島田の声援を受けた明久と雄二が教室をあとにしようとする。

「雄二。ちょっと良いか？」

「なんだ大地。お前も来るのか？」

「ああ、生徒会としても放っておける話じゃないし、オレが行けば交渉も上手く行くだろ？」大地は雄二を呼び止め、一緒に行くことを願い出た。設備の方もあるが、自分の事もあるからだ。

「わかった、なら三人で行くか」

「うん」

「あいよ」

雄二、明久、大地の三人は学園長室に向かった。

13話 一念発起（後書き）

タイトルが思いつかなくなってきた…



## 14話 学園長と交換条件

『…賞品の…として隠し…』

『…こそ…勝手に…如月ハイランドに…』

新校舎の一角にある学園長室の前まで来ると扉の向こうから言い争っている声が聞こえてきた。

「こりゃ、中にいるな。学園長」

「無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

雄二の言うことはもつともだ。せつかく来たのだから用件だけでも言っておきたい。

「失礼しまーす」

「いや、返事を待てよ」

立派なドアをノックしてからすぐに入る明久と雄二を大地は諫める。

「そいつの言うとおり、返事は待つもんだよ。失礼なガキ共」

大地達を迎えたのは、長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長だ。試験召喚システム開発の第一人者で、大地の生徒会入りをあっさり承認しやがった人物だ。大地の生徒会入りをあっさり承認した張本人だ。しかも生徒をガキと呼ぶあたり、性格が良くないことも伺える。

「やれやれ、取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話の続きができません。…まさか、貴女の差し金ですか？」

眼鏡をいじりながら学園長を睨みつけたのは教頭の竹原教諭だ。

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないんだい。負い目があるわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

そういう腹の探り合いは今やらない方が良いんじゃないか？

「さつきから言ってるように、隠し事なんてないさね。アンタの見当違いだよ」

「…そうですね。そこまで否定去られるのならこの場はそう言うことにしておきましょう」

そう告げると、竹原教諭は部屋の隅に一瞬視線を送り、

「それでは。この場は失礼させていただきます」

踵を返して学園長室を出て行く。竹原教諭の視線の先には何も見当たらないか…何だったのだろうか。

「んで、ガキ共。アンタらは何の用で来たんだい？」

竹原教諭との会話を中断された事を気にせず、学園長はこちらに話を振る。

「今日は学園長にお話があつて来ました」

学園長の前に立ち、雄二が話を切り出す。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営の事なら教頭の竹

原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ」

こんな横柄な婆さん、大地は見たことがない。雄二の顔を窺うと、表情に変化はないが、口元がひくついているのがわかる。

「失礼しました。俺は二年Fクラス代表の坂本雄二。こっちは生徒会副会長の十六夜大地」

雄二がこちらを示し、大地はそれに応えるように会釈する。

「それでこっちが」

次に明久を示し、紹介する。

「二年を代表するバカです」

不思議と、雄二の言わんとする事がわかった。

「ほう…そうかい。十六夜の弟に、Fクラスの坂本と吉井かい」

「ちよっと待って学園長！僕はまだ名前を言ってますよね!？」

さっきの紹介は明久を紹介するには充分なはずだ。

「気が変わったよ。話を聞いてやるうじじゃないか」

悪役のように口の端を吊り上げる学園長。

「ありがとうございます」

「礼を言う暇があるならさっさと話な、ウスノロ」

「…わかりました」

それにしても、ここまで罵倒されてるのに落ち着いている雄二は大事なものだ。大地なら、そろそろキレル。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「生徒会の人間まで連れてきて、暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

言動がおかしくなっていないか？

「学園長のように江戸時代から生きている老いぼれならともかく、普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性もあります」

丁寧な口調の中に危険な言葉が紛れ込んでいる。これは雄二もキレかけてると言う事が。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるからさっさと直せクソババア、と言うことです」

いつもの雄二だな、うん

「……………」

慇懃無礼な雄二の説明を受けて、学園長は思案顔になって黙り込む。

「……………ふむ、ちょうど良いタイミングさね……………」

今、何か言ったよな…？

小声でわからなかったが。

「よしよし。アンタ達の言いたい事はよくわかった」

「それじゃあ、直してもらえるんですね！」

学園長の言葉に明久の表情が明るくなる。姫路の為に動いた明久からしたら、ありがたい話…

「却下だね」

の、はずなのだが…

「雄二、大地。このババアをコンクリに詰めて捨てよう」

「…明久。態度には少し気を遣え」

明久は思わず本音が出たのだろうが、大地はひとまず諫める事にする。

「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「…十六夜。こいつらは本当に聞かせてもらいたいと思っているのかい？」

「さっさと話せばこいつらも納得すると思いますよ」

二人の台詞に呆れ顔になる学園長。大地はまともな事を言うておく。

「大体、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタ

ガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキ共」

やれやれ、このばあさんは…面倒くさいな

「それは困ります！そうになると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」

「と、いつもなら言っているんだけどね」

明久の台詞を遮り、学園長が顎に手を当てて続きを話し始める。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みを聞くなり、相談に乗ってやるうじゃないか」

条件付きとはいえ、話を聞いてくれるみたいだ。これで何とかなるだろう。雄二が考え込んでるのが気になるが。

「その条件って何ですか？」

黙り込んだ雄二に代わって明久が話を進める。

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「優勝賞品？」

どうやら、知らないみたいだ。仕方ない、説明するか。

「学園から贈られるのは、賞状とトロフィー、『白金の腕輪』、副賞には『如月グランドパーク プレミアムペアチケット』が用意してあるんだ」

「って、何で大地が知ってるのさ」

「そりゃ、生徒会メンバーには知らされてるからだ」

なるほど、と明久は納得した。一方で雄二がピクツと反応していた。何に反応したかはわからないが。

「その副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「回収するなら、始めから出さなければ良いじゃないですか」

「できるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園と如月グループで行った正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないんだよ」

確かに、賞品の話も教頭から生徒会には知らされていた。

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

悪い噂の内容が気になる大地は、話を進めるよう言う。学園長はつまらない内容なだけだね、と前置きしてから口を開いた。

「如月グループは如月ランドパークに一つのジnkクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

「…そのどこが悪い噂なんです？良い話じゃ…」

「そのジnkクスを作るために、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと!？」

突然、雄二が大声をあげた。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まってるだろ！今ババアが言ったのは、『プレミアムチケットでやって来たカップルを強引に結婚までコーディネートする』って事だぞ！？」

「そのまんまじゃん」

狼狽える雄二に対する明久とのダブルツッコミ。中々ない、貴重なものだ。

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

「ま、うちの学校は妙に美人揃いだし、話題性もある。学生から結婚までいけばジंकウスとしては申し分ないから、如月グループが目をつけるのも当然だよな…」

大地の言葉に、雄二は悔しげに唇を噛む。

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことでもないし、第一僕らはその話を知ったんだから行かなければ済む話じゃないか」

明久がなだめるが、雄二は聞いていない。大方、翔子に連れて行かれるのを恐れているのだろう。

「…絶対にアイツは参加して優勝を狙ってくる…。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚…俺の将来はあ…！」

雄二の目が虚ろだ。その台詞から、翔子との約束で破った時の代償を気にせずに請け負ったのか。



「…まだ高校生なんだからすぐに結婚はないだろ。如月グループもその辺は考慮するだろうし、一緒に行けば良いじゃん」

「簡単に言うな！俺の人生がかかってるんだぞ！？俺よりも大地が誰かを誘うなり、天音さんと行くなりしろ！」

ちよつと待て。今、何を言ったんだ、雄二は。

「何でそこで姉ちゃんが出てくるんだ！？オレと姉ちゃんで行ったら色々問題だろ！」

大地はカツとなって反論する。

「大丈夫だ！文月学園の生徒会長と副会長が一緒に行って仲の良い様子を見せればこの学校の評判もあがる！」

「その瞬間オレは世間的に変態扱いを喰らうわ！お前と翔子が行けば評判もあがるし、二人は幸せになれるはずだ！」

「俺が不幸になってるだろ！」

「オレが不幸になるよりはリスクは低い！」

売り言葉に買い言葉。大地と雄二は譲る事なく言い争う。その時…

ドフツ！ x 2 「げふっ…」

腹部に衝撃が走り、その場にうずくまる。雄二も腹部を抑ええる所を見ると殴ったのは…明久か。

「二人共、話が脱線してるよ。それで学園長、交換条件つてのは「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。できたら、教室の改修くらいしてやるうじゃないか」

大地と雄二の言い争いを止めた明久が話を進めるといふ妙な形にな

った。学園長も、二人の取り乱しように気にかけていない。

「無論、優勝者から強奪したり譲ってもらったのはするんじゃないよ。私は吉井と坂本に召喚大会で優勝しろ、と言っているんだからね」

学園長の言葉に明久がバレたと言っような表情をしている。

「学園長、オレがこいつらのどちらかと組む、と言っのはダメなんですか？」

「ああ、アンタが出たら簡単に優勝するだろうし、宣伝にならないからダメだね」

大地は気を取り直して、学園長に尋ねるがしようもない理由にため息をつきたくなった。というより、広告塔扱いに変わりが無いことに何とも言えない気分になった。

「：僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上は約束してくれるんですね？」

「ああ、優勝したらね。ただし、設備の向上に関しては清涼祭で得た利益でなんとかしな」

本来なら自分たちで変えるのは許されないが取引に応じるなら目を瞑ってくれるわけか。

「そこをなんとかオマケして設備の向上を」

「わかりました。この話、引き受けます」

なおも食い下がる明久を大地は遮る。

「そうかい。それなら交渉成立だね」

「ただし、こちらからも提案がある」

学園長は『計画通り』といった顔でニヤリと笑うが、まだあると言わんばかりに大地は話を続ける。

「なんだい？言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。トーナメント形式で、一回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いています」

「それがどうかしたかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定をゆ…坂本にやらせてやって欲しい」

二人の場合、これぐらいしないと勝てないだろう。ついでに、学園長の反応を試してみた。

「ふむ…。良いだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それぐらいなら協力しようじゃないか」

「ありがとうございます」二人に有利な話だが、通るとは思わなかった。

「さて、そこまで協力するんだ。当然、優勝できるんだろうね？」

「もちろん。こいつらを誰だと思っているんです？」

念を押す学園長に対して大地は不適な笑みを浮かべる。

「絶対に優勝して見せます。そつちこそ、約束を忘れないように！」

その言葉を締め、大地と明久は雄二を連れて学園長室を後にする。これで問題解決の手段がはっきりした。あとはやるべき事をやるだけだ。



## 15話 召喚大会のパートナー

「そう言えば、大地は良かったのか？」

「何が？」

教室に戻る途中、正気に戻った雄二に聞かれた。

「お前も、学園長には用があつたつて言つてたじゃないか」

「ああ、それか。個人的な事だから後回しにした。それだけだよ」

個人的な事、と言われて二人はこれ以上追究して来なかった。

「あ、大地！」

渡り廊下付近の階段から自分達の教室に戻る途中、自分と呼ぶ声が聞こえた。

「あいつ…Cクラス代表の小山か？」

「Bクラス戦と手を組んで、僕らを罠に嵌めたよね」

相手が友香だとわかって、雄二と明久が不機嫌顔になる。

「今は試召戦争の話は関係ないだろ。それに、オレに用があるみないだから先に帰つてて良いぞ」

「ああ、そうさせてもらおう」

「それじゃあね、大地」

雄二と明久が帰るのを見送ってから大地は友香の方を向く。

「で、友香はオレに何用で？」

「相変わらず話が早いのね。まあ、単刀直入に言わせてもらおうけど……」

友香は一呼吸ついて一気に言う。

「私と組んで、召喚大会に出て欲しいの」

「……………え？」

友香の言葉に、大地は啞然とした。

「…もしかして、既に組む相手は決まっていたりした？」

「あ、いや、そうじゃない。友香から頼まれた事に驚いていたんだ」

こっちの反応に不審に思ったのだろう。大地はすぐさま弁解した。

「驚いて…？」

「そりゃ、召喚大会に出るなら友香は根本と出るって考えるだろ。オレだけじゃなく周りの皆もな」

「やっぱり、大地もそう思うわよね…」

「…根本の野郎と、何かあったのか？」

友香の様子を不審に思った大地は、そう尋ねてみた。

「なかった、と言えば嘘になるわね。あえて言うなら…お互いに疑心暗鬼になってるってところ」

「それこそ、何があったって言いたくなるぞ」

「大地は、私がどんな男が好きかは知っていたかしら」

「…頭の良い男、だろ。まさか、Fクラスに負けたから今後付き合い合  
う気が失せたとか言わないだろうな？」

本当にそうだったら、Bクラスを攻めたこつちに非がある事になる。あっても気にはしないが。

「そこまでは言わないわよ。理由の一つではあるけど」

「他にもあるのか」

「もう一つは…あの時、あなたが探していた物かしらね」

「ああ、姫路の手紙か」

「随分あっさり誰の物か言うのね」

「過ぎた事だし、友香が告げ口しなきゃ問題ないさ」

他にも、姫路自身の手で明久に渡しているかも、など考えられる事はあるがそれ以上はプライベートな話だ。

「まあ、言つつもりはないわ。で、その手紙を恭二が持っていたって事は…」

「もちろん、知ってる」

正確には明久から聞いたのだが。気になるのは友香がそれを知っている事だ。姫路の手紙を根本が持つてる事知っていたのは当事者の2人、大地、明久ぐらいだ。雄二あたりは気づくだろうが…まあ良いだろう。

「まさかとは思うが、それが2つ目の理由だと言わないよな？」

「残念ながら2つ目の理由よ。…恭二が女の子の手紙を持っていただけなら気にしなかったけど、それを脅迫材料にしていたみたいだからね」

「…それが許せないとでも？」

「女の子にとって、好きな人に宛てた手紙は大事な物よ」

男の大地でも、その考えは理解できる。理解出来たからこそ、根本に制裁した。

「なるほど、友香の根本に対する不審はわかった。で、その逆は？」

「…大地の事よ」

「オレ…？」

何故、根本の友香に対する不審の原因が自分なのか…

「まさか、あの時の交渉か？」

「そう。恭二は逢い引きしてたって言っていたけれど」

Bクラス戦の際に手を組んでいたB、Cクラスを引き離す交渉の為に友香個人を連れ出したのだが今はそれが裏目に出たみたいだ。

それにしても、しょうもない事を気にするなあ、あの屑野郎

「で、それらが重なって一緒にはいつらい状況になった訳」

「それで召喚大会にどう繋がるんだ？」

「…恭二を試すのよ」

「召喚大会で何を試すのやら」

「それは」

「友香！」

突如、第三者の声が2人の会話を遮る。

声の方を向くと、そこにいたのは

「恭二…何しにここに…？」

「召喚大会…の事…だ。…どうしても組んで…くれないのか？せめ



て理由を」

「とりあえず息を整えるボケ」

「い、十六夜…？」

根本は友香を探して走り回っていたのか息をきらせている。大地の存在に気付くと、一瞬脅える様子を見せた。

「ねえ、恭二。私が何故あなたと組んで召喚大会に出ないか知りた  
いでしょ？」

「あ、当たり前だ！」

「私はね、この召喚大会であなたの本気と、誠意を試そうと思っ  
ているのよ」

さっき言いかけたのはそう言う事か。

「俺の…誠意、だって？」

「そう。お互い、別々のパートナーを見つけて大会に出場するの。  
大会では正々堂々とやってもらおうわ。恭二は優勝、もしくは私より  
好成绩で終われば問題ないわ」

「もし、友香より先に終わったら…」

「…その時は、私達の関係も終わり」

友香は大層な事を言ったものだ。つまりは、別れると言っているわ  
けだから。

「終わりって…たかが召喚大会で今後を決める必要は」

「…根本。たかが召喚大会と言うが、Fクラス如きに負けたお前に  
とって、これはチャンスだぞ」

「十六夜、今お前は関係ない。これは俺と友香の問題だ」

「生憎、オレは友香のパートナーに選ばれた身でね。あながち無関

係とは言えないんだよ。ちなみに、今友香が言った事は全てオレが考えたことだ」

もちろん、嘘だ。

「…本当なのか、友香」

「ええ…既に参加申請もしてあるわ」

「…わかった」

納得したのか、根本はその場を立ち去った。

「…今の言葉、私と組んでくれると考えても？」

「オレは、断るとは一言も言っていないぜ？」

そう言っただけで大地は小さく笑みを浮かべる。どうせ組むなら親しい相手を、と思っていたところだ。

「そう。大地らしい答えね。でも…ありがとう」

「…礼を言うの、早いだろ」

ありがとうと言った友香の表情が、とても可愛く見えて大地は一瞬ドキッとした。

大地は再び生徒会室に足を運んだ。召喚大会の参加申請の為だ。時間は既に17時を回っている。

「あれ、まだいるのか」

生徒会室の扉が開いたことに首を傾げながら入る。

「あら、弟君。まだ残っていたの？」

「それはこっちのセリフですよ亜季先輩。…あと、優子もな」

「ついでみたいな言い方しないでくれる？」

生徒会室にいたのは亜季と優子だけだった。天音と義高は既に帰ったようだ。

「別についてで言ったつもりはない。あ、亜季先輩。召喚大会の参加枠はまだ残ってますよね？」

「大分少ないけど、残ってるわよ」

そう言っただけで亜季は参加用紙を渡してくれた。

召喚大会の参加受付は生徒会の仕事だ。科目の指定や対戦表を決めるのは当然教師の役目だが、清涼祭の準備もあるため手が足りない。それを生徒会が担っているのだ。

「弟君も、召喚大会に出るんだ」

「も、って…亜季先輩も出るんです？」

「私じゃなくて、優子がね」

「マジでか」

よく見ると、優子の手元にも同じ用紙があった。

「何？文句ある？」

「ないない。優子は誰と出るんだ？」

「代表とよ」

雄二、ドンマイ

大地は心からそう言いたかった。

「翔子が出るって事は…お前はパートナーを頼まれたってところか」「そうよ。でも、賞品にあまり興味ないからね。優勝したら、代表に譲るつもり。そう言う大地は愛子と出るの?」

「いや、愛子が出たがるとは思えないから誘ってない」

いきなり愛子の名前が出て戸惑った。賞品からして、愛子が興味あるとは考えがたいし、その話すらしていない。

「じゃあ誰と出るのよ」

「…Cクラスの代表」

友香、と言いかけたが二人が知り合いとは思えず、遠まわしに言った。

「Cクラスの代表って…」

「…ああ、友香ね。小山友香」

「え、亜季先輩、友香と知り合いなんですか?」

いきなり亜季が納得したのもだが、別の事に驚いてしまった。

「バレーボール部の先輩後輩よ。それにしても…弟君、友香と仲良いのね?」

「そりゃ、一年の時同じクラスだったんで」

「それだけ?」

「だけです。それに、友香には彼氏いるのは知ってるでしょ」

今は、その事で問題になっているが…言わずにいよう。

「知ってはいたけど、弟君かな〜思っていたわよ？私」

「…オレに彼女はいませんよ。いたら姉ちゃんの様子が変わります  
って」

「そ、そうね。確かにそのとおりだわ」

「ごめん、大地。アタシもあっさり納得しちゃった」

申し訳なさそうにする二人に大地はショックを受けかけた。

「はあ…。はい、書き終わりっ」と

「こっちも終わりました」

「ん、確かに受け取ったわ。組む相手は違うけど、頑張っつてね二人  
共」

大地も優子も別々にはいえ、頼まれて出る訳だからそこまでモチ  
ベーションは高くない。

それでも、亜季からの激励の言葉は素直に受け取った。

「あ、おかえりー大地」

「……………」

家に帰宅後、部屋に入ると愛子がいた。大地のベッドに座って。

「どうしたの？いきなり無表情になって」

「すまん、家を間違えたようだ。じゃ」

バタン ガチャ ガシッ

「間違つてない間違つてない」

現実逃避しようとしたからか。すぐに手首を掴まれた。

「…で、何をしてるんだ。お前は」

「ボクは用もないのに大地の部屋には入らないよ？」

「用がなくても入っているだろうが」

少なくとも、2日に1回は。

「本当に大事な用だつて。用と言うより話だけど」

「…召喚大会の事だろ？その事だが…」

優子から聞いていたからすぐに話の内容を把握できた。

大地は愛子に事情を簡単に説明した。

「そっか…頼まれて組むならそれを邪魔はできないね」

「悪いな。愛子が出ようと考えてるのを知っていれば真っ先に誘っていた」

「気にしなくても良いよ。言わなかったボクもいけなかったし」

そう言われると、可能性が低いと考えたのが申し訳なくなるのだが。

「それで、大地はその小山さんと出て優勝を狙うの？」

「多分、狙わないと思う」

友香はあくまで根本を試すために出るのだから根本の結果次第だろう。

「…そつか。なら、時間がある時にで良いからさ、Aクラスに遊びに来てよ」

「Aクラスは何をやるんだ？」

「メイド喫茶だよ」

「…かなり人気があるだろうな」

Aクラスは女子の方が多し、メイド喫茶なら売上も相当なものだろう。

決して、愛子を始めとするAクラスの女子の殆どが可愛いからとか考えた訳ではない。

「あれ、急に顔を赤くしてどうしたのかな、大地？」

「い、いや、何でもない…」

とはいえ、考えていたのがバレたのか、愛子が顔を近づけてくる。

愛子のメイド服を着た姿をイメージしてた、なんて言えるか！

「ははあ…さては」

「な、なんだ」

「ボクや優子、代表のメイド服姿を考えていたでしょ？」

普通にバレていた。

「…そんな訳ないだろ。さっさと自分の部屋に戻れ、閉め出すぞ」

そう言って大地は愛子を肩を掴み、外に追いやろうとする。

「あははっ、大地の照れた顔中々見れないね」

「さっさと帰れ！」

「はいはい。そうしますよ」

口ではそう言っても、顔はまだニヤケている愛子。入って来れないように窓を閉めるために大地は窓に手をかけた。

「愛子」

「何？」

「…とりあえず、色々楽しみにしておくよ」

「え…」

愛子を呼び止めて、大地は素直に思っていた事を伝えた。通じたかわからないが、愛子は目を見開いていた。

「何でもない。さっさと部屋に戻ってる」

「う、うん、わかった…」

戸惑いながらも、愛子は自分の部屋に戻って行った。それを確認してから、窓を閉める。鍵はかけたフリをした。

「やれやれ、考えていたのがあっさりバレたから焦ったぜ…」

ベッドに座りながら呟き、ため息をついた。

「…清涼祭、忙しくなりそうだな」



## 15話 召喚大会のパートナー（後書き）

大分グダグダな感じになったけど、その辺は気にしない方向？  
にしても、友香と根本の関係をここまでカオスにしたのは中々無い  
気がします。

さて、いよいよ清涼祭が始まりますが、それに向けて新キャラを出  
す予定です。

名前が決まらないのが気がかりですが（笑）

16話 蘇ったりふりかかったり（前書き）

今回はサブタイトルにかなりの意味を含めています。

読みながら考えてみてください。

## 16話 蘇ったりふりかかったり

「大地ー朝だぞー」

「うん…？」

清涼祭初日、大地は天音の声で起きた。

「今、何時…ってまだ早いじゃねえか…」

時計を見ると、6時30分だった。いつもより1時間早い。

「生徒会の朝は忙しいものだよ、副会長」

「オレは生徒会以外で忙しくなるって…」

身支度と朝食を済ませ、登校中。大地はダメもとで尋ねてみる事にした。

「なあ、姉ちゃん。清涼祭の最中の事なんだけど…」

「何？」

「オレだけでなく優子もなんだが召喚大会に出る事になったんだ。だから、その間は…」

「ああ、その事なら大丈夫だよ。当日の生徒会の仕事は校門で受付作業するだけだから」

「そんだけ？」

「うん、そんだけ」

断られると思っていただけにあっさり解決したから拍子抜けだ。

「ま、それなら心置きなく召喚大会とクラスの方を優先させてもらうか」

「こっちが休憩したくなったら強制的に交代ね」

「わかってるよ…」

とにかくこれで清涼祭の間、愛子という時間は作れたわけだ。

学校に着くと、まだ7時過ぎだと言つのに生徒がちらほらというの  
がわかった。

「張り切ってるのが結構いるな」

「大地も張り切ってるじゃない」

「いや、姉ちゃんに起こされなかつたらギリギリまで寝る気でいた  
から」

おかげで先ほどから欠伸を何度もしているのだ。この状態で本当に  
大丈夫かと我が身を案じたくなった。

あれから軽く準備だけした後、大地はFクラスの教室に向かった。  
そこで目にしたのはいつもの小汚さから一転、中華風の喫茶店に変  
わっていた教室だ。

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

入り口で雄二の事を賞賛する島田と明久。

「人のことをバカって言えるのか？お前は」

「あ、大地」

「おはよう、十六夜」

「ああ、おはようさん。それにしても立派なテーブルだな」

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なク  
ロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

奥からやって来た姫路が尊敬の目で秀吉を見る。つまりこのクロスは演劇部で使ってる小道具だ。もっとも、それは大地が許可を出したから使えるのだが。

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲ると、その下には見慣れたみかん箱が見える。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

島田が明久の隣から覗き込んでいる。島田の言う通り、これを見られたら、イメージダウンは免れない。

「きつと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にはしまっておいてもらえるさ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよ、きつと」

「だといいけどな、もし、そんなことする奴がいたら嫌がらせか営業妨害だろ」

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

学園祭のレベルにしては充分なぐらいの完成度だろう。

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

いきなり後ろから聞こえる康太の声。相変わらず気配を消すのが巧い。

「ムツツリーニ、厨房の方もオーケー？」  
「……………味見用」

そう言つて康太が差し出してきたのは、木のお盆。上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

「わぁ……………美味しそう……………」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路、島田、秀吉が手を伸ばし、作りたての胡麻団子を頼張る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

三人とも大絶賛。これは売上も期待出来るか…。

「お茶も美味しいです。幸せ……………」

「本当ね……………」

姫路と島田の目がトロンと垂れる。そこまで美味しいのか。大地としても興味が湧いてきた。

「それじゃ、僕も頂こうかな」

「ああ、オレも貰うわ」

「……………（コクコク）」

大地と明久は残った二つに手を伸ばす。

「あつ！待つのじゃ二人共！それは…」

秀吉が何故か制してきた。三人が絶賛していたのだから残っている胡麻団子も美味いに決まっているだろうに。明久は一口かじるだけだったが大地は丸々頬張った。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ」

「甘すぎず、辛すぎない味わいがとても…」

「「んごばっ！」」

口からありえない音が2つ出た。大地の目にはこれまでの人生の軌跡が映った。

あー…あの頃が懐かしい…

「って、アブねー！立ったまま寝るところだった！（永久に）」

「…それはさつき姫路が作ったものじゃ」

「早く言ってくれよ…」

おかげで17年の人生に終止符をうつところだった。

「……………！！（ゲイグイ！）」

「む、ムツツリーニ！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口の中に押し込もうとするの！？無理だよ！食べられないよ！」

康太が団子の残り半分を明久の口の中に押し付けている。大地は丸々頬張ったから何とか回避できていた。

「うーっす。戻ってきたぞ」

するとそこに雄二が戻ってきた。

「よう、雄二。胡麻団子食うか？美味いぞ」

「お。美味そうだな。どれどれ？」

大地は雄二にさっきの胡麻団子（明久の食べかけ）を勧めた。雄二はなんの躊躇いもなくバイオ兵器を口に運ぶ。

「…たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」

「良い夢見てこいよ」

「？お前らが何を言ってるのかわからんが…。ふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛すぎない味わいがとても…んごばっ！」

大地と明久と同じ反応だった。

「…さて、そろそろ時間だし行ってくるか」

「どこに行くのじゃ？」

「召喚大会。出ることにしたからな」

「え…大地、本当に天音さんとお出ることにしたの？」

秀吉に召喚大会に出ることを伝えようとしたら明久が介入してきた。妙なセリフと共に。

「こないだのオレと雄二のやり取りを覚えてたのか…」

「いや、オレと一緒に出るのは…大地よ、色々と事情を説明をしてくれるかの？」…アホ久、雄二の蘇生をしる。姫路と島田に気付



かれたら厄介だ」

「あ、そうだね。おい、雄二ー起きろー」

秀吉の雰囲気が変わったのを察した大地は明久を遠ざけた。言ったことに嘘はないし、何より面倒を避けたかったからだ。

「…それで、じゃ。大地。天音さんと出ると言うのは…」

「アホ久のアホな発言だ。姉ちゃんとは出ない」

「なら、良いのじゃ」

良いのかよ

「ああ、それとだ」

秀吉の肩に手を置いて、小声で囁く。

「生徒会室か校門に行けば、姉ちゃんと会えると思うから」

「い、いきなり何じゃ…!？」

顔を真っ赤にしていたら、秀吉が天音に会いたがってるのがバレバシだ。大地はこれでも気を遣ったつもりでいる。

「ま、時間が空いた時にでも行つてこい」

そう言つて、大地は教室を後にした。

「それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

「三回戦までは一般公開ありませんので、リラックスしてやってください」

一回戦は数学勝負なので当然、立会人は数学の長谷川教諭だ。

「ところで友香」

「何？」

「お前、この大会で優勝する気にいるのか？」

大地は気にしていた事を聞いた。別に今でなくても良かったが、聞いておけば今後の行動を決められる。

「…あまり狙ってないわね。恭二が好成績で終われば良いって思っていたから」

「つまり、場合によっては途中棄権もあり得ると？」

実に他人任せな事だ。こんな事なら出なくても…

「…オレらが出る必要、なかったんじゃないか？」

「恭二を参加させる為よ。それにあなたと組んだから優勝は狙えない訳じゃないけれど、ね」

「いくらオレでも勝てない相手はいるけどな」

特に翔子と姫路には勝ちようがない。

「まあ、私達はある程度まで勝ち進みましょう。相手も来た…ようだし…」

ある程度はどのぐらいだ、と言いたかったが友香の様子が変わったのが気がかりだ。

「どうしたんだ？まさか、根本がいきなり相手なんてオチじゃ…」

ある意味、根本が相手の方が気楽だったかもしれない。だが、一回戦の相手は…

「やつほー、十六夜君。ここで君と戦えるなんて思ってたわ」

「お前Bクラスの…誰だっけ」

「夏川よ！夏川千早！」

夏川…夏川…。大地は頭の中で夏川千早という女子生徒を全力で検索した。

結果、わかったのは

「ああ、試召戦争の時にオレをFクラス思わなかった拳げ句、あっさり瞬殺された…」

「変なところで覚えないでよ！」

「いや、あれ以外顔を合わせたの一回しかないし」

しかも、試召戦争中でほんの一瞬だけ。

「で、友香はあいつが出て驚いたと」

「…違うわ。もう一人の方…」

「もう一人…？」

確かに、夏川の後ろにもう一人、男子生徒がいた。あっちに驚いていたのか。



「…おい」

「…何かしら」

「なんでお前が一番点数が低いんだ」

夏川にはともかくCクラス代表が同じクラスの河薙より下と言う事実に大地は文句を言いたくなっていた。

「し、仕方ないでしょ！私は文系の科目が得意なんだから！」

遠まわしに、自分は理系は得意じゃないと言っているようなものだ。

「…河薙君の言ったとおりね」

「うん、僕と友香は得意科目が見事に被ってない。だから、互いに得意科目を教えあってたんだ」

「頼んでもいない説明どーも」

夏川と河薙のやり取りに適当に礼を言っておく。すると河薙はまたこちらを睨んできた。

「やれやれ、仕方ないな。友香、あまり前に出るなよ。その点差だと最悪一撃でやられるぞ」

「情けないけど、そうみたいね…」

足手まといになっていると思ったのか唇をかみしめている。それぞれ召喚獣を動かし大地が前、友香がその後ろに位置した。

「ふふ、そうしていると十六夜君はナイトみたいで少し羨ましく思えるわね」

「今回は本当にそうなりそうだけだな」

「けど、そう言う時って何故か攻撃したくなるのよね」

一体何にだ。だが、それよりも夏川の表情が恍惚としているのが気になる。本当に羨ましがっているのなら良いが寒気を感じているからよくわからない。

「河薙君。作戦はわかってるよね？」

「わかってるよ」

それを聞いて夏川は動いた。それに続いて河薙も動く。この点差からすぐに勝負を決めようと召喚獣の持つ方天戟を構え前進する。狙いは無論、位置が近い夏川からだ。

「十六夜君なら、そう動くよね」

「...?」

不意に聞こえたセリフに大地は首を傾げる。しかし、大地の召喚獣は夏川の召喚獣を狙い方天戟を振り下ろす。だが、それは避けられた。

「一度試召戦争やってるし、ある程度は操作になれてるってわけか」  
「それもあるね。でも、私達はあなたに攻撃はしないの。今は、ね」

その言葉と同時に夏川、更には河薙も大地の横を通り過ぎた。今は大地を攻撃しない。なら、誰を攻撃する？そんなの決まっている。

「友香！ひとまず防御しろ！」

「簡単に言うけど、こっちは慣れてないのよ!？」

「下手に避けるよりはマシだ！」

そういう言っているうちに夏川が友香に対して武器を振り下ろす。友香も防御しようとしたが間に合わず攻撃を食らってしまった。

Cクラス 小山友香 数学 117点

やはり点数が減ったが戦死には居たっていなかった。だが、夏川に続くように河籬も攻撃を仕掛けた。奴の点数はBクラスの代表……いや、Aクラス並はある。今あれの攻撃を食らえば確実に戦死だ。

「……っ」

だが、攻撃を仕掛けた河籬の召喚獣は一瞬だけ動きを止めた。そのおかげで友香は召喚獣を遠ざける事が出来た。

「河籬君！今チャンスだったでしょ！」

「おっと、オレを相手にして隙を作るとは大したものだ」

夏川が河籬に怒鳴っていたから召喚獣は無防備だった。大地はそれを見逃さず、一気に攻撃した。

「しまっ……」

Bクラス 夏川千早 数学 0点

時すでに遅し。夏川が気付いた時には大地の召喚獣が両断していた。

「大方、点数の低い友香を先に倒してオレ一人対お前ら二人の状況にしたかったんだろうが、残念だったな」

「くっ…！」

逆にこちらが二対一の状況になった。所謂形勢逆転だ。大地は即座に河薙の方へ召喚獣を向かわせる。

「ストップだよ」

「!？」

だが、河薙の一言で動きを止めた。

「僕は棄権するよ。勝ち目が無いからね」

「なんだと…？」

「翼…？」

河薙の言葉に大地と友香は言葉を失った。先ほどまでは、勝ち気でいたはずなのにいきなりの棄権。困惑しない筈がない。

「とにかく、僕は棄権する。良いですよね、先生」

「あ、はい。勝者、十六夜君・小山さんペア」

困惑しながらも長谷川教諭が勝者の名を告げる。とりあえず一回戦は突破だ。

「河薙君！あなたの点数ならまだ勝ち目があった筈よ！？それなのに何で棄権を…」

「それはあくまで僕らが有利になればの話だよ、夏川さん。十六夜の点数が僕らの予想より上だったし君も負けた。勝ち目があるとは思えないよ」

「……………」

「それにね、作戦の為とはいえ、友香を攻撃する、なんて僕にはで



きないよ」

「翼……」

「……じゃあね」

納得のいかない夏川が文句を言うのが河籬の言葉に反論出来ず、その場から立ち去って行った。

「……友香。教えて欲しいんだ。根本とは今後どうするつもりなの？」

「……今はわからない、としか言えないわ」

「今は？じゃあ、いつになったら」

「召喚大会での、恭二の頑張り次第よ」

「そんな事で友香の今後を決めるなんて……」

「……もう良いだろ」

大地は今まで黙っていたが、河籬の往生際の悪さに流石に苛立って来て口を挟んだ。

232

「それは恋人同士の二人の問題なんだ。お前が間に入って解決する話じゃない」

「……お前は黙っているよ」

いきなり河籬の態度が変わった。こいつは女尊男卑か、単純に友香に対して思い入れがあるのだろうか。

「生憎、オレは友香に頼まれてこの召喚大会に出てんだ。成り行きぐらい見守らせてもらうつもりだ。お前に文句を言われたくはないな」

「……くっ……」

大地は河籬の態度に動じず、正論を言い放つ。河籬は大地を睨みな

がらその場から立ち去って行った。

「大地……」

「……お前は今後、根本とどうするかだけを考える。オレはそれに対して文句は言わないし、手伝える事があるなら喜んでそうする」

「ええ……ありがとう。それとごめんなさい」

「謝る必要はないだろ」

礼を言われるのはともかく、いきなり謝られた事に大地は、表情に出さずとも、戸惑っていた。

「そうじゃなくて翼の事。彼、普段は大人しくて、優しい人なのよ。それだけはわかっておいて」

「……ああ、わかったよ」

友香も、河薙に対して思うところがあるのだろう。友香には悪いが、河薙の自分に対する明らかな敵意、それがなくならない限り大地は河薙の相手をしたいたとは微塵も思わない。

## 16話 蘇ったりふりかかったり（後書き）

召喚獣バトルを長くやるのは何気に初だったので時間かかりました

天音「お疲れ様」

おや、天音ちゃん。どうしたんだい

天音「大地から、作者さんを労って来いって」

自分で来りゃ良いのに…

天音「まあ、私も会ってみたかったから引き受けたんだけどね」

それは光栄です。では、せっかく来たので今回の話の解説でもどうですか？

天音「うん、いいよ」

まず、今回の話で目を引くのは…

天音「新しいキャラクターが登場してることかな？」

はい、河雑翼君です。そして久々の登場の夏川千早ちゃんです。

天音「その二人のプロフィール的な物はないの？」

天音さんの設定すらまとまっていないのにあるわけがありません。と言つか、あなた生徒会長でしょ

天音「今はただのお客様です。それより気になるのがね…」

何？

天音「久々に登場した…夏川千早さんだっけ。彼女の名字に聞き覚えが」

大地「さっさと帰るぞ、姉ちゃん」

天音「あ、大地。ちょ、首掴んで歩かないでよ〜！」

………

大地、色々な意味でありがとう

それと、結局来てんじゃん（呆）

17話 Brothers & Sisters (前書き)

サブタイトルに特に意味はありません

17話 Brothers & Sisters

友香と二回戦の待ち合わせ場所を話合った後。

大地は校門の清涼祭の受付に向かった。  
生徒会メンバーとの交代の為だ

「あ、大地だ」

「遅いわよ」

「お互い召喚大会に出たんだから多少の遅れは大目に見る優子」

受付には天音と優子の姿があった。

今回の生徒会の仕事は清涼祭の受付だ。自分と優子は召喚大会に出ているため最初の一回だけは予定通りの順番（亜季先輩、天音、優子、大地、義高の順）でこなすが、以降は随時連絡を取り合って交代する事になった。既に亜季先輩は優子と交代しているため、大地は天音と交代する形になるわけだ。

「まあまあ、それよりも大地。大会はどうだった？」

「一応勝ってきた」

「流石に一回戦で負ける、なんて事はないとは思っていたけどね」

「そう言う優子は一回戦は終わったのか？」

「当然でしょ。アンタより先に試合をしていたんだから」

対戦表を見てないのだから、そんな事を知っている訳がない。

「あっそ。それより姉ちゃん、交代だよ」

「そうだね。それじゃ大地。手」

そう言いながら天音は手を掲げる。それを見て大地は察した。

「はいはい…（スッ）」

パシン

ようは、ハイタッチだ。それで喜んでいるあたりが我が姉の子供っぽい所だ。

「仕事、ちゃんとやってよ。間違っても優子ちゃんとイチャつくのは無しね」

「しないから」

大地は呆れながら断言する。一方、優子は顔を真っ赤にしていた。

「冗談だよ、冗談 それじゃあ、あとヨロシクね」

そう言つて天音は走っていった。いつもと様子が変わらない事からあの事がわかった。

「やれやれ、あの様子だと秀吉は来てないみたいだな」

「秀吉がどうかしたの？」

「いや、あいつにすくすくしばかり助言をな」

「…あんた、何をしたのよ。にやけた顔して」

顔に出ていたのか。比較的ポーカーフェイスをしていると思っただけに少しショックだ。

「ま、まあとにかくだ。姉ちゃんの様子を確認したうえで秀吉の名

前を出したんだ。少しは察しろ」

「…ああ…そう言うこと」

すぐにわかったのか、優子は苦笑した。

「そう言うこと。でもまあ、あの二人はまだ知り合って間もないから焦って行動する必要もないのかも…」

「あのさ、大地」

「なんだ」

「あんたが秀吉に助言したって言うけどさ。この場合…余計なお世話なんじゃない？」

「……………」

自分でもわかっていただけにショックが倍増だった。

「こちらが当校の見取り図となります。どうぞ楽しんでいって下さい」

大地は清涼祭にきた人に手渡す。先程からこれを何十回やった事か。

「にしてもすごい人だな…」

「色々な意味で有名なものね、文月学園は」

「その文月学園の学祭ならこれだけ来るのも当然か…」

一時的に間が開いたのでこうして優子と会話する余裕もあるわけだ。

「それよりも大地、アンタあんな喋り方出来るのね。まるで別人じゃない」



「そりゃこっちのセリフだ。お前、本当は優子の格好をした秀吉だろ」

もしくは猫を被っているか。こっちの方があり得そうで怖い。

「そ、そんな訳ないでしょ！馬鹿なことを言わないでくれる!？」

流石に秀吉と入れ替わってると言うのはマズかったか。大地はひとまず取り繕う事にした。

「冗談に決まってるんだろ。仮にやっけてもすぐに気付く」

多分、だけどな

「絶対にしないしさせないわよ…!」

「妙に怖いぞ…」

「あの、すみませんです」

「「ん?」「」

突如、女の子の声が聞こえてきて大地と優子はその方向を向いた。とは言っても視線の先には誰もいなかった。

「気のせい…だよな?」

「気のせいじゃないです、こっちです」

「ああ、ゴメンね。こいつ少しアレだから」

何もなかったと思っていたが相手は小柄だったみたいで、気づいてくれなかった事に女の子は頬を膨らませていた。

「…それで、要件は何かな?ついでに名前を言ってくれと助かる」

優子のなっていないフォローはスルーして、要件を聞く事にした。

「えっと、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

「お兄ちゃん、か。そいつの名前は？」

「あう……。わからないです……」

「わからない？家族じゃないのかな……それなら特徴はわかる？」

葉月と名乗った女の子とのやり取りに優子が入ってきた。こっちは良いからちゃんと仕事をこなせ、と言いたかったが他に客が来てない以上言えなかった。

「えっと……バカなお兄ちゃんでした！」

「大地、出番よ」

「その言い方は地味に傷つくんだが」

「バカなお兄さんがいそうなクラスはあそこしかないでしょ？」

確かに、子供にバカが特徴と言われたらどこを探せば良いかは大体わかる。

「優子が行ってくれば良いだろ。オレが行ったら誤解が生まれる」

「Fクラスの人かもしれないんだから大地が行くのが適任でしょ」

いなかったら誤解が生まれるのは確定だろ

「……仕方ないな……」

ため息を吐きながら大地は立った。

「結局行くのね……」

「少なくとも、優子がうちのクラスに行くよりは良いだろ。それじゃ行こうか、葉月ちゃん」

「ふえ、どこにです?」

「バカなお兄ちゃんを探しに、さ。心当たりがあるからそこに一緒に行こう」

「本当ですか?ありがとうございます、綺麗なお兄さん!」

「あ、ああ…」

『綺麗なお兄さん』…。お兄さんだから十中八九、大地の事だろう。だが、それにしても斬新な呼び方だ。それを聞いて優子は腹を抱えながらも笑いを堪えている。

そんなにツボにはまったか

葉月を連れて教室に戻った大地だが教室がざわついているのに気付いて足を止めた。

まさか、クロスの中を見られた訳じゃないよな…?

「どうしたんですか?綺麗なお兄さん」

「ん?ああ、何でもないよ」

不安がらせないように言った後、大地は教室の方を覗いた。

『ま、待て!こっちからは夏川を交渉に出そう!俺は何もしないから交渉は必要じゃない!』

ソフトモヒカンの男が弁明らしき事をしていた。雰囲気から三年だ

ろう。それよりも気になるのは、今ソフトモヒカンの男が言った夏川の名だが、まさか彼女が腹いせに店の妨害をしに来たのか。

『ちよつと待てや常村！お前、俺を売る気か！？』

坊主の男だったから違った。夏川と呼ばれた男も三年だ。だが、大地の知っている『夏川』千早と同じ名字なのは偶然だろうか。

『それで、常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？』

尻餅を着いてる常村と夏川（坊主）の前に立っている雄二が話しかけている。察するに、営業妨害をしている二人を雄二が止めていると言ったところか。

交渉なら何で常夏コンビの顔に殴られた跡があるんだよ

あれでは交渉と言う名の制裁としか言えない。

『い、いや、もう充分だ。退散させてもらっ』

常村が雄二の雰囲気には圧されて、退散しようとする。夏川（坊主）も続いたが…

『そうか。それなら…』

雄二は腰を抱え込み、そして

『おい！俺はもう何もしてないよな！？どうしてそんな大技をげぶるあつ！』

『これにて交渉は終了だ』

バックドロップを決めて雄二は平然と立ち上がった。  
常村は夏川を引きずって教室を立ち去って行って、これで解決はしない。

「何かあつたんですか？」

「特にないよ。ただ、ちょっとだけ他の場所を回ることによろうか」

そう言って葉月の手を取り、教室から離れると同時に教室内がざわついていった。

これでは、葉月の探しているバカなお兄ちゃんを確認し辛い。

「さて、どこを探したのか…」

「あれ、大地。受付にいたんじゃないの？」

「姉ちゃん」

思案していた所に天音が声をかけてきた。

「言つとくが、サボリじゃないからな」

「小さい女の子をナンパしていて良く言えるね」

「いや、この子は人を探していてオレはその協力をしてるだけ」

更に、手を繋いでいるのははぐれないようにするため…と言おうとしたが、ある違和感を感じた。

「……………」

「？綺麗なお兄さん。葉月の顔に何かついてるんですか？」

葉月は小学生にしてはかなり可愛いだろう。その葉月を目にして、可愛いモノ好きの天音が何も反応してないのだ。違和感の正体はこ

れだ。

「姉ちゃん、頭でも」

「ねえ葉月ちゃん。綺麗なお兄さんってこの人の事だよね？」

打ったのか、と言おうとしたが遮られた。それどころか指をさされた。

今までのやり取りを少しでも見たならわかるだろ

呆れていると、携帯が鳴っている事に気が付いた。確認してみると、友香からのメールだった。

【From：友香】

そろそろ召喚大会の二回戦の時間よ。生徒会の方とかで忙しいだろうから、メールで知らせておくわ】

確かに、時間的に向かった方が良い頃合いだ。ただ、今は葉月を放置していいわけがない。

【メールありがとだな。生徒会の方は区切りの良いところで他の役員に任せて集合場所に向かう】

「送信…っ」と

忙しいとはいえ、友香の方を蔑ろには出来ない。葉月は優子あたりに預けて…いや、彼女も既に召喚大会に行ってるはずだから無理だ。となると後は…

「…それじゃあ可愛いお姉ちゃんが良いですか？」  
「良いよ、それなら大歓迎」

いつの間にか打ち解けてる…

少々危険だが天音に預けようと考えていたが、今の様子なら問題なさそうだ。

「姉ちゃん。オレ、そろそろ召喚大会に行かなきゃならないんだ。だから…」

「葉月ちゃんといってくれ、でしょ？それなら任せておいて」

天音はそう言ってウインクした。こういう時、頼もしく見えてしまうものだ。

「綺麗なお兄さん、どこか行くんです？」

「ちょっと用事があるてね。行かないといけないんだ」

「そうですか…葉月、寂しいです」

「まあ、少しの間可愛いお姉ちゃんと一緒にいれば良い。見たところ、仲良くなつたみたいだしな」

「はいですっ」

姉ちゃん、マネのつもりか？

「それと、今はあのお店は忙しそうだからまた後で行った方が良いでしょう。じゃあオレは行くわ」

そう言って大地は走り出した。

## 18話 外道の末路（前書き）

大地以外のキャラクターの視点は原作仕様でやります

そうしないと、愛子とか書いてるときに痛烈な違和感を感じるんで。



## 18話 外道の末路

「早かったわね」

「少しの間だけ仕事を任せて来たからな」

試合会場。大地は友香と合流し、召喚大会二回戦を迎える。  
…はずだった。

「…来ないわね」

「来ないな…」

既に試合開始時刻を過ぎているのに対戦相手が未だに現れない。

「大地、ルール上はこの場合、どうなるの？」

「棄権と見なされオレらの不戦勝…だな」

念の為、立会人である英語の教諭に確認したら、大地の言った通りだった。

「来ないなら何で召喚大会に出たんだろうな」

「最初はやる気があっても、二回戦の相手にあなたがいたからじゃない？」

「Dクラスから下ならあり得ない話じゃないから不思議…ん？」  
対戦相手の実力を図っていると、前方から男子生徒が歩いてきた。

「ようやくきましたか。パートナーはどうしまし…」

英語の教諭が伺うのもわかる。何故なら、その男子生徒は一人の上、フラついていたのだ。

「……………（フラ）」

ドサッ…

突如、フラついていた男子生徒が倒れた。

「き、君！大丈夫か！？」

慌てて教諭が駆け寄り、抱え起こす。大地と友香もそばに寄った。外傷はないみたいだが、何故いきなり倒れたのか。大地はそこが気になって仕方なかった。

「……………」

ふと、男子生徒の口がかすかに動いたので、大地は耳を寄せて聞いてみた。

「ご……………だ…ん……………」

カクン

「とりあえず、保健室…いや、救急車を呼んでください！」

わずかな今年だけ言って気絶した。教諭も友香も動揺していたが、不思議と大地は気楽にいられた。

「オレが保健室に運びますよ。救急車を呼ぶ必要はないです」

「大地？」

「それと、この様子だとこいつも、こいつのパートナーも二回戦は無理そうだからオレらの不戦勝で良いですね？」

「それは構わないから、早く連れて行きなさい！」

「どうも。じゃ、行くぞ友香」

「え、ええ……」

大地は男子生徒を肩に担ぎ、歩き出す。こいつが倒れた原因、それは大地も味わったあの胡麻団子しかありえなかった。

よく姫路の作った物を出せたな、うちのクラス

大地は男子生徒を保健室に運び、ベッドに寝かせて養護の先生に事情を話した。

「学園の行事だから怪我人は出ることはあっても、まさか病人が運ばれるとは思ってなかったわ」

「食中りでも起こしていたんでしょね。それじゃあ、後は任せます」

そう言って保健室を後にした。廊下は清涼祭に来ている人で賑わっている。それに巻き込まれないように壁に寄りかかっている友香の下に大地は近づく。

「どうだった？」

「安静にして寝てるよ。単なる食中りだからな」

姫路の作った物だからしばらく起きないだろう。

「そう、なら良かったわ」

「…さて、二回戦は不戦勝で終わったし、時間が空いたな。友香は

「どうする？」

「私は…少ししてから恭二の様子を見てくるわ」

友香は少し考えてから今後の予定を言う。パートナーはわからないが、根本はCブロックで、Bブロックの大地達とは順調に勝ち進めば準決勝で当たる事になる。

「奴の二回戦以降は見てくるのか」

「ええ、約束を果たせているかちゃんと見ておきたいの」

優勝よりも根本の結果を優先している友香からしたら当然の考えか。だがやはり気になる事がある。

「…お前、あいつの事をどう考えているんだ？」

「翼と同じ事を聞くのね」

それはそれで屈辱に思えてしまう。

「正直に言うと、好きでいる事に変わりはないわ。私の好みの男は大地も知っているでしょ？」

「頭の良い男、だろ」

その言葉に友香は頷いた。一年の時に教えてもらっていたので大地は知っている。

もっとも、頭が良いってだけならこの学園だけでも根本以上の男はかなりいる。

友香が根本と付き合っているのは…

「正確には頭の回転が良い事ね。恭二はそれに当てはまったのだけ  
ど…」

「うちのクラスとの試召戦争での負け方を知って、幻滅でもしたのか？」

「わからないわ。たぶん、それだけじゃないと思うけど……」

友香は苦笑いを浮かべながら、考えこんでいた。

「他に思い当たる事がありそうだな」

「…さあ、どうかしらね。私はそろそろ行くわ。三回戦の時間に会場だね」

「ん…わかった」

友香は試合会場の方に向かっていった。大地は腑に落ちない気分だが…

まあ、あまり気にしない方が良かった

ひとまず、気にするのは大地の現状だ。二回戦が不戦勝になったから時間に余裕がある。

どこに行くか考えたが、一力所しか思い浮かばなかった。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

メイドのお決まりのセリフを聞き、店に入る。要は、愛子達Aクラス  
のメイド喫茶だ。

ちなみに、今大地を出迎えたのはもちろん愛子だ。

「……………」

「あれ、どうしたの大地？」

想像以上に可愛いな、畜生

素直にそう感じていた。メイド喫茶をやると聞いた時点でも想像していたが、それ以上に魅力的に映った事に良い意味でショックを受けた。

「お前、今はメイドだろ。客に対してそんな言葉遣いで良いのか」  
「照れながら言われても困るかな」

マジでか

平静を装って言ったのだが、また見破られた。ここまで来ると勘ではなく、そう見えているのだろう。

「まあいつか。では、席に案内致しますと」  
「お前、相手がオレだから気い抜いてんだろ」  
「大地が相手だと、つい対等に見ちゃうからね。演技でもやりづらいよ」

それはそれで喜んで良いものだろうか。

「では、メニューをどうぞ」

席に案内された後、メニューが記載されている冊子を手渡される。

「ふむ…時間的に軽く済ませたいからな…ピラフとアイスコーヒを一っずつ」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

愛子は注文を聞いてから、ウインクをして立ち去る。正直、ウイン

クする必要は無い気がする。

優遇されてると言えばされてるのかな

とはいえ、今の様子をFクラスの馬鹿共に見つかったらおそらく制裁されるだろう。

「お待たせしました、アイスコーヒーになります」

「ああ、サンキュー……」

思ったより早く注文したアイスコーヒーが来たことに感心したが、違和感も感じた。

先ほどまで愛子が接客していたのだが、今の声は彼女と違っていたのだ。

「……いつの間に入れ替わった？」

「それ、かなり失礼な言い方と思わないの？」

大地がそう言うのも無理はない。愛子と入れ替わるように来たのは優子だったからだ。

「いや、さっきまで愛子と話していたから持ってくるのも愛子だと思っただけ」

「愛子なら、たった今召喚大会の二回戦に行ったわよ？」

「ふーん、そうか。なら納得……」

ひとまずアイスコーヒーを口にしたのだが優子の一言で停止してしまった。

「ちょっと待て、どういう事だ」

「だから、愛子は召喚大会の二回戦に行ったのよ」

優子は何言っているんだと言う表情をしていたが、大地はそれどころではなかった。

「あいつ…召喚大会には出ないって言ってただろ…それなのに何故…」

「聞いてなかったの？」

「でなきゃこんなに取り乱すか…」

召喚大会には優子か天音に頼んで参加申請をしたのだろう。ただ、問題は誰と出たか、だ。

ガタッ

「悪い、行くところが出来た。注文してたもんはキャンセルだ」

大地は腰を上げてそれだけ言った後、一気に走り出した。

『ちよ、ちよっと大地！せめてアイスコーヒー代は払って行きなさいよー！』

去り際に優子の声が聞こえたが無視して会場に向かった。

愛子 side

せめて、一言言ってくれば良かったかな



会場に向かいながらそう考えていたけど、すぐにやめた。言わずにいたのは、召喚大会のパートナーに誘ってくれなかった大地への当て付けのようなものだからね。

「来たか」

「お待たせ、根本君」

ボクは会場で今回組むことになった、Bクラス代表の根本恭二君と合流した。Bクラスの代表と組んでいただけに一回戦はすぐに片づいちゃったね。

「それにしても、今でも意外に思えるな。Aクラスの工藤が俺と組むと言った事には」

「そうかな？お互い利害が一致したんだし、不思議とは思えないけどね」

「その言い方だと、誰かを誘って断られたみたいだな」む、痛いところつくね、根本君は。

「根本君、自分で言ってる悲しくならない？」

凶星を突かれたので、突き返した。

彼が恋人である小山友香さんと出ていない事情は大地から聞いているんだよね。

「そう言われると、返す言葉もない……」

根本君は肩をがっくりと落とす。正直、彼はまだマシだ。ボクは大地に断られるどころか誘われずしてもらってないんだから。

『あれ、誰かと思えばBクラスの代表と……』

『Cクラスの代表が来ると思ってたんだが、違ってたな』

対戦相手の話し声が聞こえてきた。ただ、その声には聞き覚えがあった。

「よ、吉井に坂本！？お前らが相手か！」

根本君が対戦相手、Fクラスの吉井君と坂本君を見た途端、顔を引きつらせている。Fクラスと言えばボク達Aクラスの前にBクラスと試召戦争をやったって大地が言ってた。

「どうしたの根本君。吉井君と坂本君が相手だと何か問題あるの？」

「い、いや…何も無い。そうだな。この二人が相手なら楽勝だ」

楽勝と言う割には冷や汗かいてるのは気にしない事しておこうかな。

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めて下さい」

立会人は英語担当の遠藤先生だ。

「……試験<sup>サモン</sup>召喚」

Aクラス 工藤愛子 英語W 253点

Bクラス 根本恭二 英語W 199点

VS

Fクラス 坂本雄二 英語W 73点

Fクラス 吉井明久 英語W 59点

確かにこの点数差なら余裕で勝てるが…

でも、あの二人はあまり気にしてなさそうなんだよね

「じゃあ雄二。例のモノを」

「おう、これの事だろう？」

坂本君が懐から何を取り出した。

「そ、それは…！？」

あれが何かわかったのか、根本君の表情が凍った。

「さて、根本君。この写真集をバラ撒かれなくなったら」

あれ、写真集なんだ。どんな写真集なんだろう？

「おい明久。交渉の相手が違うぞ」

「え、そうなの？」

吉井君の肩を坂本君が掴む。交渉の相手が根本君じゃないとすると…

「確か、大地の幼馴染の工藤だったな？」

やっぱりボクか。まあ、普通に考えればそうだよな。

「そうだけど、なに？」

「これを見てみる」

そう言つて一ページ目を捲る坂本君。そこには恥ずかしげにポーズを取ってるスカート姿が見えた。…多分、根本君の

「さ、坂本！わかった！降参する！だかさその写真だけは…！」

あ、根本君が慌ててる。でもその反応だと、あれに写ってるのが自分だって言ってるようなものだよ？

「明久、根本を押さえる」

「ん、了解」

坂本君の指示で吉井君が根本君を羽交い締めにする。

「よしよし。さて、工藤。どういう経緯であいつと組んでるかは知らないがこの写真集が見たかったら、俺達に負けるんだ」

「さ、坂本！お前は鬼か！？」

根本君が泣きそうな声を出す。一応パートナーだし、助け舟を出した方が良いのかな？

「…良いよ、ボク達の負けで」

「交渉成立、だな」

坂本君が悪役のような笑みを浮かべて写真集をボクに手渡す。

よくよく考えたら、今ここで根本君が敗退したら小山さんが出続ける理由はないし、そうすれば彼女と組んでる大地も少しは暇になるから悪い話じゃないよね。

「でも、これは今見ないで大地に渡してもいいよね？」

「大地の奴はそんなモノを必要としているのか？恐ろしい趣味だな…」

「それ、本人に言ったらかなり怒るよ」

ボクとしても、大地に変な趣味があったら嫌だし。

「まあ、それは大地に渡すなり公表するなり好きにしてくれ」  
「うん、わかった」

その後、正式に吉井君と坂本君が勝ち名乗りを受けるの確認してからボクは会場を後にした。

流石に、これを持ち続けるのは辛いから早く大地に渡さないかね。

大地 side

「はあ、はあ……」

大地は息を切らせていた。会場に来るまでに全力疾走したからだ。

「たく、愛子の奴…オレが召喚大会に誘わなかったからって、クズと出る必要はないだろ…」

もちろん、クズとは根本の事である。

「だ、大地？ここで何してるのよ？」

「よお、友香。ちょっと気が変わってな。様子を見にきた」

「…試合ならちょうど終わったわ。恭二達、棄権したみたい」

「棄権した…？相手は？」

「Fクラスの問題児コンビ」

友香ははハッキリと嫌みを言ってくれた。つまり、相手は雄二と明久だと言っことだ。

まあ、クズを相手にあいつらがマトモにやるわけがないよな

「大地ー！」

雄二と明久が無事に勝ったことに安堵していると、自分と呼ぶ聞き慣れた声が聞こえた。

「愛子…」

ゴスツ

「痛っ！？いきなり何するのさ、大地！」

走り寄ってきた愛子に大地は拳骨を軽く落とす。思ったより痛かったらしく涙目になりながら文句を言うが、それ以上に文句は言いたいの大地だ。

「お前な、召喚大会に出るなら出るで一言言えよ」

「…誘ってくれなかった大地も悪いんだけどね」

「うぐっ」

愛子も愛子だが、友香と組むことになったその日に手続きを済ませたとは言え、その前に一言言っておけば良かった。その辺は大地にも落ち度がある。

「…ところで、さっきの試合は何で棄権したんだ」

「坂本君がコレを出したからかな？」

話題を変えて今の二回戦の事を聞くと、愛子は手にしている小冊子を見せてきた。

《根本恭二個人写真集》

「生まれ変わった私を見てっ！っ」

「……………（うぷっ）」

見た瞬間、吐き気がした。

あいつら、あの時女装させてたのはコレもあつたからか

ある意味、チャレンジャーだ。

「大地、顔色悪いけど、それは一体何？」

「あ、ああ、これが。これは目のど」

「ある人の隠れた趣味、じゃないかな？」

大地の様子を気にした友香に何て答えようか考えた末、目の毒だと言おうとしたら愛子に遮られた。…あながち間違っではない。

「ある人って…」

「（フウ）…根本のだ。とりあえず見てみる」

見た瞬間に使い道を考えた大地はあるがままの事実を話すことに決めた。手渡された写真集を見た友香の顔は青ざめていた。

「これ…ホントに恭二…?」

「オレ達との試召戦争に負けたBクラスには設備交換を見逃す代わりに根本に女装してAクラスへの宣戦<sup>もくせん</sup>布告をさせたんだ」

「あの時の、そう言う経緯があつたんだ…」

Aクラス所属の愛子は呆れながら納得した。

「だが、写真集を作るつもりはオレはもちろん代表の雄二もなかった。恐らく、一部の奴が勝手にやったんだろ」

「写真集を作ったって事は根本君は…」

「乗り気になった。そう考えられるな」

写真集の件は推測だ。女装の写真集なんて作りたがる意味がわからない。

「…友香。根本は二回戦Aクラス所属の愛子と組みながらうちのクラスのバカコンビに卑劣な策を用いられたとは言え負けたんだ。と  
言うことは」

「…こんな」

「ん？」

あくまで意見を言うていただけだが、友香の言葉に止められ、耳を傾けた。

「こんな趣味をしてる人と付き合っていたなんて、自分が恥ずかしく感じるわ」

「あれ、そこ？」

どうやら、結果を残せていないことより根本の趣味の方に頭が行っていたみたいだった。

「少し、気分転換をして来るわ。また三回戦の時に会場でね、大地」

「あ、ああ…わかった…？」

色々あったから考える時間をくれ、と解釈しても良いのだろうか。

「…で、何で愛子は根本と組んだんだ？」



友香が立ち去ってから、大地はもう一つの方を解決しようとした。

「え、何でって…えっと…」

難しい質問をしたわけではないのに、何故か愛子は言いよどんでいる。

「あー…ほら、根本君と小山さんって付き合っているでしょ？そこに大地が割って入るように小山さんと出場したから、ここはボクが根本君と組んで出たら面白いかなーなんて…」

まくし立てるように言って苦笑いをする愛子。何か怪しいが理由としては成り立っていないわけではない。

「ま、現実には根本は既に敗退して、こっちと当たるなんてのはなくなっただけだな」

どんな形でも、愛子と勝負するというのは面白かったかもしれない。しかし、今回は友香の事情を優先してはいるが。

「なあ、愛子。まだ時間に余裕はあるよな？」

「…え？うん、召喚大会も終わったし、店番もまだ先だから、時間に余裕はあるね。…もしかして」

「ああ、オレも三回戦まではまだ時間があるからその間は清涼祭を回るとしよう」

本来、今は愛子のクラスのメイド喫茶でゆっくりしている筈だったが、それもまともに出来てない。だったら、その分清涼祭を満喫する事を考えた。

「うん、わかった！それじゃあ早速いこー！」  
「いや、だからって急ぐ事も…おい、手首を掴んで走るな！オレがこける！」

あー、ビックリした！いきなり何で根本君と組んだか何て聞いてくるからビックリしたよ。

本当は大地という時間を少しでも作りたかったんだよ。

ただ、照れくさかったからああ言っちゃったけどね。

それに、ちゃんと約束を守るあたりは昔と変わらなくて良かったよ。

でも、いくら何でも子供っぽい反応だったかなあ…

18・5話 外道の悲劇（前書き）

18話からの連続投稿です

18・5話 外道の悲劇

あの子の友香と恭二…

「恭二」

「友香…。ははっ、なんだ。負けた俺を笑いに来たのか？」

「…これ」

「ん？それは…げっ!？」

「恭二の意外の趣味を知れて良かったと思っているわ」

「ま、待ってくれ！それはFクラスの奴らに無理やり…」

「その割にはずいぶん乗り気に見えるんだけど？」

「仕方なかったんだ！そうしないと、Fクラスの設備になるんだぞ！それを避けたいからとクラスの奴らにも…」

「もう、良いわ。約束を果たせなかった以上、これは必要無いものね。ちゃんと捨てておくわ」

「そ、そうか…」

「そして、あなたとの関係もね」

「え…」

「忘れてないでしょ？もし、召喚大会で好成績を残せなかったら…」

「待ってくれ！負けたのはあいつらの卑怯な」

「…さようなら」

「友香ぁー！…！！」

「…あ」

「どうしたの、大地？」

「いや、根本の個人写真集、友香が持ってたなーって」

「…流石に捨てるんじゃない？」

「愛子も、アレを持つのはキツかったみたいだな」

「うん、大地に押し付けて逃げようと思ったぐらい」

「ちょっと待て、そりゃどう言うことだ」

「大地がソツチの趣味があったならちようど良いかなーって、坂本君と話してたし」

「雄二と同意見だったのか！？それはシャレになんねえぞ！」

「大地だから、そんな誤解は生まれたいよ。きっと」

「きっとは余計だろ！オレは普通に女の子の方で好みがあっただな  
…」

18・5話 外道の悲劇（後書き）

まさかの1ページで終わっちゃった…

亜季「あくまで根本君の末路をやったんだから、良かったんじゃない？」

外道だけにね

亜季「それに、友香と付き合っていたみたいだけど、やっぱり友香には弟君みたいな子がピッタリだと思うのよ」

つまり、亜季さんは友香と大地の二人には付き合えと

亜季「それは二人の気持ち次第」

流石にここでは深くは言えませんか

亜季「ただ言えることは私は友香の恋路を応援するわ。慕われてる先輩としてね」

「ご自分の恋愛は良いんですか？」

亜季「それは聞かないで」

19話 巡り巡って(前書き)

お待たせしました

試行錯誤を重ねてようやく投稿です



## 19話 巡り巡って

「それじゃどこに行こうかな」

「楽しそうにしてる割にはノープランだったのか」

賑わう清涼祭を並んで歩いていく大地と愛子。愛子は先ほどから機嫌が良く、鼻歌が聞こえるぐらいだ。

「大地といるなら基本的に楽しめるかなって思っているからね」

「それは光栄だが、基本的にオレが考える事になってるよな？」

「ボクが考えると、一時間も保たないと思うよ？」

「一体何をやる気だったんだ……」

大方、常に全力疾走する気なのだろうが、清涼祭中は忙しい大地からしたら勘弁して欲しい事だ。

「そう言えば……天音さんのクラスが何やるか、大地は聞いてる？」

「姉ちゃんのところは確か……お化け屋敷だったな。まあクラスの内、

三人が生徒会にいるんじゃないかな」

「お化け屋敷だと、天音さんが何か仕込みそうだよな……」

「確かに。まだ飲食店の方が危険を感じない」

飲食店をやってるFクラスには危険があるのだが、それを愛子が知る必要はないだろう。

くっ……

「……………」

「あ、大地のお腹鳴った」

「そついや、もう昼時だったんだな。忙しすぎて気付かなかった」

しかも、Aクラスに行った時はまともに食べていなかったから尚更だ。とは言え、がつつり食う気分でもない。

「よし、うちのクラスに行くか」

「大地のクラスは…中華喫茶だっけ」

「ああ。様子を見に行きたいし、軽く飯にするなら丁度良いからな」  
「賛成。大地のクラスにはまだ行ってなかったんだよね」

「決まりだな」

本当は、妨害のあったあれからの様子が気になったのだ。客足が途絶えていたら厄介だから。

「中華喫茶、あまりお客さんいないね」

「妨害があつたみたいだからな」

案の定、Fクラスの中華喫茶に入る客がいなかった。

こりゃ、雄二と対策練らなきゃな

そんな事を考えると

「よお、我がクラスのサボリ常習犯」

「誰がサボリの常習犯だ」

向かいから雄二がやって来た。

「実際、店の仕事はしてないだろ」

「生徒会の方に加えて召喚大会にも出てるオレにどうしろと」

「そこは自分でどうにかしろ」

・無茶言つな

「それよりも坂本君。中華喫茶の方にお客さん、入ってないみたいだけど？」

「ああ、見てわかる。おかげでクラスの連中は暇そうだしな」

今の流れだと喧嘩に発展しそうだと感じた愛子が話題を変える。確かに、クラスの連中は暇そうにしている。

「暇な割りには何かを困んでいるように見えるがな」

その困まれている人物を知らなければ気にしなかったが、そうもいかなかった。なぜなら

「あれ、天音さんだよな」

「何やってんだよ姉ちゃんは……」

『ん！今の声は……大地と愛子ちゃんだ！ちよつと皆、どいてくれるかな？葉月ちゃんは、ちゃんと掴まってるね』

『はいですっ』

「……ふと思ったんだが、天音さんってすごい人だろ。……別の意味で」  
「うん、すごいんだよ。……別の意味で」  
「お前ら、褒めてるのが褒めてないのかわかんねえぞ。……別の意味で」

雄二の感想に愛子はよくわからない返事をする。ツツコんだ大地自身、微妙な感覚になっている。

そんなこんなで、天音はFクラスの馬鹿共の囲みから出てきた。もちろん、葉月の手を離すことなく。

「姉ちゃん。ここに来るなら連絡の一つぐらいくれよ」

「大地の友達がいるし、必要ないと思ったんだよ？」

「…葉月ちゃんを連れてるあたり、まだ見つかっていないんだな」

もし見つかったら天音と葉月は一緒におらず、天音がここに来ることもなかっただろう。

「なんだ、人を探しているのか？」

「ああ、姉ちゃんと手を繋いでる葉月ちゃんが、だけど」

「名前はわかるのか？」

「残念ながら、わかっているのは特徴だけ。葉月ちゃん、探している人の特徴を言ってくれるか？」

「バカなお兄ちゃんですっ」

興味本位で聞いてきた雄二にかいつまんで話す。葉月から探してる人物の特徴を聞いた瞬間、雄二や愛子、更にはクラスの連中も黙り込んだ。

「そうか…」

雄二が首を巡らせて、該当する人物を探す。

「…沢山いるんだが？」

自分は例外だと大地は信じたい。

「あの、そうじゃなくて、その…」  
「うん？他にも何か特徴があるのか？」

流石に大地もそれは初耳だ。それ次第では特定できる。

「その…すつごくバカなお兄ちゃんだっただんです！」  
「「吉井だな」「」」

かなり分かりやすい特徴だった。

「失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人  
違い…」

「あつ！バカなお兄ちゃんだっ！」

葉月が駆けていき、教室にいたと思しき明久に抱きついた。

「絶対に人違い…がどうした？」

「この状況でお前以外に当てはまったら奇跡だぞ？」

「…人違いだと、いいなあ…」

雄二と大地で明久に詰め寄る。

「つて、君は誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな年の知り合  
いはいないよ？」

気を取り直した明久が少女の顔を見る。

「え？お兄ちゃん…。知らないって、ひどい…」

葉月の顔が歪む。

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、綺麗なお兄さんや可愛いお姉ちゃんと協力して探したのに！」  
「そうだよ吉井君。葉月ちゃん、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら探していたのにその言い方は酷いと思っよ？」

明久まで泣きそうさ。だが、思い出さない明久も悪い気がする。

「明久：じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」  
「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

雄二と秀吉がなつてないフオローをする。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに……」  
「どんな約束をしてるんだ」

いくらなんでも飛躍しすぎだろう。

「瑞希！」  
「美波ちゃん！」  
「殺るわよ！」  
「ふあっ！」

いつの間にか現れて武力制裁がきた。

「姫路に島田か。二回戦も勝つたみたいだな」  
「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「こ、こうですか？」

大地の言葉も聞かず、明久の制裁をする二人。これはもはや止められそうになかった。と言うか、姫路はFクラスの影響を受けてしまっている事に不安すら覚える。

「ちょっと待つて！結婚の約束なんて、僕は全然……」

「ふええんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ！」

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」

「私の分もあるので十本お願いします」

「何が足りるんだ

「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」

「お願いひまふっ！はなひを聞いてくらはいつ！」

「このままだとクラスから幼女暴行犯がでた挙句、その容疑者が殺害される事件になりかねないね」

このカオスな状況を見て天音は思った事を口にしていった。

「姉ちゃん、そうなたら色々アウトだったのわかってるか？」

大地は一応、そう補足する。

「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちょっと待つてなさい」

「あのね、美波。包丁って一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」

「おい、お前らしい加減に……」

一向に修羅場が収まりそうにないので止めようとしたとき。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

葉月が島田を見て涙を止める。

「ああっ！あのときのぬいぐるみの子か！」

明久がいきなり大きな声をだす。

「やっぱりお前の知り合いか。もっと早く思い出させて」

大地は呆れながら明久を見る。

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月です」

「あれ？葉月とアキって知り合いなの？」

頬を膨らませる葉月の様子を見て島田が首を傾げた。というか自分の知り合いなら島田ももっと早く気づいて欲しいものだ。

「うん。去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「成程な…だったらお前が最初に気付け！」

そうつツッコまずにはいられない大地だった。

「吉井君はずるいです…。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみ付き合いなんですか？私はまだ両親にも会ってもらってないのに…。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃってたり…」

「姫路さん、どうしちゃったのかな？」



「気にしたら負けだ」

姫路の様子に違和感を感じているだろう愛子に気にしないよう言うておく。この程度で気にしたらFクラスと接するのが鬱になるだろう。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！ぬいぐるみありがとうございますでしたっ  
！」

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！毎日一緒に寝てますっ！」

「良かった〜気になってくれたんだ」

そう言っただけで嬉しそうに微笑む姫路。

姫路も葉月と知り合いだったようだ。なのになぜ誰も遭遇しなかったのだろう。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

そこで教室内を見渡す雄二の声。元々それを考えていたのだが天音と葉月とのやり取りで忘れていた。（2人が悪いわけでもないが）

「そっいえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？どんな話だ？」

雄二が屈んで葉月の目線に合わせる。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

「例の連中の妨害がまだ続いてるってワケか？」

俺は自分の推測を口にする。

「おそらく、来牙の言うとおりだ。探し出してシバき倒すか」

口元に手を当て、雄二も確信したようだった。

「例の連中って、あの常夏コンビ？まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

明久はあまり常夏コンビをただの嫌がらせ目的のチンピラぐらいにしか認識してないようだ。

「どうだかな。どちらにしろ、様子を見に行く必要があるな」

「そうだね。噂がどこから流れてるのかを確認しないと」

葉月が聞いているという事は他の連中も聞いていてもおかしくない。

「お兄ちゃん、葉月と遊びにいこっ」

葉月が明久の手を握る。

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

言いながら葉月の頭を撫でる。

「む。折角会いに来たのに」

葉月が不満げに頬膨らませる。喫茶店の成功は姫路の転校に関わる問題だから明久としても全力でやりたいのだろう。

「それなら、そのチビツ子も連れて行けばいい。飲食店をやってい

る他の店を偵察する必要もあるからな」

そこに雄二のフォローが入る。

「ん〜、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

葉月の表情が満面の笑みになる。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

「ふむ。ならば姫路や雄二、大地もと一緒に行くといいじゃろ。召喚大会もあるじゃろっし、早めに昼を済ませて来るとよい」

「そっか。悪いな、秀吉」

「良いんですか？ありがとうございます、木下君」

秀吉の提案に雄二と姫路は賛成している。だが、大地は…

「オレはこっちで済ませようと思ってたからパス」

元々、愛子と中華喫茶で軽く済ませようと言う話になっていたからそっちを優先する事にした。

「大地が行かないとなると、5人か。それでチビツ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えっとですね…短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店…」

「なんだって、雄二、それはすぐに向かわないと」

「そうだな明久！我がクラスの成功のために、（低いアングル）から綿密に調査しないとな！」

明久と雄二は聞いた瞬間全力ダッシュ。欲望に忠実な2人だった。

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです…」

「お兄ちゃんのバカ！」

その後続く三人の罵倒。

「：姉ちゃん。確認の為に聞くけど、どこのクラスなんだ？」

「愛子ちゃんのクラスだよ？」

「天音さん、行ってたんだ…」

留まった大地は葉月と行動していた天音に尋ねる。天音の答えに愛子は驚いていた。

「そう言えば、坂本君は代表と付き合ってるんだよね？」

「ああ、やっぱり知ってたか」

「モチロン。それで今、代表がシフトに入ってるんだけど知らせた方が良いかな？」

「必要ないだろ、多分」

愛子としては翔子が喜ぶの半分、冷やかし半分のつもりで考えてるのだろうが、それはいらぬお節介だろう。

・知らせようと知らせまいと、雄二は嫌がるだろうけど

行き先がAクラスのメイド喫茶だと知った時の雄二の顔が容易に想像できる。

「とりあえず秀吉。(まともな)胡麻団子に烏龍茶を2つずつに肉

まん頼む」

「うむ？お主が注文するのか？」

「客として、な」

ひとまずここに来た目的を果たそうと注文をする。それを聞いて秀吉は厨房に…

「了解じゃ。それと、じゃな…大地…」

「ん？」

向かわず、その場で顔を赤らめて俯いた。

・ああ、なるほど

今ここにいるのは秀吉以外には大地に愛子、天音がいる。（康太は厨房に行った筈）

それ故に秀吉の言いたい事はすぐにわかった。

「姉ちゃん。この後の予定は？」

「んー…義高君や亜季から連絡はないからしばらくは暇かな？」

「なるほど。秀吉ー注文した物早く持ってきてくれー」

確認した後、先ほど注文した物を早く持ってくるよう急かす。ちなみに棒読みだ。

「う、うむ、わかったのじゃ。それで、その、天音さんはどうするのじゃ？」

「え、私？そ、そうだねー…大地と同じのを、お願いして…良いかな？」

「…！わかったのじゃ！すぐ用意するのじゃ！」

大地の知る限り、今のは2人の初めての会話だろう。

「大地、焚き付けご苦労様」

「正直、必要があつたかどうかは疑問があつたけどな」

愛子と小声で会話しながら、向かい合うように席に着く。『文月のホストクラブ』と呼ばれてる大地も、恋愛経験がある訳ではない。あくまで、相手の仕草や言動を察してサポートしているに過ぎない。

「とりあえず、天音さんは席に着いたら？」

「ああ、ボケツとしてたら来たお客さんに変人扱いされるぞ」

「あ、うん。そうだね」

促される形で天音は大地の隣の席に座る。

とは言え、座っても若干だがポーツとしていた。

「改めて思うけど、2人共互いにベタ惚れだよな」

「見てるこっちがハズいぐらにな」

「そうだね」

天音と秀吉が惹かれ合ってるのを知っているだけに、2人の様子は見ているこちらが照れてしまうものだ。愛子も同様か、顔を赤らめている。

「お待たせしたのじゃ」

しばらくして、秀吉が戻ってきた。

「3人分とは言え、結構時間かかったんだな」

「ムツツリー二がおらんかったから少々手間取ったの」  
「あいつ、厨房担当だろ…」

どこに行ったかは気になるが、その内戻って来るだろう。  
とりあえず、食べる事にしよう。以前食べた時は地獄を見たから味  
わえていなかった。

「おお、美味しいな」

「あれ、大地はもう食べたんじゃないの？」

「んぐつ。い、忙しくてな。中々機会がなかったんだよ」

「ふーん…?」

愛子の質問に、胡麻団子を詰まらせかけた。確かに食べはしたが死  
にかけていたことなど言える筈がない。

20話 3月「弥生」 ? (前書き)

さて、には何が入るんでしょっね？

(wktk)



20話 3月「弥生」 ?

ヴー…ヴー…

「大地、携帯鳴ってるよ」

「誰からだろうな…」

携帯のディスプレイを見ると、相手は明久からだった。

「（ピッ）もしもし…」

『あ、大地。お願いがあるんだ』

「なんだ。営業妨害した奴を抹殺するならばレズにやれよ」

「いや、まず抹殺を止めようよ」

愛子のツツコミは流して明久からの用件を聞く。ただ事ではなさそうだったからだ。

『そりゃ、抹殺はするけど…』

「なんだ、オレの協力があるのか？」

『女装をして来て欲しいんだ』

「じゃーな（ピッ）」

真面目に話を聞いたらこれか。やはり、明久はアホだ。

「今のは、誰からだったの？」

「アホ久…ああ、吉井の事な。アホがアホな要求をしてきたんだ」

「一体どんな…？」

「言いたくは無い…ん、またか」

再び、携帯が鳴り明久だと思ったが雄二からだ。一緒にいるはずだし、少しは事情もわかるだろう。

「（ピッ）雄二、さっきのはなんだ」

『アホのアホによるアホな発言だ、気にするな』

「それは充分わかってる。まさか、アホ久の言ったことをマジでやらせるんじゃないだろうな？」

『半分正解だ。その為に秀吉を呼ぶつもりだったんだがな』

・なら、なぜにオレに連絡が来た

何をどう曲解したそうなるか、考えるのも馬鹿らしくなってきた。

「わかった。秀吉を向かわせれば良いんだな？」

『ついでに、大地は店番も頼む』

「ああ、だが3回戦があるから長くはやれないぞ」

『わかってる。そっちは任せたぞ』

ピッ

「さて、ゆっくりする時間もここまでか」

残っていた烏龍茶を飲み干して立ち上がる。

「その様子だと、用事でもできた？」

特に慌てることもなく、愛子が尋ねてくる。察しが良いのは助かる。

「ああ、3回戦までの間店番だ。秀吉は…」

秀吉をAクラスに向かわせようと様子を見ると、天音が（大地からパクった）肉まんを頬張ってるのを見ていた。その顔はいつも通りだが、実際はニヤケていそうだ。

「あー…秀吉。姉ちゃんの観察も良いが、Aクラスに向かつてくれないか」

「Aクラス…と言うことは天音さんの教室かの？」

「何でAクラスイコール姉ちゃんのクラスって考えた！？2年の方だ！」

「もう、大地。暗いお化け屋敷に秀吉君を連れて何する気？」

「だから違うって…と言うか、オレが連れて行くのが前提！？」

天音はともかく、秀吉に突っ込む日が来るとは思わなかった。

「とにかく、Aクラスに雄二達がいるから合流してくれって事だ」

「ふむ、了解じゃ…」

「それじゃ、ボクも戻ろうかな。大地が店番するなら、邪魔しちゃうからね」

「そうか。なら、何か用がある時に連絡でもして良いぞ。ある程度は対応する」

「ん、わかった」

愛子は笑顔で渋る秀吉の手を掴んでいった。

・秀吉、そこまで姉ちゃんといたかったのか…

秀吉には悪いとは思うが半分は要請してきた雄二にも責任はある。それは置いて、今は店番だ。

「店番って言っても、売り子がないんじゃないじゃ、客は来ない気もする

「がな……」

「確かに、このクラスは男の子が多いからお客さん、入りづらいかもね」

「……まだいたのか」

秀吉がいなくなったから、持ち場に戻ったと思っていた。

「お姉ちゃんがいると何か不都合があるの？」

「生徒会の皆あたりにな」

今頃、優子あたりがキレてもおかしくない。

「あ、そうだ。今の状況で集客アップの方法あった」

「……とりあえず、言ってみ」

あまり期待はしていないが。

「大地が女装する」

「さっさと生徒会の仕事行ってこい」

予想通りだった。

「え、女の子がいなくなったら後は大地が女装するしかないでしょ」

「その思考に待ったをかけさせろ」

「……天音さんの案、行けると思う」

「康太。気配を消しときながら姉ちゃんに賛成すんな」

いつの間にか戻って（？）いた康太にツッコみを入れる。

「それに大地の女装はスゴいからね。人気間違いナシ」

「……………期待してる」

「おい、康太。その手に持つてるのはなんだ」

「……………中華喫茶の制服」

「嘘つけ。うちのクラスは学制服に蝶ネクタイにした筈だ」

ちなみに、康太が手にしているのは言うまでもなくチャイナドレスだ。いつ用意したか、何てことを聞くのはややこしくなるからやめておこう。

「……………これも立派な制服」

「さも当たり前のようにオレに押しつけんな。絶対に着ないからな」

「……………こうなったらやむを得ない」

「わかつたら諦め……………」

「……………強制的に着せる」

諦めていなかった。

「協力するよ土屋君。私も、久しぶりに大地の女装を見たくなくなっちゃった」

更にもう一人。女装させられるなぞ、冗談ではない。ここは逃げるが勝ちだ。

「完成」

天音が満面の笑みを浮かべている。大地は特に何も言うことなくうなだれている。

結局、抵抗すること僅か30秒。天音と康太によって抑えられ…女装させられた。

「……………新商品はこれに決定。大地、ポーズをとってくれ」  
「写真を撮るんじゃないよ…」

大地の格好は普段後ろを簡単に束ねて垂らしている髪を上にあげてヘアピンで止めている。流石に化粧はされなかったがしっかりと赤のチャイナドレスを着せられている。

「はあく久しぶりの大地の女装姿…やっぱり可愛い」

そう言っただけ天音は抱きついてくる。脱力しきっている大地は天音を退けようとはしなかった。

「……………大地は昔から女装したことがあったのか？」  
「姉ちゃんに強制的にな…」

小学校時代にさせられた女装は、ここ数年なかったが清涼祭というこの状況がそうさせたのだろう。

「あ、そう言えば女装姿の時の名前決めてなかったから決めないと…」

「断固拒絶するからな」

「……………無難に『大美』とかは？」

「大地の名前にちなんでるんだよね？それもアリだけど…」

「…オレの意思はいずこへ…」

妙に盛り上がる天音と康太に大地は溜め息しかつげなかった。

「…うん、ここは『弥好』ちゃんで行こう。読み方も名字を彷彿させるし何より可愛い名前」

「……………漢字も中国っぽいからこの店のイメージと合って、結構良い。商会でも印象に残しやすい」

「康太…まさか売る気じゃないだろうな？」

「……………安心しろ、値は高めにしておく」

「問題はそこじゃないからな？」

もしも康太が隠し撮りしていたら押収して処分だ。それにしても、まさか女装どころかその名前まで決められるとは予想できなかった。

「じゃあ、張り切って接客しようか大地…じゃなかった弥好ちゃん

」

「頼むから着替えさせてくれ」

時間も限られてると言うのにこれでは客を呼ぶことなど出来やしない。

「ヴー…ヴー…」

「こんな時に誰から…」

もしかそろそろ3回戦の時間だからと言う事で友香からかと思い確認して見ると

「亜季先輩？（ピッ）もしもし」

『あ、弟君？今そつちに天音いる？』

「いますけど、そろそろ交代ツスか」

『さつき優子と義高の2人と交代したばかりだから、天音にも来てもらおうと思ってるね』

「あー…なるほど。なら直接電話すれば良かったんじゃない」  
『したけど繋がらなかったのよ』

自分に女装させることに夢中になってたからか。

「とりあえず、姉ちゃんはそのちに向かわせます。オレも召喚大会の合間を縫ってそっちに行きますよ」

『ああ、弟君は召喚大会に集中しても良いのよ？むしろそっちの方が良いわね』

「いや、オレはもう召喚大会はやる気がない…」

『友香はやる気だったわよ？』

「!?!いや、あいつは…」

耳を疑った。根本はもう敗退したから友香も召喚大会は終わりにするものだと思っていた。

「…とりあえず、姉ちゃんはそっちに向かわせます。それじゃ」  
『弟君も召喚大会頑張ってるね』

ピッ

「はあ…」

ひとまず、着替えることにしよう。髪型はともかくこの格好では誤解を招く。

天音を持ち場に行かせた後、大地は会場に急いで向かった。

「…その髪型はどうしたの？」



「イメチェンだ」

友香との合流後、予想通り（？）髪型について聞かれた。

「あれから根本とはどうした？」

「気になるのかしら？」

「それが理由で組むことになったんだ。結果がわからないと気分が悪くなる」

「…別れたわ。あっさり負けた事もだけど、あんな趣味を持ってたらね」

あれはFクラスが無理矢理した事だが…その際の根本の表情次第ではそう思われるだろう。

「それよりも友香、優勝する気でいるってどういっつもりだ」

「…そのままの意味よ」

大地の質問に友香は顔色一つ変えずに答える。

「お前、オレと組んで召喚大会に出るのは根本を試すため、奴を焚き付けるってのが目的だったろ」

「そうよ。で、それも済んだから後は優勝を狙うだけ」

「あの口振りからそれは感じなかったぞ」

もっとも、優勝を狙わないとも言っていないが。だが大地も優勝するしないは気にしていない。

「そもそも、大地が私と組む事にしたのは試召戦争の時にした、『頼みごとを何でも一つだけ引き受ける』って約束を果たすためじゃない！」

「ああ。だから、『根本と当たるまで組む』って事で引き受けただろ」

だんだんと苛立ってきたのか、友香の語調が変化してきている。大地が言ったことはあくまで自分がそう解釈しているだけだが。

「そうは言っていないでしょ!？」

「お前が優勝する為に組んでくれ、って言っていればオレは最後まで付き合ったださ。だが、お前の言うとおり、そんな話はしていないかった。だからオレはもう召喚大会に出る意味がない」

「あなたは私に依頼された、言わば雇われの身なのよ?雇い主の言うことを…」

「依頼されたのは召喚大会に出ることと優勝は別問題だ」

「2人共、喧嘩はせずに試合の準備をしないさい。対戦相手も待ちくたびれていますよ」

互いに譲る事はなく言い争いをする大地と友香。だが、現代社会の教師の言葉で、今は召喚大会の3回戦だと言うのを2人は思い出した。だが…

「「アンタ(先生)は黙ってる(いてください)!!!」」

「せ、せめて召喚獣は出さない」

「「サモン試獣召喚!」」

仕方なく召喚獣は出すが点数は見ない。

今は自分たちの方が優先だ。

「大体、何で大地はそこまで優勝する気がないのよ!」

「オレから言わせれば、お前こそ何で優勝する気にいるんだ!賞品に興味は…」

そこまで言っつて、大地はふと気付いた。何故友香が優勝する気になったか、更に言えば友香が優勝する気になったと誰から聞いた。…亜季だ。友香と同じ部活にいるあの人が。

「何で焚きつけたんだ亜季先輩ー！」

「い、いきなり頭を抱えてどうしたのよ」

突然の変化に友香は戸惑っている。それの他に対戦相手の男女2人が何か騒いでいる。そう言えば今は3回戦の最中だった。

「はぁ…面倒だな畜生」

そう呟いて大地は召喚獣を男子生徒の方に向かわせて叩きつけるように武器を振るう。相手の召喚獣は一刀両断にされ、女子生徒の召喚獣も攻撃の余波で後ろに飛ばされる。

「友香。とどめ、刺してくれ」

「え、ええ…」

友香は言われるがまま、女子生徒の召喚獣を倒す。大地の攻撃の余波を喰らったとは言え、友香が簡単に倒せたことからAやBクラスではないだろう。今となってはどうでも良いことだが。

「…友香。確認程度に言わせてくれ。亜季先輩に焚きつけられたろ」

「…さ、さあ？何の事かしらね？」

「目が泳いでるからな？」

どう考えても凶星だ。わかりやすいぐらいに。

「ま、まあさつき先輩に会っていたのは否定しないわ」

「ま、亜季先輩に会っていたかどうかはこの際どうでも良いか」

問題は、召喚大会に出続けるか否か。亜季先輩に焚きつけられたとは言え、優勝を狙うのは紛れもない友香の意思だ。今更だがとやかに言ったのは野暮だったか。大地は一度溜め息をつけてから、今決めたことを言う。

「こうなったら、行けるとこまで付き合っただけか」

「…一体どういう心境の変化なの？」

「開き直っただけだ。それに、約束を違えられたのは変わらないからその分は…そうだな、ウチのクラスの手伝いぐらいはしてくれ」

「拒否権は…なさそうね」

「当然。ちなみに、手伝ってもらう時はこっちから連絡するしオレもその場にいるつもりだ。文句はないだろ」

「ないわ。私の方に付き合わせちゃうわけだし、それぐらは、ね」

「これでよし、と」

結果的に言えば、召喚大会には引き続き出ることになり、大地が忙しい事には変わりはない。だが、いざという時の人員は確保出来た。ただ、唯一忘れていた事がある。

それは、

20話 3月〃弥生〃 ? (後書き)

結果、大地が女装しました(嬉)

天音の暴走には逆らえず(泣)

更には雄二とのアホの連呼(楽)

しまいにゃタイトルに恥じない苦勞人っぷり(呆)

大地が過勞死しないことを祈るばかりです(笑)

## 21話 妨害と対応策（前書き）

やっと出来ました

学園黙示録の二次創作も始めたんでそっちもヨロシクお願いします

## 21話 妨害と対応策

「スンマセンっしたー！自分、調子こいてましたー！」

教室に戻ると、島田にやられた（自業自得）明久の情けない姿を見た。他にも雄二、秀吉、姫路、葉月の姿もある。康太はまた気配でも消したか、作業しているのだろう。

「…何やってんだ」

「ああ、大地。戻って来たのか。実はな…」

呆れながらも、雄二に事情を尋ねた。

秀吉が雄二達と合流した後、（結局）女装した明久と雄二が常夏コソビを真つ当な口実の下、シバいたが逃げられたらしい。それで慌てて行った3回戦も相手が食中毒で不戦勝。

「…で、今は今後の対策会議中だ」

「食中毒で不戦勝って、2件目じゃねーか…」

「既にあつたのか？」

「ああ、オレの2回戦の相手がな」

ちなみに、その被害者はまだ保健室のベッドの上である。

「それで、対策会議をしているのはわかるが…何をしたら、アホウの情けない面白い様が見れるんだ？」

「店のアピールの為にこれを着せようと思ってな」

「そ、それは…」

大地は忘れようがない。3回戦の前、天音と康太に無理矢理着せら

れた、あのチャイナドレスは。

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？前に須川は、チャイナドレスは着たりすることはない、って言ってたと思うけど」

島田が渋い顔をしながら言う。大地からしたら須川が本当に言ったかどうかを疑いたい。

「店の宣伝の為と、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

雄二が理由を話ながら明久に話を振る。いきなり話を振られた明久は

「大好 - 愛してる」

アホな答え方をした。

「：お前は本当に嘘をつけない奴だな」

「そんな答えを言う奴、中々いないぜ？」

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、着てあげるわ」

「そ、そうですね！お店の為、ですしね！」

雄二と大地は呆れている。その一方で、島田と姫路がそれぞれ服に手を伸ばす。

「馬鹿なお兄ちゃん、葉月の分は？」

「え、葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い…あ、はいです！手伝いますから、葉月にもあの服欲しいです！」



「良い子すぎる…！」

とても島田の妹とは思えない。

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの方は…」

「……………！（チクチクチクチク）」

「む、ムツツリーニ！どうしてそんな勢いで裁縫を！？」

「お前、さっきまでいなかっただろ！？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

大地と明久の驚きに、誇らしげに言う康太。康太の言っている事は格好良い台詞の筈だが、非常に格好悪い。

「それじゃ、3回戦が終わったら着替えますね」

姫路が腕時計を確認している。これから行くみたいだが…

「いや、今着替えてもらいたい」

「え？」

遮るように言う雄二の言葉に姫路と島田の声が重なった。

「一般公開されているから、宣伝の為にそれを着て召喚大会にでくれ」

その一般公開されている状況で大地は友香と言い争いしていた事になる。今にして思うと気恥ずかしい。

「こ、これを着て出場しろって言うの…？」

「流石に恥ずかしいです…」

2人ともチャイナドレスを手に困った顔をしている。その格好をして動き回るのはきつと恥ずかしいのだろう。

「さっき女装していたの、雄二にバレなくて良かった…」

雄二が知っていたら今頃、弥好やよいの格好にされているはずだ。

「2人とも、お願いだ」

明久が頭を下げる。そこにどんな意思があるかはわからない。

「明久：お前は本当にチャイナが好きなんだな…」

「今その事をカミングアウトしなくても良いんだぞ？」

わかってるのは、明久が姫路の転校を望んでない事、そしてチャイナドレス姿を見たがっている事だ。

「もしかして吉井君、私の事情を知って…」

「仕方ないわね。クラスの設定の為に、協力してあげようじゃない。ね、瑞希？」

姫路の言葉を遮って島田が色よい返事をする。

「あ。は、はいっ。これくらいお安い御用です！」

姫路も快諾。もしも2人とも拒んだら…それを考えるのはよそう。

「それならすぐに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たちがFクラスの所属だと言うのを強調するんだ」

Fクラスの女子がチャイナドレスを着て試合に出る。そうすることで店の宣伝とFクラスのレベルのPRと言う2つの目的が果たせる。

「オツケー、任せておいて。行く、瑞希」

「はいっ」

2人はチャイナドレスを抱えて教室を出て行く。

「……………できた」

「わ、このお兄さん凄いです!」

恐るべき速度で葉月用のチャイナドレスが出来上がっていた。下心が絡むあたり、ムツツリー二と呼ばれる所だから。

「で、秀吉もそれを持つてるのはどうしてだ？」

「何故かワシの分も用意されてあったのじゃ……」

それ、とは秀吉の手にあるチャイナドレス（緑）の事だ。

「…まあ、秀吉なら似合うと思ってるから用意したんだろ。気にせず着替えておいたらどうだ」

「そうじゃな。それでは着替えるとするかの」

「ちよ、ちよつと秀吉!ここで着替えるの!?きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ!」

男であるハズの秀吉を注意する明久。良くそんな考えに行き着くものだ。

「…明久がワシの事を女として見ておるような気がするんじゃが」

「触れたら負けだぞ」

「ああ。秀吉は秀吉だろ」

「雄二の言うとおりだよ。秀吉は、性別『秀吉』で良いんだよ」

そんな性別は聞いたことがない。

「…俺が言ったのはそういう事じゃない」

雄二の言わんとする事がわかる大地は、雄二と同様呆れていた。

「……………ところで、大地はあれにならないのか？」

「あれ？あれって一体…」

「……………弥好」

「康太あ！ちよつとこつち来おい！」

康太の発言に明久は首を傾げたが、次に言ったことに大地はいち早く反応し、康太の首根っこを掴んで明久と雄二から距離を取る。

（お前、何で今暴露しようとした。どう考えても必要ないだろ）

（……………あれだけ出来が良かったならまたやるべき）

（あれは人が足りないからやったんだっ。今は秀吉や葉月ちゃんがいるから必要ない）

「おーい、何をコソコソやってんだー」

2人に聞こえないよう、小声で話していたのが裏目に出た。雄二の言葉が棒読み聞こえる。

「いや、何、ちよつと康太に頼み事をな」

「お前の焦りようからそれは違うだろ。さっきムツツリー二が言っ

た、ヤヨイ…だったか…」

思い切りバレてる上に弥好の事まで指摘されている。隠すのはもう無理か。

「お前の知り合いか？」

「……………」

知り合いで済めばどんだけ楽だったか。

康太が否定して事実を言わないよう、黙らせようと思ったが…。

「んしょ、んしょ…」

「は、葉月ちゃん！君もここで着替えたらダメだって！ムツツリー二が出血多量で死んじゃうから！」

康太は唐突に着替え始めた葉月を見て鼻血を出していた。

- 葉月ちゃん。ある意味、グッジョブ！

心の中でグッドサインを出したい程だ。

葉月のおかげで大地は弥好にならずにすんだのだから。

「……………大地、厨房の方を手伝ってくれ」

「ああ、わかった」

あれから明久がチャイナドレスを着た秀吉と葉月を連れて校舎内を歩き回っていた。その宣伝が効いたのか、徐々に客足が増してきた。

「たっただいま〜」  
「ただいま戻りました〜」

島田と姫路も戻って来た。声の調子から3回戦は無事に勝ったようだ。

「一時は大丈夫かと思っただが、この調子なら問題なさそうだな……って康太。カメラを構えるんじゃない」

「……………ちゃんと仕事はしている」  
「説得力を感じないんだが？」

何故なら康太は床に這いつくばり、厨房から顔を覗かせながらデジカメを構えている。これを不審がらない人間はいないだろう。

「注文入りました〜」

そこに姫路がやって来て

ムギユツ

康太を踏んだ。

「わわっ、土屋君！？床に伏せて何してたんですか？」

「……………何もしていない」

カメラを手にしてる時点で何を言っても説得力はない、と思ったが康太の手には何もなかった事に気付いた。

- いつの間にかカメラを隠したんだ

「…それより姫路。注文があつたんじゃないのか？」

「あ、そうでした。胡麻団子2つに烏龍茶3つ、お願いします」

「あいよ」

注文が入ったことを思い出した姫路が一通り告げる。それを聞いて大地は用意した。

「ほい、お待たせ」

「ありがとうございます、それでは行ってきます」

「頑張つてな」。…それより、今ので色々補充する必要があるな

補充する必要があるのは茶葉だ。水分補給目的で来る客がいる以上、仕方がない。

「……………他に補充の必要があるか確かめておく」

「ようするにオレに持って来いと」

その問いに康太は頷いた。大地はため息をつきながら取りに行こうと…

「ああ、それはすまない。だが私はどうしても教え子である君の事を吉井君（馬）とは呼べなくてね」

「あの、僕は職員室でなんて呼ばれているんですか？」

・馬鹿以外ないだろ

大地は教頭の竹原と話している明久を目にした。話の内容はともかく、今の大地にとって好都合だった。

「アホ…明久。茶葉がなくなつたから持ってきてくれ」

「ん、わかった。先生、ちょっと行ってきても良いですか？」  
「構わんよ。特に用があつた訳でもないのね」  
「そうだったんですか？」

なら何故会話していた、と普段なら聞いたが今はこっちが優先だ。

「明久。急いで持ってきてくれよ？」  
「はい」

明久もそれを理解していてすぐに取りに向かった。

「……………」

大地はふと、教頭の様子に違和感を感じたが、気にせず仕事に戻った。

「お、丁度良いところに」

「…お前の言う丁度良いは面倒以外無い気がするぞ」

厨房では康太と話している雄二がいた。雄二がニヤリと笑みを浮かべたことに大地は嫌悪感を出した。

「……………あながち、そうでもない。餡子もなくなつたから雄二に頼んでいたところ」

「量も多めに必要みたいだしな」

「で、雄二はオレにも手伝わせて少しでも楽するわけか」

こんな事なら自分で茶葉を取りに行けば良かったと心の底から思っている。

結局、大地は雄二と空き教室に向かった。



「なんにしても良いことだとは思うぞ。補充する必要が出るってことは、それだけ客が集まってるわけだからな」

「その分、忙しくはなってるけどな」

良い方向に向かっていている事を喜びつつ、皮肉をいう大地。空き教室の前に着くと、中から騒ぎ声が聞こえてきた。

「何やってんだろうな、あいつは」

「馬鹿だから気にするな」

大地の問いに雄二は軽く答えながら、空き教室の扉に手をかけた。

「おい明久。ムツツリー二が茶葉の他にも餡子も急いで持ってきてくれと」

「あ、雄二に大地。丁度良かった」

明久がタイミングよく来たと言わんばかりの表情をする。

「ん？なんだこいつらは？」

雄二が眉をひそめる。当然だ。男が3人いるが全員、学園の生徒でなければ知り合いでもないのだ。

「よくわからないけど、雄二と喧嘩したいらしいんだ。だからあとはヨロシク」

「なんだそりゃ？」

戸惑う雄二を引き入れ、それと入れ替わるように明久が廊下に出る。

『おい明久、これは…ああ、なるほど』

『コイツどうする？』

『面倒だから一緒にやっちまおうぜ』

そんな会話が聞こえる中、明久に尋ねた。

「で、これはなんだ？雄二は気づいたみたいだが」

「僕もさっぱりわかんない。あ、出来ればこの事は内緒にして欲しいんだけど」

「…幸い、周りは気付いてなさそうだし事情次第だな」

生徒会にいる以上は喧嘩は止めた方が良いのだが、閉め切った空き教室ならある程度は対処できる…

「お、覚えてろっ！」

「てめえの面、忘れねえからな！」

「夜道には気をつけるよ！」

筈だったが、あっという間に退散する3人組を見てそれはやめることにした。

「見事な負け犬の完成だな」

大地は軽く笑いながら言う。

「さすが雄二だね、それであの連中はなんだったかわかる？」

「売れ行きがよくなったFクラスの妨害でもしに来たんだろ」

「あはは。そんな理由で絡んでくるバカはいないよ」

「どうだかな。とりあえず急いで戻るぞ。ムッツリーニが待っている。」

「はいよ」

明久は雄二の言った事を笑い飛ばしたが、大地はその言葉に説得力を感じた。それと同時に今回のようなトラブルが起きないよう気を配る必要もできた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1570t/>

---

苦勞人なホストと召喚獸

2011年10月17日18時54分発行